



TITLE:

# 物語世界への没入体験 -測定ツールの開発と読解における役割-( Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

小山内, 秀和

---

CITATION:

小山内, 秀和. 物語世界への没入体験 -測定ツールの開発と読解における役割-. 京都大学, 2014, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2014-03-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18020>

RIGHT:

許諾条件により本文は2015-03-01に公開

物語世界への没入体験  
—測定ツールの開発と読解における役割—

2014 年  
小山内 秀和

## 目 次

第1章 序論	1
第1節 はじめに	2
1-1-1 人間と物語の関わり	2
1-1-2 物語とは何か	3
第2節 物語世界への没入体験	4
1-2-1 物語への学問的注目	4
1-2-2 物語世界への没入	5
1-2-3 本論文の構成	6
第2章 物語読解における没入体験	9
第1節 物語読解の認知的過程	10
2-1-1 物語理解研究	10
2-1-2 状況モデル理論	12
2-1-3 状況モデルと物語世界	13
2-1-4 物語理解と物語読解	14
第2節 物語読解と没入体験	15
2-2-1 催眠感受性と没入	16
2-2-2 物語への移入仮説	17
2-2-3 フロー体験	19
2-2-4 登場人物への同一化	19
2-2-5 共感と感情移入	20
2-2-6 没入体験を統合的に捉える試み	21
2-2-7 没入概念の構成要素	23
第3節 本研究における問題設定および目的	26
2-3-1 没入体験と文学的体験	26
2-3-2 没入体験と読書習慣	28
2-3-3 没入体験傾向と没入状態	29
2-3-4 物語理解過程における没入体験	30

2-3-5	本研究の目的	31
第3章	日本版文学反応質問紙の作成	33
第1節	文学反応質問紙の概要	34
第2節	文学反応質問紙の予備的検討（研究1）	35
3-2-1	方法	35
3-2-2	結果	35
3-2-3	考察	39
第3節	日本版文学反応質問紙の信頼性と妥当性に関する 調査的検討（研究2）	40
3-3-1	方法	41
3-3-2	結果	42
3-3-3	考察	44
第4節	まとめ	47
第4章	文学的体験と読書、余暇活動との関連	49
第1節	没入、文学的体験と読書活動	50
第2節	女子大学生における文学的体験傾向と読書習慣の関連に 関する調査的検討（研究3）	51
4-2-1	方法	52
4-2-2	結果	52
4-2-3	考察	55
第3節	文学的体験傾向が読書活動に及ぼす効果に関する ウェブ調査による検討（研究4）	58
4-3-1	方法	59
4-3-2	結果	60
4-3-3	考察	65
第4節	まとめ	68
第5章	物語読解時の没入状態の生起に関する検討	69

第1節	物語読解と移入 - イメージモデル	70
第2節	日本語版移入尺度の作成および信頼性と妥当性の 検討 (研究5)	71
5-2-1	方法	72
5-2-2	結果	73
5-2-3	考察	75
第3節	物語への没入傾向が移入体験の生起に及ぼす効果に 関する調査的検討 (研究6)	77
5-3-1	方法	78
5-3-2	結果	79
5-3-3	考察	80
第4節	まとめ	83
第6章	没入体験が物語読解に及ぼす効果	84
第1節	読解過程への実験的アプローチ	85
第2節	没入体験傾向が物語読解過程に及ぼす効果に関する 実験的検討 (研究7)	86
6-2-1	方法	87
6-2-2	結果	88
6-2-3	考察	94
第3節	没入教示が物語読解過程に及ぼす効果に関する 実験的検討 (研究8)	97
6-3-1	方法	97
6-3-2	結果	99
6-3-3	考察	102
第4節	まとめ	105
第7章	総合的考察	106
第1節	本論文で得られた成果	107
7-1-1	没入体験傾向を含む文学的体験傾向の測定	107

7-1-2	没入体験が物語読解に及ぼす効果	108
第2節	没入体験に関連する心理・環境的要因	109
7-2-1	没入体験傾向と没入状態	109
7-2-2	没入体験傾向に関連する心理特性	110
7-2-3	没入体験傾向と読書習慣	112
第3節	物語読解過程における没入体験の位置づけ	113
7-3-1	物語読解において没入体験が果たす役割	114
7-3-2	物語読解 - 没入モデル	115
7-3-3	本モデルと各理論との関係性および検討課題	117
第4節	物語への没入から物語読解を捉えなおす試み	119
第8章	結論	122
第1節	本論文の持つ意義	123
8-1-1	学問的意義	123
8-1-2	実践的意義	124
第2節	本論文の課題および展望	126
8-2-1	今後の課題	126
8-2-2	物語研究の展望	127
第3節	終わりに	128
引用文献		130
付録		144
本論文と公刊された論文との対応について		161
謝辞		164

## 第 1 章

---

### 序 論

## 第1節 はじめに

### 1-1-1 人間と物語の関わり

我々は日々、物語に接している。例えば書店や図書館に行けば多くの小説や文学作品が並んでおり、日常的に物語に触れる機会が多い。新聞やテレビなどのメディアを通して伝えられるニュースもまた、出来事の推移を伝える物語だと捉えることができるかもしれない。そして小学校や中学校の国語科では小説を読むことが取りあげられ、それらを通して文章の理解や推論のスキルを培うことが目指されている（文部科学省, 2008a, 2008b）。おそらく、我々が物語に一切触れることなく人生を過ごすことは極めて困難であろう。

人間と物語との関わりは、人間が言語を用いはじめた瞬間にまで遡ることができる。進化論的観点から物語について考察した Boyd (2010) は、人間が知性を進化させる過程に関連して、自分たちの周囲で起きる事象などを出来事として理解することができるようになり、それらの流れや経緯を芸術などの形で残すようになったと指摘している。やがて言語を用いはじめた人間は、出来事を口承や語りの形式で理解し、また伝達するようになる。そして言語を表す記号として文字が用いられるようになると、こうした語りを、文字を用いた作品として残すようになり、こうした一連の過程が虚構 (fiction) の生産につながったと述べている (Boyd, 2010)。もちろん、現代に生きる我々がその実態を直接知るのは困難であるが、聖書などの古いテキストによる研究を通してその一端を垣間見ることはできる (Barthes, 1961-71 花輪訳 1979)。わが国においても、現存する最古の書物である古事記の序文には、物語を文字として残すことの困難さが述べられている<sup>1</sup> (倉野, 1963)。物語をめぐる現在に至るまでの人間の歴史を詳しくたどることは本論の本旨ではないので、これ以上は他書に譲るが (例えば、国文学的観点から物語や神話を検討した折口 (2002, 2003) など)、人間は文明の極めて初期から物語とともに歩んできたことは論をまたない (Oatley, 2011)。

それでは、人間はなぜ現代に至るまでの長い間、物語と関わり続けているの

---

<sup>1</sup> 古事記の序文には、「言意ならびに朴にして、文を敷き句を構ふこと、字におきてすなわち難し」(倉野, 1963, p. 16) という一節がある。



だろうか。この問いへの回答を得ることは容易なことではないが、その手掛かりの一つは、我々が物語に触れるときにどのような体験をしているかを解明することにもあるように思われる。本論文は、人間が古くから関わってきた物語を読むという行為に注目し、人間が物語を読む過程においてどのような現象が生じているのかを心理学的手法を用いて実証的に検討するものである。

### 1-1-2 物語とは何か

まず、そもそも「物語」(narrative, story)とはどう定義されるのだろうか。これまでに、心理学に限らずさまざまな学問領域、また批評の領域で定義の試みが行われてきた(例えば, Barthes, 1961-71 花輪訳 1979)。たとえば Genette (1972 花輪・和泉訳 1985)は、物語には三つの概念が含まれていると指摘している。第1は一般的な辞書的定義にも通ずる、一つあるいは一連の出来事を記したものという意味、第2はもう少し厳密な、複数の出来事の継起とそれらの関係性という意味、そして第3は個人の経験した(あるいは創作した)出来事を語る行為という意味である。文学理論では第2や第3の意味が重視されることが多いが(e.g., Iser, 1976 轡田訳 1981), このように物語の定義は実に多様であり、物語に特定の定義を与えることはできないとする指摘(真銅, 2007)さえ存在する。

以上のような定義は文学理論の領域において行われたものであるが、心理学においても物語はさまざまな領域で検討されており、認知心理学では文章理解プロセスを解明する一環として(e.g., Sanford & Emmott, 2012; Radvansky, 2012), 発達心理学では子どもの認知的発達と結びつけて(e.g., Engelen, Bouwmeester, de Bruin, & Zwaan, 2011), また社会心理学では物語の説得や態度変化の効果に着目して(e.g., Green & Brock, 2000), そして臨床心理学では物語の持つ治療的意義を探るように(e.g., Greenhalgh & Hurwitz, 1998 斎藤・山本・岸本訳 2001), それぞれ研究がなされている。これらの研究のなかで用いられたり提案されたりしている定義もさまざまである。例えば Bruner (1986) や Green & Donahue (2008) は物語を、因果的つながりで結びつけられた複数の出来事と登場人物とを提示するものとして捉えている。一方 Mar & Oatley (2008) は、物語は出来事の一連の流れを示しつつ、複数の登場人物の関係性と、人物たちが抱く意

図や欲求の推移を描くものだと指摘している。さらに Sanford & Emmott (2012) は、主に出来事の因果関係についてはこれまでの定義に共通点がみられることを指摘し、(a) 出来事が表象、あるいは推論できる形で示されていること、(b) 出来事や登場人物の状況などが継時的に示されていること、そして (c) 先行する出来事とその後の出来事に因果的な影響を与えていること、という定義を提案している。このように研究者によってさまざまな定義を与えられているが、本論文では物語の定義として「単一あるいは複数の登場人物が関わる出来事が、継時的に、かつ因果関係が明示あるいは暗示された形で記述されている文章<sup>2</sup>」を提案する。

なお、物語に類似した概念として小説 (novel) や文学作品 (literature)、そして虚構 (fiction) というものがある。このうち小説については、上記の定義に従えば物語に包含されるものと考えてよいであろう。文学作品には散文と韻文、さらには随筆といった区分が存在するが、多くの文学作品は上記の定義を満たしていると考えられるため、本論文では小説と同様物語に含まれる一群の文章として扱う。一方、虚構は実際の出来事ではなく作者や語り手が想像のなかで生みだしたものと考えられるため (Boyd, 2010; Oatley, 2011)、物語には虚構と非虚構 (non-fiction) の二つが存在すると考えられる。本論文の実証的検討では主に虚構の物語を用いるが、そのことは決して、本論文で述べる物語に触れたときの体験の性質が非虚構の物語には適用できないことを示すものではないことを、ここに記しておく。

## 第2節 物語世界への没入体験

### 1-2-1 物語への学問的注目

物語文章を読むとき、我々はその内容をただ理解するだけでなく、感情生起をはじめとしたさまざまな経験をする。例えば、読みながらその内容に興味をそそられ、時に興をそがれ、また共感し、感動し、興奮するといったように、

---

<sup>2</sup> 物語の形式としては文章以外にも実写映像、アニメーション映像、演劇などのメディアが存在するが、これまでの研究の多くが文章による物語を扱っていることに鑑み、本論文では物語文章に焦点を当て、これを用いた検討を行う。

読みに伴ってさまざまな感情が体験されるものである。近年、心理学や文学、コミュニケーション学などの領域において物語に対する注目が集まってきており (Bortolussi & Dixon, 2003; Oatley, 2011; Sanford & Emmott, 2012; Zunshine, 2006), とりわけ物語を読むことによる効果にアプローチする研究が増えてきている。これまでに、物語を読むことで個人の態度変化が生じることが指摘されたり (Chang, 2008; Green, 2004; Green & Brock, 2000; van Laer, De Ruiter, Visconti, & Wetzels, in press), また物語を読むことで他者理解能力や対人スキルが向上することが示されたりしている (Djikic, Oatley, & Moldoveanu, 2013; Kidd & Castano, 2013; Mar & Oatley, 2008; Mar, Oatley, Hirsh, dela Paz, & Peterson, 2006; Mar, Oatley, & Peterson, 2009)。こうした効果の背後に物語を読むときの体験が影響していることは明らかであり, 例えば Green & Brock (2000) は物語による説得効果の要因として物語への移入という読者の体験を挙げている (移入については第2章で考察する)。それでは, 読者は物語を読むときにどのような現象を体験しているのだろうか。本論文ではこうした体験のうち, 読者が物語に入り込むという体験に特に焦点を当てる。

### 1-2-2 物語世界への没入

1-2-1 で述べたように, 物語に触れるときにはさまざまな体験が生じるが, その体験には, 読みながら物語の情景を生き生きとイメージし登場人物に共感することで積極的に物語世界へと入り込み, 物語の世界をさながら現実の世界であるかのように感じるといった体験をとまなうことがしばしばある。そしてそれは時として, 作品とその登場人物とに世界や人間の本質を見出すといった体験にもつながることがある。こうした体験の存在は, 古くは平安時代から知られていたことが文学作品などから垣間見ることができるが<sup>3</sup> (e.g., 與謝野, 1971), 心理学の領域においてこうした体験は早くは Nell (1988) が論考を加えている。Nell はその著書”*Lost in a book*”のなかで, 読書という活動は特別なものであり, とりわけ読者は楽しむための読み (reading for pleasure; ludic reading)

---

<sup>3</sup> 源氏物語の第25帖「蛭」には, 物語がたとえ嘘や作り物であったとしてもその内容は「どうしてもほんとうとしか思われないのでございますよ」(與謝野, 1971, p. 92) と述べる玉鬘が登場する。

をしていると指摘している。そして、そうした読書が持つ大きな特徴の一つとして、読者が容易にその活動に熱中して作品に書かれた世界を現実のように体験できるという点を挙げている。読者が物語に入り込むことはこれ以外にも、“absorption” (Tellegen & Atkinson, 1974) や “reading involvement” (Baum & Lynn, 1981; Fellows & Armstrong, 1977), “transportation” (Green, 2004; Green & Brock, 2000) など、これまでに様々な用語で記述され、また理論的な論考や実証的検討も多く行われてきた。それでは、こうした体験とは具体的にはどのようなものであり、またそれらは物語を読む行為においてどのように位置づけられ、どのような役割を果たしているのだろうか。

この問題を検討するため、本論文では、読者が物語を読む行為とその内容とに集中し物語世界に入り込むという体験を「物語世界への没入」(immersion in the narrative worlds) と定義し<sup>4</sup>、その心理学的特徴と読書における役割について明らかにする。具体的には、没入体験の妥当な測定尺度を開発し、これを用いて、物語を理解する認知的過程、それにともなって読者に生じる文学的体験、そして読者の物語を読む頻度や習慣という、人間が物語を読む活動を構成する諸側面との関連について、調査的手法と実験的手法を用いて検討する。

### 1-2-3 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

まず第1章では、人間がなぜ物語を作り、また読むのかという問いを提起しつつ、人間が物語を読むという営為について取りあげ、物語とは何かという定義について論じた。次いで近年の心理学やその近接領域で物語への注目が集まっていることを指摘し、そのなかでも特に物語世界に没入するという読者の体験の特異さについて述べ、物語への没入がどのような特徴を持ち、読みにおいてどのような役割を果たしているのかという、本論文における問題を提起した。

第2章では、物語を読むという過程と物語世界への没入が心理学でどのように扱われてきたのかを、先行研究を元に論じる。まず、読むという行動の心的

---

<sup>4</sup> 「没入」という用語に関連して、臨床心理学では「自己没入」(self preoccupation) という概念が提唱されている(坂本, 1997; Sakamoto, 1998)。これは抑うつに関連する個人特性であり、自己への注意や注目が持続しやすい傾向を示すものであるが、本研究で取りあげる物語世界へ入り込む現象としての「没入体験」はこれとは全く異なる概念である。

過程についてこれまでの認知心理学的研究を紹介し、次に、没入という現象がこれまでにどのような文脈で、どのように検討されてきたのかを概観し、物語世界への没入がどのような体験であるのかの概念的整理を行う。そして、この物語世界への没入を定量的に測定する尺度がわが国で不足していること、物語読解において、没入がどのような役割と機能を持っているのかについての研究が不十分であるという、現時点での課題を指摘し、本論文の研究目的について述べる。

第3章では、読者の物語世界への没入体験の一般的傾向を測定する尺度として、Miall & Kuiken (1995) の文学反応質問紙の日本語版を作成する。まず文学反応質問紙の理論的背景について簡単に確認した後、この尺度を日本語に翻訳し予備調査を行う(研究1)。それを踏まえて尺度項目の選定を行い、最終的な日本語版尺度を作成して信頼性と妥当性の検討を行う(研究2)。

第4章では文学反応質問紙が測定する文学的体験(literary experience)についての検討を行う。まず、大学生を対象に文学的体験と読書習慣との関連について調査を行い、文学的体験のなかでも没入体験が小説などの物語を読む頻度に強く関連していることを示す(研究3)。この結果を踏まえ一般社会人を対象に調査を行い、研究3での結果と同様に没入体験と小説を読む頻度との関連を確認し、文学的体験において物語への没入がどのような役割を果たしているのか検討する(研究4)。

第5章では物語の読解時における没入状態に注目する。文学反応質問紙は読者が普段どの程度物語に没入し、どの程度文学的体験への親和性を持っているかを測定する尺度であるが、これでは読者が実際の読みにおいて没入状態を体験したかどうかを測定することができない。そこでGreen & Brock (2000) の移入尺度の日本語版を作成し、信頼性と妥当性の検討を行う(研究5)。そして、物語読解時の没入状態が文学的体験傾向からどのような影響を受けるのかについて検討し、没入状態は登場人物への共感や情景のイメージといった体験傾向だけでなく、読みながら体験する洞察の影響も受けていることを示す(研究6)。

第6章では物語読解過程における没入の役割について検討する。第5章までの研究では質問紙を用いた調査を行っていたが、実際に物語を読んでいるときの認知的過程に没入がどのような役割を果たしているかを調べるため、物語読

解課題を用いた実験的検討を行う。その際、参加者へ与える教示を操作し、普段小説を読むように読んでもらう条件（研究 7）と、物語の内容に注目して、イメージや共感するように心がけながら読んでもらう条件（研究 8）で検討を行い、後者の条件において没入傾向が高いほど読解時間が短くなる傾向のあることを示し、また読解時に喚起される感情も没入得点の高い参加者ほど物語の内容に沿ったパターンを示すことを明らかにする。

第 7 章では総合的考察として、第 6 章までの実証的検討を踏まえ、物語への没入が文学的体験の重要な構成要素であり、読書習慣とも関連すること、そして物語への没入体験がどのような心理特性と関連するかという問題について論ずる。さらに、物語読解過程における没入の位置付けと役割についてのモデルが少ないことを論じつつ、没入体験が物語読解を促進する可能性を指摘し、第 6 章までの研究の成果を踏まえた新しいモデルとして、物語没入 - 読解モデル（narrative immersion-reading model）を提案する。

最後に第 8 章では、本論文が示した成果の学問的、社会的意義について論ずる。特に、没入という観点からみた物語とその読みについての知見が心理学におけるその他の研究に与える意義と、それらが教育などの応用分野に貢献する可能性について述べる。そして、今後の物語読解に関する研究への展望と、物語を通じた人間への心理学的理解の可能性について述べる。

## 第2章

---

### 物語読解における没入体験

第2章では、物語を読む過程としての物語理解と、物語の世界に没入する体験について、これまでの知見を整理しつつ概観する。文章として呈示された物語へ没入するという体験の基底は、とりもなおさず物語を読むという行為であり、その過程は物語の世界を理解するところから始まる。そこでまず、読者が物語をどのように理解しているのかという問題について、物語理解に関する認知心理学的研究を概観する。とりわけ、現在最も多くの研究が行われている状況モデル理論について検討し、これが没入の対象であるところの「物語世界」であることを論じる。その上で、物語世界への没入とはどのような体験であるのかを明らかにするため、関連する諸領域の研究を整理し、没入体験の構成要素を示した上で、本論文がこの没入体験にどのようにアプローチしてゆくかを明らかにする。

## 第1節 物語読解の認知的過程

### 2-1-1 物語理解研究

物語を読むという行為において内容を理解する過程は「物語理解」(narrative comprehension, discourse comprehension, story comprehension) と呼ばれ (e.g., Graesser, Mills, & Zwaan, 1997; Olson & Gee, 1988), 読者が物語文章を読んだときにその内容がどのように記憶され、または表象として構築されるかについて検討されてきた。

物語に限らず文章の読みに関する心理学的な研究は、記憶の研究から出発したといつてよいであろう。代表的な研究として、Bartlett (1932 宇津木・辻訳 1983) が記憶内容の想起について行った一連の研究における、物語を刺激材料として用いたものがある。このなかで Bartlett は、20 名の実験参加者に北アメリカの民話を2回読んでもらい、内容を記憶させた。そして15分から数年という間隔をあけて物語をできる限りで再生してもらった。その結果、参加者の記憶した物語は、例えば登場人物などの固有名詞が消失したり、再生された物語が元の民話にはない一貫性を持つようになったり、当時のイギリスの学生にとってなじみの無い「カヌー」が脱落し、代わりにボートが登場した、というような変容が生じていた。このような結果について Bartlett は、参加者の記憶が



「スキーマ」(Scheme)によって合理化された結果生じた変容であると指摘した。ここでいうスキーマとは個人の体験や記憶などに基づく構造化された知識のことであり、文章理解プロセスの研究においても重要な位置を占めるものとなっている。

物語理解研究の領域では、スキーマに関連した概念がいくつか存在する。Schank & Abelson (1977) は、人間の知識の一部はステレオタイプな状況とそこで行われるルーチン化された行動によって組織化されているという理論を提唱した。例えば「食事」という概念には、「レストラン」や「ウェイター」といった場面設定と、「料理を注文する」や「伝票を持ってレジへ行く」といった行動が体系的に結びついている。こうした、状況とそこで最も多く見られる行動とが結びついた一般的知識は「スクリプト」(script)と呼ばれる。Schank (1982 黒川・黒川訳 1988)によれば、スクリプトは理解過程において基礎となる情報を提供し、入力された情報をつなぎ合わせる働きを持つ。すなわち、物語のなかにおいてレストランの場面が出てきた場合、レストランの一般的な場面と我々がレストランで行う一連の行動の知識が活性化して、直接記述されていないような登場人物の行動についても推測することができる(川崎, 2001)。現在スクリプトはスキーマの下位概念であるとみなされており(Zwaan & Radvansky, 1998)、物語理解において機能することについて、実証的な研究も行われている(Bower, Black & Turner, 1979; Graesser, Woll, Kowalski, & Smith, 1980)。

一方、物語の展開に一定の法則性があることに注目した研究も見られる。Thorndyke (1977) は、例えば単純な物語プロットにも、主人公が直面する問題、解決の試み、そして問題の解決といったように、物語には文と同じように内部構造が存在すると主張した。この構造を規定する規則を彼は物語文法と呼び、これによって読者は作中の出来事の因果関係や登場人物の動機、目標などを予測できるとした。また、物語文法とよく似た概念として物語スキーマ(Mandler & Johnson, 1977; Mandler, 1982)があり、これらは文章が示す内容のスキーマではなく物語自体の構造に言及する理論であるが、これらもまたスキーマの下位構造であるといえよう。

### 2-1-2 状況モデル理論

スキーマやスクリプトといった概念は物語理解における認知的枠組みの役割を示唆するものであるが、これとは別に物語理解は、文章に記された内容を一貫した心的表象<sup>5</sup>として構築することと捉えることができる（米田, 2010）。すなわち物語理解の過程では、読者はその文章に関する表象を構築していると考えられるが、このとき構築される表象は単一ではなくさまざまな階層の表象が同時に構築されており、特に文章そのものの表象と物語の内容に関する表象はそれぞれ別個のものとして構築されると考えられる（Nell, 1988; Oatley, 2002）。文章理解過程で構築されるこれらの表象のうち、前者には「表層形式」（surface form）と「テキストベース」（textbase）という二つの表象があり（van Dijk & Kintsch, 1983）、後者の表象は「状況モデル」（situation model）や「メンタルモデル」（mental model）と呼ばれている（Johnson-Laird, 1983; Kintsch, 1998; van Dijk & Kintsch, 1983; Zwaan & Radvansky, 1998）。このうち表層形式は文章を構成する文字や語彙などの表象を、テキストベースは文章が示す命題構造の表象であり、状況モデルは文章に書かれた内容について読者の体験に基づいて構築される表象とされる<sup>6</sup>。

状況モデルの理論にはこれまでに様々な理論が提唱されている。代表的なものとしてはイベントインデックスモデル（Zwaan, 1999b; Zwaan, Langston, & Graesser, 1995; Zwaan & Radvansky, 1998）や共鳴モデル（O'Brien & Myers, 1994）、コンストラクショニスト理論（Graesser, Singer, & Trabasso, 1994）、コンストラクショニストモデルを拡張したランドスケープモデル（van den Broek, Ridsen, Fletcher, & Thurlow, 1996; van den Broek, Young, Tzeng, & Linderholm, 1999）などがあり、またこれらの理論を統合的な枠組みに位置づける試みもなされている（e.g., 井関, 2004）。これらのなかで、最も研究が多く行われてきている理論の一つとしてイベントインデックスモデルを挙げることができる。このモデルの

---

<sup>5</sup> ここでいう心的表象とは、人間が世界を理解するために必要となる、環境から切り離し抽象化した形式のことであり、その抽象度、環境からの乖離度によってさまざまな階層（知覚的、エピソード記憶的、言語・抽象的など）が想定されている（Kintsch, 1998）。

<sup>6</sup> 状況モデルとスキーマとの違いについて Zwaan & Radvansky（1998）はタイプとトークンという関係にあると述べている。すなわちスキーマは一般的な知識の枠組みであり、状況モデルはそれを材料としつつ自身の体験に基づいて構築される表象とされる。

大きな特徴は、物語内容に関する状況次元が設定されていることである (Radvansky, 2012; Zwaan & Radvansky, 1998)。すなわち、読者は物語に記述された時間、空間、出来事の因果関係、登場人物（または主人公）、目標といった情報を収集し、それぞれの次元ごとにモニターしていると仮定されている (Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan, Magliano, & Graesser, 1995; Zwaan & Radvansky, 1998)。

### 2-1-3 状況モデルと物語世界

イベントインデックスモデルに従えば、読者は物語内の出来事がいつ、どこで、誰によって、どのように生じ、また出来事に関与する登場人物がどのような目標と心的状態を持って行動しているかを表象として構築していると考えられる。ところで、こうした次元で構成される状況モデルは、現実世界の知覚と類似した知覚的なものであると指摘されている (常深・楠見, 2009; Zwaan, 1999a)。例えば「森林警備員は空にワシを見つけた」という文と「森林警備員は巣にワシを見つけた」という文を読んだとき、その命題構造は同じでもワシの視覚イメージは大きく異なっており、これは読者がそれまでの経験からワシの知覚イメージを活性化させているからだとされる (Zwaan, 2004)。このように、読者は物語理解の過程で現実世界の経験や知識を元に状況モデルを構築することから、それらは現実世界と同じかあるいは類似した「物語世界」(narrative world または story world) であると捉えることができる (Busselle & Bilandzic, 2008; Segal, 1995)。ここでいう物語世界とは、物語に記述された状況や出来事について読者が構築する表象であり、現実世界についての表象と類似した特徴を持つ (Busselle & Bilandzic, 2008; Mar & Oatley, 2008; Oatley, 2011)。すなわち、読者は物語に描写された時間や空間といった設定が現実世界と同様に矛盾なく構築されていることや、登場人物が現実世界の人間と同じように認識し、感情を抱き、行動する存在であるという前提に従って物語世界を構築していくとされ、この意味において読者は物語世界をまるで現実世界であるかのように疑似的に体験していると考えられる (米田, 2010; Zwaan, 2004)。このため、物語は現実の社会的経験のシミュレーションとして機能すると指摘されている (Mar & Oatley, 2008; Oatley, 1999a)。

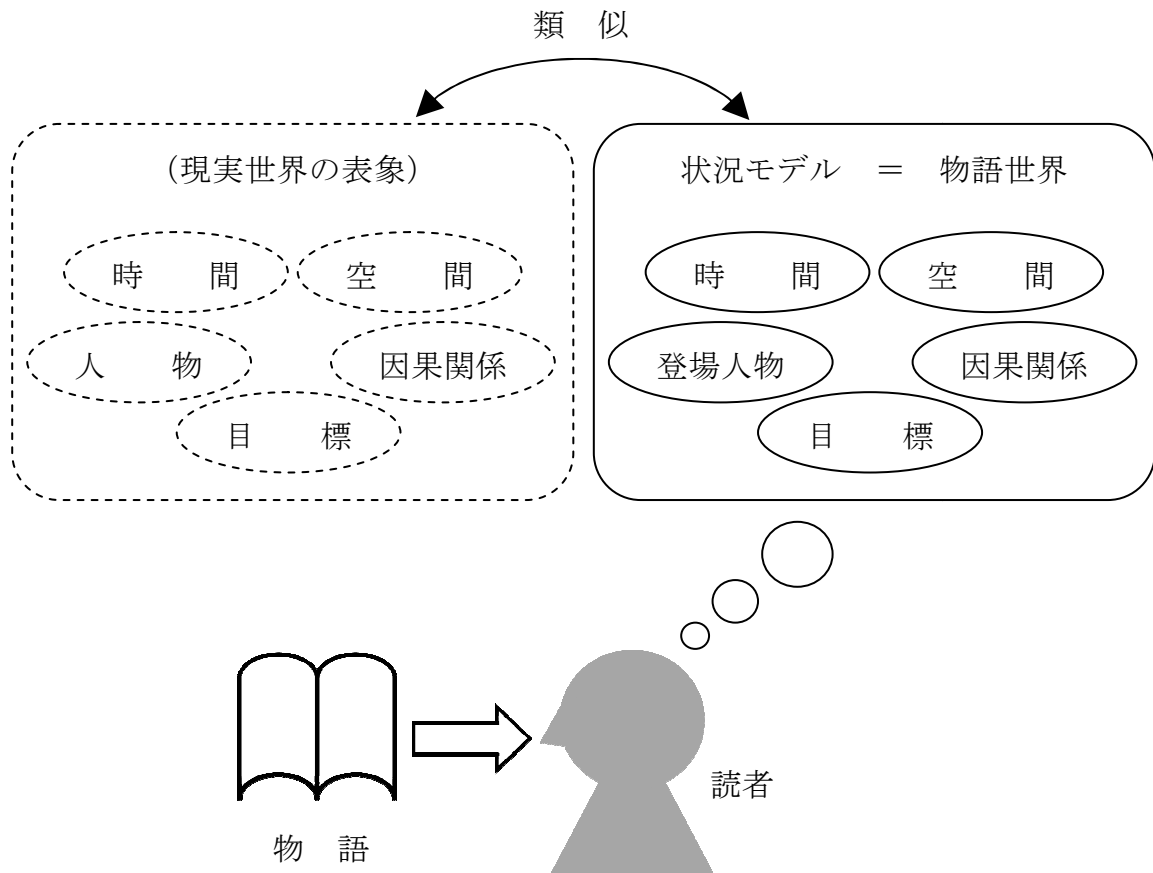


図 2-1 物語理解過程で読者が構築する物語世界

以上のような考察に基づくと、読者が体験する物語理解とは図 2-1 のように表すことができる。すなわち、読者は物語を読む過程で、現実世界に類似した構造を持つ物語世界としての状況モデルを構築することで物語を理解し、物語世界を疑似的に体験していると考えられる。

#### 2-1-4 物語理解と物語読解

2-1-3 までで見てきたように、物語の読みは読者が物語世界を構築するプロセスであると考えることができる。しかしながら、第 1 章で述べたとおり、我々が物語を読む際に体験するのはそういった認知的な側面ばかりではなく、さまざまな体験が含まれるものである。本論文では物語を読みながらその世界に没入するという体験を扱うが、これを考察するには、上述した物語理解だけではない幅広い過程としての「読み」を捉えていく必要がある。この読みの過程に

は、これまで「鑑賞」(阪本, 1971) と呼ばれてきたような物語への認知的, 情動的反応, あるいは自己変容体験 (Kuiken, Miall, & Sikora, 2004; Miall & Kuiken, 2002) や読者のテキスト受容 (Iser, 1976 轡田訳 1982) といった文学的体験などが含まれる (文学的体験については 2-3-1 で詳述する)。そこで, 本論文ではこうした過程を「物語読解」(narrative reading) と捉えることとする。本研究で取りあげる物語世界への没入は, 物語読解のなかで生じる体験であり, 物語理解過程で構築された物語世界に入り込んだような体験をすることといえる。第 2 節ではこの枠組みに基づいて, 読解時に生起する現象としての没入について考察する。

## 第 2 節 物語読解における没入体験

第 2 節では, 物語読解にともなう没入の定義とその指し示す内容について論ずる。第 1 章でも触れたように, 物語世界に入り込む体験は古くから極めてよく知られた現象であった。物語は説明文とは異なり, 楽しみながら読むこと (ludic reading) が多く, そうしたときには本にのめり込む体験はとても重要な要素である (Nell, 1988)。一方, 没入は読書への興味や内発的動機づけの構成要素とされており, 読書活動や文章理解との関連が検討されている (Greaney & Newman, 1990; Schiefele, 1991; Wigfield & Guthrie, 1997。レビューとして Schiefele, Schaffner, Möller, & Wigfield, 2012)。さらには状況モデル理論の見地から, 例えば主人公のおかれた状況がどのようなものかを想像し, 主人公とともにその環境内を移動したり主人公の知覚を疑似体験したりするなど, 時に豊かな物語表象を構築し, その世界に入り込むような体験をすることが指摘されている (福田, 1996; Zwaan, 1999a; Zwaan, 2004)。しかしながら, 先行研究によってこれまでにさまざまな形で没入現象への言及がなされてきたが, それら諸理論では用語もその指し示す概念も一貫しておらず, それらが示す概念の関係性も十分に整理されているとは言い難い<sup>7</sup>。そこで本節では, 没入現象に関する

---

<sup>7</sup> 本論文で取りあげる先行研究では, 没入現象を示す用語には absorption, being lost, engagement, involvement などがあり, 類似してはいるが研究者間で異なった用語が用いられている。一方, それぞれの用語のわが国における訳語は定まっていない。そこで本論文ではそれぞれについて, 邦文文献を参照しつつ, できる限り原語の意味を反映するように訳語をあてることとする。

これまでの理論について論ずる。まず心理特性としての没入性に触れ、次いで読みへの没入に関する初期の研究と近年の物語への移入仮説、没入に類似した現象であるフロー体験、物語メディアに関する学問領域での没入研究を順に概観する。その後で、より統合的な枠組みから物語読解における没入の概念を整理し、本論文における「物語世界への没入」現象の定義とその射程とを明らかにする。

### 2-2-1 催眠感受性と没入

まず、そもそも何かに入り込む、あるいはのめり込む現象とはどのように定義されるのだろうか。物語に限らず何らかの外的対象や思考に入り込む体験は、1960年代から80年代前半にかけて、催眠誘導への反応性や親和性を表す「催眠感受性」(hypnotic susceptibility)、「被催眠性」(hypnotizability)あるいは「被暗示性」(suggestibility)を予測する心理特性として検討されてきた。

人間の心理特性としての「没入性」(trait absorption)は、Tellegen & Atkinson (1974)によって提唱された概念である。彼らは催眠感受性を予測する尺度として71項目の調査質問紙を作成し、因子分析の結果得られた3因子のうち一つの因子を「没入性」と名づけた。彼らによると没入は、ある特定の注意対象を体験しまたそれをモデル化することにすべての表象機能が用いられてしまう状態とされており、風景、音楽、人間、過去の記憶などの表象に全ての注意が向けられる傾向と記述される(Roche & McConkey, 1990; Tellegen & Atkinson, 1974; Wild, Kuiken, & Schopflocher, 1995)。一方、催眠感受性に関連するとされる心理特性はこれ以外にも提唱されている。例えばHilgard (1965)は、催眠感受性の高い人の事例を元に面接調査を行い、感受性の高い人の特徴として(a)感覚体験への高い親和性、(b)子ども時代の高い空想能力、(c)読書やドラマへの没入などを見出し、「イメージへの没頭」(imaginative involvement)と名づけた。またWilson & Barber (1983)は被催眠性の高群と低群に面接調査を行った結果、高群の多くが豊かな空想を体験しており、低群に比べて体外離脱体験やテレパシーといった現象とも親和性が高いことを明らかにした。Wilsonらはこのようなパーソナリティ特徴を「空想傾向」(fantasy proneness)と呼び、これらが催眠感受性と強く関連することを指摘している。

没入性やそれと近接した概念は、これまでにそれぞれ測定尺度によって測定する試みがなされてきた。没入性については Tellegen & Atkinson (1974) が、イメージへの没頭は Davis, Dawson, & Seay (1978) が、また空想傾向は Merckelbach, Horselenberg, & Muris (2001) がそれぞれ測定尺度を作成しているが、この三つの概念はいずれも、イメージへの没入傾向を指すという点で同じものであると指摘されている (大宮司・芳賀・笠井, 2000)。これらの尺度には小説やドラマ、映画などの作品世界への没入を問う項目が含まれているが、没入性や空想傾向、イメージへの没頭などは、物語を含めた空想世界への注意の集中と外界に対する意識の減少または一時的消失を中心とした概念と捉えることができるだろう。

上述したような催眠感受性研究に関連して、初期には読解にともなって生じる物語世界への没入が「読みへの没頭」(reading involvement) と呼ばれ、実験的検討がいくつか行われた。たとえば Fellows & Armstrong (1977) は、事前に行った被暗示性テストによって参加者を高得点群と低得点群に分け、短編小説を読んでもらった。そして、読解時に生起した没頭体験として、情景のイメージ化、登場人物への同一化、外界への気づきの消失、物語への批評的思考の停止など7項目の尺度に回答してもらった。その結果、被暗示性高群は低群よりも物語に没入したことが示され、またこの没頭得点と同じ尺度で普段の読書時について評定してもらった得点との相関は、被暗示性高群において有意となった。一方 Baum & Lynn (1981) は、参加者が物語を読んでいる間に音刺激を呈示し、被暗示性の高群と低群で音への反応時間を比較した。その結果、行動指標である反応時間には両群に有意な差は認められなかったが、読解への集中の程度や内容のイメージなどを測定した主観指標では両者に有意な差が見られたと報告している。以上のように見てゆくと、読みへの没頭は物語への注意の集中に加えて、情景のイメージや登場人物への共感といった体験も含む概念であると考えられる。

### 2-2-2 物語世界への移入仮説

次に、近年になって提唱された理論として、物語世界への移入仮説を取りあげる。この概念は物語への没入現象を考える上で重要な概念であり、また 2-2-1

で取りあげた没入性とも関連すると考えられる<sup>8</sup>。

「物語世界への移入仮説」(transportation into narrative world hypothesis)は Green & Brock (2000) によって提唱された理論である<sup>9</sup>。Green らは情報を物語として呈示することが個人の態度や信念に大きなインパクトを与えること (e.g., Chang, 2008) を指摘し、そのメカニズムとして移入という概念を提唱した。ここでいう移入とは、全ての心的システムが物語内の出来事に集中するプロセスであるとされている (Green & Brock, 2000; Green, Brock, & Kaufman, 2004)。物語を読む間、読者は時間の感覚を失い、自分の周囲で起きていることを知ることができなくなる代わりに、物語世界にすっかり入り込んでいるような感覚を抱く (Green, 2004)。その結果、読者は現実世界に関する知識へのアクセスが減少すると同時に物語に対する鮮明なイメージが喚起され、信念や態度に変化がもたらされる (Green & Brock, 2002)。彼らは移入体験を測定するための 1 次元の尺度を開発し、移入によって態度変化が起こることを実験的に明らかにした (Green & Brock, 2000)。さらには移入の個人差を説明する概念として移入傾向 (transportability) といった特性も提唱されている (Mazzocco, Green, Sasota, & Jones, 2010)。

物語に移入することの効果として、Green & Brock (2000) は精神障害者による殺人事件を描いた物語によって、精神障害者の保護政策への読者の態度が制度を肯定するように変化することを示している。それ以外にも、例えば宝くじに関する物語によってくじの購買行動への態度が肯定的に変化することや (McFerran, Dahl, Gorn, & Honea, 2010)、禁煙に関する物語映像への移入が視聴者のその後の禁煙行動を予測すること (Williams, Green, Kohler, Allison, & Houston, 2010) などさまざまな領域で検討されている。一方で、物語に移入すると読後の喜び体験や物語へのリアリティの感覚が高まると指摘されている (Green, 2004; Green et al., 2004; Tal-Or & Cohen, 2010)。このように移入に関する研究は数多く行われており、文学作品などの物語読解における現象学的体験

---

<sup>8</sup> transportation の訳語として、ここでは小森 (2012) に従い「移入」を用いた。

<sup>9</sup> 「物語世界への移入」という表現は Gerrig (1993) によるものである。Gerrig は文学作品の読解を旅にたとえ、読後に自己に変化が生じていることを新しい経験を得て旅から帰ってくることになぞらえて表現している。Green & Brock (2000) はこの Gerrig の考察に沿う形で物語による個人への影響を移入という語で説明しようとしたのである。



を考える上で最も有力な理論の一つと考えられている (Busselle & Bilandzic, 2008, 2009; Green & Carpenter, 2011)。

### 2-2-3 フロー体験

没入や移入に類似した概念として「フロー体験」(flow experience: Csikszentmihalyi, 1990)を挙げることができる。フローは全ての注意が特定の行為に注がれ、自分が行っているその行為と自分とが切り離されているという感覚がなくなる状態であり、没入などとも関連の深い概念である (Wild et al., 1995)。フローが起こる対象には日常生活のさまざまな活動が含まれるが、ある活動においてフローが起こるには、その活動のレベルと行為者の能力とのバランスが取れていることが必要だと考えられており、物語読解においては一貫した意味のある物語世界の構築が問題となる (Busselle & Bilandzic, 2008)。Csikszentmihalyi 自身は読書や物語読解に対してのフローを直接的に取りあげているわけではないが、上記のことから物語読解では読者が主体的に物語世界を構築する活動へのフローが起こっていると考えることができる (Busselle & Bilandzic, 2008)。またフロー体験はその対象となる活動からもたらされる喜びや楽しみと関連しており、物語読解時に感じる楽しみの重要な要素でもある (Oatley, 2011)。さらに、フロー体験は物語世界への移入とも概念的に類似することが指摘されており (Green, 2004; Green et al., 2004), Nell (1988) のいう没入体験や物語への移入は読みながら物語世界を構築するという活動へのフローが起こっている状態という解釈もできる (Busselle & Bilandzic, 2008)。

### 2-2-4 登場人物への同一化

読者が物語世界へ没入しているとき、しばしば作中の登場人物になったかのような体験をしたり、登場人物の感情を共有したりすることがある。こうした体験は没入現象の重要な側面であると考えられ、同一化と呼ばれている。本節ではまず、文学やコミュニケーション学の領域で検討されている登場人物への同一化について論じる。

同一化 (identification) はもともと精神分析学において用いられた語であり、エディプス期における葛藤のなかで親の役割をとるようになるという空想的な

心的メカニズムを表すものであった (Freud, 1940 津田訳 2007)。しかしこの語は、やがて他の領域の研究者が独自の形で用いるようになり、人間が自己の同一性を抑制し、他者や物語内の人物の視点で世界を想像的に体験する現象を指すようになっていった (Bettelheim, 1976; Wollheim, 1974)。物語の登場人物に対する同一化について概念整理と定義づけを行った Cohen (2001) は、同一化を読者あるいは聴衆と登場人物との相互作用の結果生じる現象であるとし、読者はこのとき自分の同一性を登場人物のそれと置き換え、自分が読者であるという意識が薄れて一時的に登場人物として作中の出来事を体験するようになる」と論じた。Cohen は同一化体験を測定するツールとして 10 項目からなる尺度を提案しているが、同一化が模倣などをはじめとする他の概念との区別が難しいことを指摘している。Tal-Or & Cohen (2010) は、物語への移入と登場人物への同一化が同時に生じることが多いことから、読者に事前に与える情報を用いて両者を個別に操作する実験を行った。その結果、事前に主人公の過去やポジティブな側面の情報が与えられると同一化が促進され、未来に関する情報が与えられると移入が促進されることを示した。このことは、移入と同一化が同時に生じてはいてもそれぞれ異なる過程を有していることを示唆している。しかしながら両者は全く独立しているわけではなく、同一化が移入と同様に読者の態度を変化させることが指摘されている (de Graaf, Hoeken, Sanders, & Beentjes, 2012; Igartua, 2010; Murphy, Frank, Chatterjee, & Baezconde-Garbanati, 2013)。

#### 2-2-5 共感と感情移入

読者と登場人物との関係については、同一化以外にも「共感」(empathy) や「感情移入」(sympathy) という語で説明されることも多い。没入している読者と登場人物とは認知的、情動的につながった状態にあると考えられるが (Cohen, 2001; Gerrig, 1993; Oatley, 1999a; Tal-Or & Cohen, 2010)、同一化が前述したように視点取得といった認知的側面を重視するのに対し、共感や感情移入は情動的側面を重視していると考えられる。共感研究の文脈では、物語の登場人物への同一化や視点取得などは共感の下位概念として扱われており、共感性を測定する尺度にも「ファンタジー」(fantasy) 因子が含まれていることが多い (Davis, 1983; 登張, 2003)。

物語を読むことで読者に情動的反応が生じることは数多く指摘されているが (Greaney & Newman, 1990; 佐々木, 1998; Van Der Bolt & Tellegen, 1996), 登場人物に対する読者の感情は共感や感情移入として捉えることができる。この二つの語はしばしば同じ意味を示すことがあるが, 両者が異なっているとする理論も存在する。その場合, 共感 は登場人物の心情をそのまま読者が感ずることを示すのに対し, 感情移入は出来事や登場人物に対する読者自身の感情反応を示すと区別される (Braun & Cupchik, 2001; Cohen, 2001; Coplan, 2004; Kneepkens & Zwaan, 1994; Oatley, 2002)。たとえば Braun & Cupchik (2001) は, この二つを読者の物語に対する美的距離の違いとして説明する。すなわち, 物語に対する距離が近い読者は, 一人称的な視点 (登場人物の視点) を取ることで共感的に読むが, 物語との距離が遠い読者は, 二人称または三人称的な視点を取ることで出来事やエピソードそのものに対する読者自身の感情を体験する傾向があるという。この理論に従うならば, Cohen (2001) のいう同一化を体験している読者は, 共感的な感情を経験しているといえることができるだろう。

読者が体験する共感 は, 読解においても一定の役割を果たしていることが示唆されている。Miall (1988, 1989) は, 文学作品を読むときに読者が体験する感情には三つの役割があるとしているが, そのうちの一つに自己準拠性を挙げている。これは, 読者が物語の内容を自身の体験や記憶と結びつけ, 登場人物に同一化してその感情に共感することで, 物語の理解が深まることを指す。この指摘について実験的に検討した米田・仁平・楠見 (2005) は, 一度最後まで読んだ物語を再度初めから読ませると, 再読の際には主人公について記述した文において共感が高まることを示し, 読者が体験する共感 は特に主人公の理解と関連すると指摘している。さらに, 主人公の感情についてイベントインデックスモデルに準拠した検討を行った Komeda & Kusumi (2006) は, 主人公に共感しながら読むようにと教示すると状況モデルがより詳細に構築されることを示している。

#### 2-2-6 没入体験を統合的に捉える試み

2-2-5 までは, 物語への没入現象に関してこれまでに提唱されてきた理論を概観してきたが, これらの理論は相互に関連する現象を扱っていたり, その指し

示す内容が重複していたりするものが多く含まれているように思われる。そこで 2-2-6 では、物語への没入という体験を統合的に捉ようとする研究を紹介する。

没入に対するアプローチはさまざまな領域から行われてきたが、物語への没入傾向を統合的に測定する研究も行われてきた。Miall & Kuiken (1995) は、文学理論とりわけ読者反応論（たとえば、Iser, 1976 轡田訳 1982）などを概観しながら、これまで読者が物語に接したときの反応や体験を測定する尺度はほとんど作成されていないと指摘し、個々の物語への没入ではなく没入の特性的側面を測定する尺度として 68 項目からなる質問紙を作成した。文学反応質問紙（Literary Response Questionnaire; LRQ）と呼ばれるこの質問紙は、七つの下位尺度を有しており、それぞれ（a）読解に伴って生ずる洞察、（b）物語世界の鮮明なイメージ化、（c）登場人物への共感、（d）日常からの逃避や没頭としての読書、（e）作者や文体への注目、（f）ストーリー性への注目、（g）文学的価値の否定、という側面の個人差を測定する。この LRQ は、空想傾向や没入性の尺度と相関することが報告されているほか（Miall & Kuiken, 1995）、（c）の共感尺度は同一化を測定していると指摘されている（Cohen, 2001）。さらに移入の重要な構成要素であるイメージ化は（b）に、読書に対する注意の集中は（d）に、それぞれ下位尺度として含まれており、心理特性としての没入現象を包括的に測定しうる尺度といえるだろう。

一方 Busselle & Bilandzic (2009) は、小説や演劇、映画などさまざまなメディアの物語に触れた時のメンタルモデル構築の立場から、これまで個別に取りあげられてきた移入や同一化、物語世界のリアリティ感覚など包括的な観点から物語視聴時の状態的個人差を測定するツールとして物語関与尺度（narrative engagement scale）を作成している。この質問紙は 4 因子 12 項目で構成されており、それぞれ（a）一貫した物語世界の把握や理解、（b）物語への注意の集中、（c）登場人物への共感と感情移入、（d）現実世界を離れて物語世界に存在する感覚、を測定するものである。Busselle らは、これを用いてドラマ視聴時の没入体験を測定し、それらが移入や同一化などの得点と高い関連を示すことを報告している。

### 2-2-7 没入概念の構成要素

物語への没入体験は、多様な側面を含む複雑な現象であると推測されるが、Miall & Kuiken (1995) や Busselle & Bilandzic (2009) などに基づくと、これらはいくつかの下位概念を含む体験として整理することができると考えられる。そこで 2-2-7 では、これら諸理論を整理し、より統合的な観点から没入の全体像を描出することを試みる。具体的には、これまで見てきた物語への没入を構成する下位概念を、(a) 物語やその読解への注意の集中、(b) その結果としての自己や外的世界に関する意識の減退または消失、(c) 物語世界の鮮明なイメージ化、(d) 物語世界の現実感、(e) 登場人物への同一化または共感、(f) 感情移入、の六つに整理し、上述した各理論がどの範囲を取り上げているかを考察する<sup>10</sup>。表 2-1 に各理論の説明範囲をまとめたものを示す。

まず没入性 (Tellegen & Atkinson, 1974) は、質問紙によって測定される心理特性であり、その中核は外的、内的対象に対する注意の集中である。これは読むという行為そのものに対する集中や没頭と捉えることができるが、物語世界へのイメージ化や登場人物への同一化などは説明範囲外となる。これに対して、読みへの没頭 (Baum & Lynn, 1981; Fellows & Armstrong, 1977) は物語読解時の一時的な心理状態を指す概念であり、注意の集中などに加えて同一化や物語世界への批判的態度の減退など広範な概念を含むと考えられる。一方フロー体験 (Csikszentmihalyi, 1990) は、ある活動に全ての注意が注がれる状態とされており、没入性と極めて類似した概念といえる。ただしフローは特定の活動に限定した心的状態を示すものであり、特性的側面に焦点を当てる没入性とはこの点で異なるといえる。すでに述べたように、これらの概念には物語読解における体験を直接的に取りあげてないものもあるが、いずれも物語の読みにおける没入現象の根底をなすものとして、多くの理論でその基礎に据えられているといえるだろう。

次に、移入や同一化、感情移入といった概念は、物語に触れるときに読者や観衆が体験する没入状態そのものを説明する概念である (Braun & Cupchik,

---

<sup>10</sup> 同一化と共感との間には、前者では読者が登場人物に完全になりきってしまうのに対して後者では読者が自身と登場人物と区別を保っているという相違がある (Keen, 2006; Oatley, 1995) が、本論文では感情移入との相違を重視して両者を同一のカテゴリーとして扱う。

表 2-1 物語への没入体験を構成する下位概念と各理論における説明範囲

理論（提唱者）	状態／特性	注意の 集中	自己・外的 意識の減退	物語の イメージ	物語世界の 現実感	共感・ 同一化	感情移入
没入性（trait absorption） （Tellegen & Atkinson, 1974）	特性	◎	○	×	×	×	×
読みへの没頭（reading involvement） （Fellows & Armstrong, 1977）	状態	◎	△	○	○	○	×
フロー体験（flow experience） （Csikszentmihalyi, 1990）	状態	◎	○	△	×	×	×
移入（transportation） （Green & Brock, 2000）	状態	◎	◎	◎	×	△	△
同一化（identification） （Cohen, 2001）	状態	△	◎	×	△	◎	×
共感と感情移入（empathy and sympathy） （Braun & Cupchik, 2001）	状態	×	×	○	△	◎	◎
文学反応（literary response） （Miall & Kuiken, 1995）	特性	◎	◎	◎	○	◎	×
物語への関与（narrative engagement） （Busselle & Bilandzic, 2009）	状態	◎	○	△	◎	◎	○

注 1：◎は中心となる概念，○は説明あるいは測定可能，△は間接的に説明可能，×は説明範囲外。

注 2：それぞれの理論は，説明範囲にある概念を必ずしも別個のものとして扱っているわけではない。

2001; Cohen, 2001; Green & Brock, 2000)。しかしながら、これらの概念はそれぞれその説明範囲が大きく異なっている。まず、移入と同一化は、ともにその体験への集中と外界や自己に対する意識の減退が概念の基礎として挙げられているが、移入についてみれば、その中心概念は物語世界のイメージ化であり、これが物語による態度変化に重要な働きをすると指摘している (Green & Brock, 2002)。一方で同一化は、登場人物の視点を取得し感情を共有するという点に主眼が置かれており、イメージ化については説明範囲外である。この同一化や共感と類似した概念として、感情移入という側面を挙げている研究に Braun & Cupchik (2001) があるが、この論考の力点は共感と感情移入との差異に置かれており、注意の集中や没頭といった側面については触れられていない。

最後に、物語への没入概念を広範に捉えている研究として文学反応と物語への関与の研究がある (Busselle & Bilandzic, 2009; Miall & Kuiken, 1995)。Miall らの作成した LRQ は、物語世界のイメージ化、登場人物への同一化、読みへの注意の集中と外界への意識の減退という 3 次元の特性を個別に測定しており、それらによって物語への現実感をも説明可能であるが、登場人物への感情移入については説明範囲外である。一方、移入や同一化といった概念を統合的に捉えようとした Busselle & Bilandzic (2009) の尺度は、注意の集中、物語の詳細な理解と現実感、登場人物への同一化と感情移入という状態を個別に測定している。前者は特性を、後者は状態をそれぞれ測定対象としているが、現在のところこれらは最も包括的に物語世界への没入を測定できる尺度といえるだろう。

以上のように、物語への没入は実に多様な領域で個別に研究対象とされ、このため説明対象とする概念も大きく異なっていることが明らかになった。しかしながら、これまでの知見を整理することで、没入現象が多様な側面を持つてはいるが、それらが相互に関連する六つの下位概念によって説明できることが示された。物語読解の過程では、読者はこれらの全てもしくはいくつかの現象を同時に体験しており、それらの総体を「物語世界への没入」として捉えることができると考えられる。

### 第3節 本論文における問題設定および目的

第2節での考察から、物語世界への没入は、いくつかの下位要素を持つ複雑な体験であることが示唆された。ここで問題となるのは、没入体験が物語読解という人間の行為のなかでどのような役割を持っているかという点である。この問題を検討する上で重要となる視点として、本論文では次の3点に注目する。第1は没入体験と文学的体験との関連である。2-3-1で詳述するように、物語への没入という体験は文学理論においても重要な概念である（Green & Carpenter, 2011; Holland, 1975; Iser, 1976 轡田訳 1981）。第2は読書習慣との関連であり、これは読書の動機づけに、読書への熱中や没入が含まれていることと関連するトピックである。第3は物語理解過程における没入の役割であり、2-2-5で述べたような読解過程における共感の役割や（米田他, 2005）、物語内容の視覚的イメージが読解に果たす役割（福田, 1996）などに関連する。これらの視点は全く異なる研究領域にまたがってはいるが、物語読解における没入の位置づけを考える上ではいずれも重要な点である。第3節ではこれらの点について没入体験との関連という観点から順に論じ、それぞれにおける現時点での課題を明らかにした上で、本論文における研究目的を述べる。

#### 2-3-1 没入体験と文学的体験

文学理論、とりわけ読者反応論では、読者が文学作品に触れたときにどのような反応を体験するかという問題が主に取りあげられている（Fish, 1982 小林訳 1992; Holland, 1975; Iser, 1976 轡田訳 1981）。例えば Iser（1976 轡田訳 1981）は、「テキストは、読者が遂行する意味構成を経て初めて完成する」（p. 184）と述べ、読者の文学的体験が文学作品理解にとって重要であると指摘している。こうした文学的体験は物語読解過程で生ずると考えられるが、これがどのように生ずるのかに関して近年提唱されている理論の一つに、「自己変容感情仮説」（hypothesis of Self-modifying feeling）がある。これは、Miall らの一連の研究によって提唱された仮説であり（Kuiken, Miall et al., 2004; Kuiken, Phillips, Gregus, Miall, Verbitsky, & Tonkonogy, 2004; Miall & Kuiken, 2002）、文学読解において読者が体験するさまざまな感情（feeling）が読解そのものを支え、カタルシスや



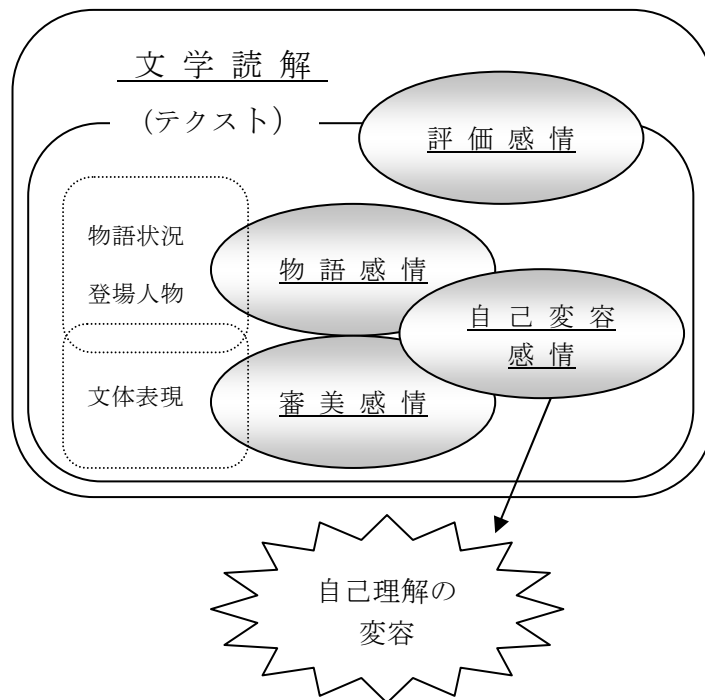


図 2-2 自己変容感情仮説の概念図

(Kuiken, Miall et al., 2004 ; Miall & Kuiken, 2002 を参考に筆者が作成)

自己理解の変容といった文学的効果をもたらすと主張している。

Miall & Kuiken (2002) は読解中に生じる感情をその対象と機能から四つに分類している。第 1 は「評価感情」(evaluative feeling) である。これは読みに対する喜びや楽しみといった読解過程全体に関連する感情であり、文学的効果そのものよりも読み活動を支えるものとして機能する。第 2 の「物語感情」(narrative feeling) は、物語の出来事や登場人物などの内容に対して抱く共感や感情移入などを指すが、2-2-7 での考察から、これは物語への没入であると考えられる。第 3 の「審美感情」(aesthetic feeling) は、物語文章の文体表現（比喩やアイロニーなど）に対して生起する感情を意味する。ここで、物語感情は作中の出来事と読者自身の体験の類似によって生じる感情であるが、文学的な文体表現がそこに加わり審美感情が生じることで、読者の体験と類似していない出来事の描写を読むときにも感情が生じ、その感情は自己の体験の新たな側面を暗示するものとして機能するようになる。さらに、こうした感情は作中の

他の場面を読んでいるときにも持続して現れたりすることで、自己理解や自己意識の変容を促すものとなる。この感情が第4の「自己変容感情」(self-modifying feeling)であり、これが文学体験の中心を担う感情であるとする。この仮説の全体像を示すと図2-2にのようになり、この仮説に従うならば、共感や感情移入は自己理解や自己観の変化を促す役割を持ち、文学作品の読解過程では重要な要素であると考えられる。

残念ながら、この仮説についての実証的な検討はほとんどなされていないが、もしこの仮説が正しいならば、物語への没入は文学的体験で中心的な役割を果たしていると考えられる。2-2-6で述べたように、Miallらは文学的体験の傾向を測定するLRQを開発しているが、この質問紙を用いることで、没入体験が洞察などの文学的体験を導く役割を果たしているかを検討することができるだろう。

### 2-3-2 没入体験と読書習慣

読書活動、あるいはそれを支える読書習慣は、物語読解と密接な関係にあると考えられる。物語への没入が読書活動にどう関連するかについては、読書への動機づけ (reading motivation) に関する研究から示唆を得ることができる。第2節で述べたさまざまな領域での研究以外に、没入は読書の動機づけ研究においても扱われている。例えば、Greaney & Neuman (1990) は読書の機能 (どのような効果を期待して読書をするか) について13カ国の児童生徒を対象に調査を実施している。その結果、自由記述の分析から得られた10のカテゴリのうちの一つに、「空想し、登場人物に関与し、イメージする」という刺激 (stimulation) 機能を見出している。これは2-2-7で述べた没入の構成要素の多くと重複する。一方、読書の動機づけを量的に測定する研究としては、Wigfield & Guthrie (1997) が「Motivation of Reading Questionnaire: MRQ」という質問紙を開発している。これは動機づけを11次元から測定する質問紙であり、後にWatkins & Coffey (2004) によって改訂版が作成されているが、この下位因子には「没頭」 (involvement) という、物語の架空世界に没頭することを好む傾向を測定する因子が含まれている。同様の因子はこれ以外の読書動機づけ尺度、例えばReading Motivation Questionnaire (Schaffner & Schiefele, 2007) やSRQ-Reading

Motivation (De Naeghel, Van Keer, Vansteenkiste, & Rosseel, 2012) などにも含まれており、没入は読書活動を支える内発的動機づけの一側面として捉えられている (Schiefele et al., 2012)。こうした読書の内発的動機づけは、読書量や読解能力と関連することが示されており (Schaffner, Schiefele, & Ulferts, 2013; Schiefele et al., 2012)、物語世界への没入体験は物語への接触の程度に影響する可能性が考えられる。しかしながら、動機づけ研究において没入は中心的な関心ではないためか、没入がどのような現象であり、どのように読書活動に関連しているかはあまり詳しく検討されていない。そのため、没入体験の程度が読者の物語への接触頻度と関連するという仮説を検討することは、没入体験が読書活動に果たす役割を明らかにするという意味で意義があると考えられる。

### 2-3-3 没入体験傾向と没入状態

第2節では、物語への没入を測定する尺度としていくつかの研究を取り上げた。これらはいずれも、2-2-7で述べたような六つの下位要素を個別に測定するものではないが、それと同時に、それぞれの尺度は没入の特性を測定するのか、それとも状態を測定するかという点でも相違がある。表2-1で挙げた八つの研究のうち、物語を対象として没入を量的に測定しているのは Green & Brock (2000) の移入尺度、Cohen (2001) の同一化尺度、Miall & Kuiken (1995) の LRQ、そして Busselle & Bilandzic (2009) の物語関与尺度の四つである。このなかで特性としての没入、すなわち読者が普段没入する傾向を測定しているのは LRQ のみであり、それ以外はすべて、個別の物語を読んだときの没入状態を測定している。それでは、特性としての没入と状態としての没入はどの程度関連するのだろうか。これまでのところ、この問題を検討した研究は筆者の知る限り見られない。しかしながら、これらの尺度の多くは Tellegen & Atkinson (1974) の没入性尺度との相関を妥当性の検討に用いており、その結果から考えると、特性としての没入傾向は実際の物語読解時の状態を強く予測することが考えられる。一方、四つの尺度のなかで LRQ は、「文学的体験の一つとしての没入」を測定するという意味でも特徴的である。2-3-1で触れたとおり、物語への没入は文学的体験の中核である可能性があるが、そうであるならば、没入以外の文学的体験傾向、例えば作者や文体に注目する傾向や洞察を行う傾向などは、没

入状態と関連する可能性も考えられる。以上のことから、文学的体験の傾向や頻度が、実際に物語を読解する際の没入体験に影響するという仮説が導かれる。これを検討することは、物語への没入の生起にどのような要因が影響しているかを解明する上で大いに役立つものである。

#### 2-3-4 物語理解過程における没入体験

物語を対象とした没入体験は近年になって研究が行われるようになってきたが、これまでのところ、物語理解過程と没入との関連を検討した研究はほとんど見られない。しかしながら両者の関連性については、これまでの認知心理学的研究からさらに考察することが可能であろう。Zwaan (1999a; 2004) は読者が読解過程で自身の体験に極めて近いほどに鮮明な表象を構築することがあると指摘している。これについて Sanford (2008) は、読者が常にこのような詳細な表象を構築しているわけではなく、そのような深い処理には身体化認知のメカニズムが働いていると指摘している。ここでいう身体化認知とは、知覚や運動などの内容を含む文章を理解するときに実際の知覚運動に関する処理系が関与しているとする理論であり (平, 2010), 単語や文, 文章など広範なレベルでの言語理解と密接に関連している (Fisher & Zwaan, 2008; 常深・楠見, 2009)。このことから考えると、状況モデルの構築には作品世界の知覚的イメージが貢献している可能性があるが、作品世界をイメージすることは没入の下位要素でもある。一方、没入体験の構成要素である共感について、物語理解の認知心理学的研究が行われるようになってきたこと (Komeda & Kusumi, 2006; 米田他, 2005) は、2-2-5 で述べたとおりであるが、物語中の登場人物についての理解はその人物と読者との類似性が高いほど促進されると指摘されている (Komeda, Kawasaki, Tsunemi, & Kusumi, 2009; 米田・楠見, 2007; Komeda, Tsunemi, Inohara, Kusumi, & Rapp, 2013)。こうした知見と、登場人物への共感が物語理解において大きな役割を果たすという指摘 (Komeda & Kusumi, 2006; 米田他, 2005) などと考え合わせると、登場人物への共感は物語理解の過程でその人物情報の理解を促す可能性がある。

以上のことから、物語への没入は物語理解を促進するという仮説が考えられる。この仮説を検討することで、物語読解のなかで中心的な過程である物語理

解での没入の役割を明らかにすることができるだろう。

### 2-3-5 本論文の研究目的

以上のような論点を踏まえ、次章以降では次のような五つの研究目的に基づいた実証的検討を行う。

第1の目的は、物語世界への没入体験を測定しうる日本語版尺度を作成することである。2-2-7や2-3-2で触れたように、海外ではこれまでに物語への没入に関する尺度が多く開発されている。しかしながら、これらの尺度のうち、わが国で信頼性と妥当性を検討した日本語版尺度は筆者の知る限りでは作成されておらず<sup>11</sup>、またこうした体験を測定するわが国独自の尺度も開発されていない。本節で述べたような仮説を検討するためには、わが国で利用可能な測定尺度を新たに開発する必要がある。そこで、第3章では Miall & Kuiken (1995) の LRQ の日本語版を開発し、第5章では Green & Brock (2000) の移入尺度の日本語版を開発する。この二つの尺度は2-2-7で述べたような没入体験の六つの下位要素のそれぞれを反映しているわけではないが、LRQは、没入体験を含めた文学的体験を総合的に測定していることが特徴的であり、移入尺度は、近年の物語への没入に関する研究で最も多く使われている尺度の一つである。この二つの日本語版尺度を開発することで、日本における没入体験の実証的研究を行うことが可能になり、また同時に以下に述べる本論文の研究目的について検討することができる。

第2の目的は、2-3-1で述べた仮説を検討することである。すなわち、物語世界への没入が、文学的体験において中心的役割を果たしているかどうかを検討する。このために、第4章では大学生および一般社会人を対象として日本語訳した LRQ の調査を行う。

第3の目的は、2-3-2での考察に基づいて、物語への没入が読書習慣とどのような関連を持っているかを検討することである。このために、同じく第4章での調査を通して、LRQと読書習慣について尋ねた質問との関連を検討する。

第4の目的は、2-3-3で論じたような、没入体験についての特性的側面が実際

---

<sup>11</sup> 小森 (2012) は Green & Brock (2000) の移入尺度を元に日本語での移入尺度を作成しており、信頼性については  $\alpha = .77$  ( $N = 184$ ) と報告しているが、妥当性の検討は行っていない。

に物語を読んでいるときの没入状態にどのような影響を与えるかを検討することである。これについては第 5 章で、没入状態を測定する移入尺度の日本語版を作成し、これと LRQ との関連について調査を行うことで検討する。

最後に第 5 の目的として、2-3-4 において導かれた仮説を検討するため、第 6 章では物語を用いた実験的検討を行い、物語への没入が物語理解の過程にどのような影響を及ぼすか明らかにする。

## 第 3 章

---

### 日本版文学反応質問紙の作成

## 第1節 文学反応質問紙の概要

本章では、物語世界への没入体験を測定する信頼性と妥当性を備えた尺度を作成することを目的とする。そのために先行研究として、没入体験を含めた文学的体験傾向を測定する Miall & Kuiken (1995) の文学反応質問紙 (Literary Response Questionnaire: LRQ) を取りあげる。研究1ではこれを日本語に翻訳して予備調査を行い、その結果に基づいて日本版 LRQ を作成する。研究2では、研究1で作成された日本版 LRQ の調査を行い、信頼性と妥当性を検討する。

LRQ は Miall & Kuiken (1995) によって作成された、文学作品を読むときに読者に生じる反応や傾向などの個人差を測定する質問紙である。2-2-6 でも述べたが、LRQ は 68 項目で構成されており、文学的体験の諸側面を七つの次元から測定する。具体的には、(a) 自己や外界への認識を深める「洞察」14 項目、(b) 登場人物への感情移入を示す「共感」7 項目、(c) 物語世界の鮮明なイメージ化を示す「イメージ鮮明性」9 項目、(d) 作者の意図や文体に興味を示す「作者への関心」11 項目、(e) 余暇の楽しみとして読書に没頭する「余暇逃避」10 項目、(f) ストーリー性を重視する傾向を示す「ストーリーに動機づけされた読み」8 項目、(g) 文学的批評などへの懐疑的態度を示す「文学的価値の否定」9 項目である。このうち物語世界への没入体験を測定しているのは「共感」「イメージ鮮明性」「余暇逃避」の3因子であり、これらを含めた文学的体験を測定するように設計されている。Miall & Kuiken (1995) によれば、信頼性については Cronbach の  $\alpha$  係数および再検査信頼性係数という二つの方法を用いた検討が行われている。その結果、すべての因子において、どちらの値でも 0.75 以上という結果が得られている。また、最終版尺度を作成する過程で、いくつかの質問紙との関連を調査することで、構成概念妥当性も検討しており、没入性尺度 (TAS: Tellegen & Atkinson, 1974) との間で、洞察、共感、イメージ鮮明性の各因子とは中程度の相関が (0.38—0.54)、作者への関心因子と余暇逃避因子とは弱い相関 (0.23—0.37) があることが示された。さらにこの他にも、洞察因子は自我の退行などと、共感因子は心理的ストレスと、イメージ鮮明性因子は社会的望ましさと、余暇逃避因子は体験への開放性と、作者への関心因子は小説や詩を読む頻度と、それぞれ弱い相関があることが指摘されている



(Miall & Kuiken, 1995)。

この LRQ は、没入を含めた物語読解時の体験の個人差特性を測定できる数少ない尺度であり、物語世界への没入体験を検討するための基礎ツールとなりうる。そこで研究 1 および研究 2 では、この LRQ の日本語版を作成し信頼性と妥当性の検討を行う。

## 第 2 節 文学反応質問紙の予備的検討（研究 1）

研究 1 では、LRQ を翻訳して予備調査を行い、その結果を元に日本語版尺度を作成することを目的とする。

### 3-2-1 方法

**LRQ 原尺度の作成** まず、Miall & Kuiken (1995) の作成した LRQ の最新版（以下「原版」とする）68 項目を、原著者 David S. Miall の許諾を得た上で日本語に翻訳した。その後、原版と翻訳版との等質性を確保するために、英米文学を専門とする日本人研究者に原版とそれに基づいて翻訳した尺度項目の校閲を依頼し、その指摘を元に、各項目の翻訳の修正を行った。こうして作成された 68 項目の尺度を、LRQ の日本版原尺度（以下、「原尺度」とする）とした。

**調査参加者および手続き** 大学生 229 名（男性 68 名、女性 161 名、平均年齢 20.9 歳）を対象として、集団による原尺度の調査を実施した。各項目は Miall & Kuiken (1995) に従って 5 段階評定を採用し、「5：そう思わない」「4：あまり思わない」「3：どちらともいえない」「2：ややそう思う」「1：そう思う」からの回答を求めた。

### 3-2-2 結果

**因子構造の分析** 回答に欠損のあったデータを除き、残った 211 名のデータを用いて、最尤法による因子分析を行い、回転前のスクリープロットを検討して 5 因子解を指定した。因子の回転は、Miall & Kuiken (1995) が原版の分析において斜交回転を行っているのにならい、プロマックス回転による分析を行った。その結果、原版第 2 因子と第 3 因子が一つの因子として収束したが、これ

表 3-1 LRQ 原尺度の因子分析結果

項 目	因子				
	1	2	3	4	5
物語を読んでいると、それが本当に目の前にあるもののように感じられることが時々ある	<b>.87</b>	-.03	-.03	-.03	.01
小説の中の会話が、まるで実際の会話を聞いているように聞こえることがしばしばある	<b>.81</b>	.00	-.04	-.14	-.06
私は、自分が読んだことのある物語の人物にほとんど完全に「なりきってしまった」ように感じる事が時々ある	<b>.73</b>	-.20	.08	-.07	.02
物語や詩の情景が私にとってとても明瞭で、その情景のにおいや手触りなどの「感覚」を感じることができる	<b>.72</b>	-.01	.04	-.01	-.21
私には、物語や小説のなかに出てくる会話の調子が聞こえる*	<b>.70</b>	.09	.07	-.08	-.06
私は、読んだ小説の中に出てくる場所が、写真を見ているかのようにはっきりと見えることがしばしばある	<b>.70</b>	.11	-.03	-.10	-.08
物語を読んでいると、部分的にしか描かれていない情景が私の心の中では完全で生き生きとした場面になる	<b>.69</b>	.07	.13	-.03	-.11
物語の中の人物と架空の会話をしているように思うことが時々ある*	<b>.67</b>	-.12	-.10	.01	.07
小説の中の人物が日常の中にいる実際の人であるように感じられることが時々ある	<b>.66</b>	-.06	.03	.04	.05
物語を読んでいると、自分が物語の人物の一人であると思うことがある	<b>.61</b>	.00	-.07	-.07	.06
物語や短編小説に描かれている人や場所を容易に目に浮かべることができる*	<b>.61</b>	.08	.17	-.15	-.07
私は、自分が劇の演技の用意をしているかのように、進んで物語中の人物の役に自分を投影しようとする	<b>.58</b>	.08	.02	-.12	.09
物語を読んでいると、香りの描写から色を、色の描写から手触りを連想することがしばしばある*	<b>.54</b>	.04	.06	.11	-.23
小説や物語を楽しんで読んだあとも、その中の人物をまるで実在する人のように考え続けることがある*	<b>.51</b>	.05	.14	.02	.09
私は、物語に出てくる場所についての地図を描けそうだと思うことがときどきある*	<b>.46</b>	.02	-.10	-.04	.05
私は、自分が本当に何かを体験したのか、それともその何かについて本で読んだだけなのか、分からなくなることが時々ある*	<b>.45</b>	-.13	-.03	.19	-.03
読んでいる本にのめりこむあまり、完全に我を忘れてしまうことがしばしばある	<b>.41</b>	.29	-.19	.10	.11
私は、文学作品の登場人物を通して自分のやる気が体現されていると思うことがしばしばある*	<b>.36</b>	-.09	.20	.18	.04
私は、文学作品は分析しようとする事で壊されてしまうように思う*	.22	-.22	.07	.05	.06
私にとって、何もすることのないときに小説を読むことは楽しく時間を過ごすことのできるものだ	-.05	<b>.81</b>	.11	-.08	.05
私は、普段の仕事を忘れてしまうくらいに小説に没頭するのが好きだ	.15	<b>.66</b>	-.15	.22	.11
時間が空いているときに最もしたいことは小説を読むことだ	.10	<b>.61</b>	-.23	.26	-.01
物語を読むことはリラックスするのに最適だと思う	-.05	<b>.61</b>	.20	-.07	.10
何かを読むことに時間を費やすなら、私は「文学作品」は読まない*	-.11	<b>.58</b>	.17	.02	-.07
読書をしていると時間が経つのを本当に忘れてしまう	.19	<b>.56</b>	-.11	.12	.15
最後まで読み終えるまで本を閉じられないことがよくある	.17	<b>.51</b>	-.28	.20	.03
私は、文学が社会的価値を持つとは思えない*	-.12	<b>.47</b>	.37	-.09	-.14

表 3-1 LRQ 原尺度の因子分析結果 (続き)

小説を読むことは、今抱えている問題から離れて気分転換するのにとっても役立つと思う*	.04	<b>.45</b>	.12	-.06	.21
仮に高校での文学が良い教え方だとしても、そんなに長い時間を文学教育に充てるべきではない*	.06	<b>-.45</b>	-.14	.09	.08
古典文学を読むことは、文学者や歴史学者に任せるべきである*	-.07	<b>.44</b>	.23	-.06	-.25
国語科目で読まされる文章の大部分は自分なら選ばなかったと思うものだったので、私は高校の国語の授業が嫌いだった*	-.10	<b>.40</b>	.11	.07	-.15
文学について論じたり書いたりすることに割く時間は今よりもっと少なくするべきだと思う*	-.08	<b>.36</b>	.36	-.16	-.14
自分にもっと本を読む時間があればと思うことがしばしばある*	.16	<b>.36</b>	.22	.03	.05
小説を読んでいるときには、登場人物たちに何が起こるかを知ることに興味がある	-.02	<b>.35</b>	.06	-.26	.32
ある作家が書いた本を好きになると、その作家が書いたほかの全ての本もたいてい読もうとする*	.02	<b>.33</b>	.19	.11	.16
文学に接していると、自分の日常生活の中で見落としていた感情に時々気づくことがある	.13	.12	<b>.59</b>	-.06	-.02
文学作品を読むと、私の生活のなかでいつもは気づかないある部分に目を向けようとする	.08	.06	<b>.57</b>	.15	-.03
文学作品を読むと、自分の周囲にいる人々や出来事の本質に対する洞察力が得られると思う	-.08	.10	<b>.57</b>	.07	.01
文学は、自分のとは異なる人生を理解するのに役立つと思う	-.01	.07	<b>.56</b>	-.09	.06
ある種の文学作品は、自分が抱く比較的ネガティブな感情を理解するのに役立つと思う	.00	.02	<b>.54</b>	.18	.06
文学は、私が普段の生活では無視してしまうような人々を理解するのに役立つと思う	-.12	.01	<b>.42</b>	.19	.12
私が文学作品を理解しはじめるのは、自分の日常の関心事にその作品の内容を関連付けることができたときだ*	.08	-.19	<b>.39</b>	.27	.04
私は、登場人物を通して自分の欠点が体现されていることに気づくことがしばしばある*	.19	-.10	<b>.35</b>	.25	.04
文学作品を読むと、自分の生き方を変えたいと思うことに気づくことが時々ある	.12	.06	<b>.33</b>	-.01	.04
文学作品の中で、ある特定の人々や出来事の例について読んだあとは、私はそのようなことをもっとはっきりと分かるようになる*	.08	.24	.26	-.01	.02
面白い本を読むのは、一人静かにただ楽しみたい*	-.06	.17	.20	-.10	.10
文学について教わっていて最もいやだと感じることは、そこで取り上げられている作品が何を意味しているかを教師が教えてしまうことである*	.03	.01	.15	.07	-.05
読書をしているときには、その作家の特徴的なスタイルに注意を向けるのが好きだ	-.08	.16	.07	<b>.67</b>	-.10
文学を読んでいるときの主な興味は、作者の持つテーマや関心について知ることである	-.19	.02	.05	<b>.65</b>	-.09
私は、ある作家の作品が同時代のほかの作品とどう関係しているかを考えるのが好きだ	-.01	-.02	-.03	<b>.64</b>	.00
小説を読んでいるときの私の主な興味は、私は作者が社会や文化をどうとらえているかを知ることである	-.16	.06	.04	<b>.60</b>	-.06
何かを読んでいるときの私の主な興味は、様々なジャンルの文学を知ることである*	.01	.21	-.16	<b>.47</b>	.08
文学作品を読んでいると、明らかに不安定な人生観を持つようになることが時々感じる*	.08	-.12	.00	<b>.45</b>	.06
私が本を読んでいるときにはたいてい、その作者に特徴的なテーマを確認しようとする	.04	.06	.15	<b>.42</b>	-.12

表 3-1 LRQ 原尺度の因子分析結果（続き）

私は好きな文学作品を見つけると、たいていはその作家に関する ことを知ろうとする*	-.04	.15	.15	<b>.42</b>	.14
文学作品は人生の諸問題を実際よりも複雑にしてしまうように 思う*	-.05	-.21	.03	<b>.41</b>	.23
文学が作者の生活に関する事実を照らしだすときにはとりわけ 面白いと思う	.05	-.24	.22	<b>.39</b>	.20
私は作家の書く文体の技巧に興味をそそられる	-.03	.28	.16	<b>.38</b>	-.09
文学に挑戦することは、その作家の独特な生活の一面を理解す ることだと思う*	-.05	.08	.25	<b>.36</b>	-.17
文学作品の中での出来事と現実生活での出来事がとても似てい るものだと思うことがしばしばある*	.15	.06	.24	.25	.06
私が一番好きな小説のタイプは、ストーリーが面白いと思える ものだ	-.18	.13	.14	-.18	<b>.66</b>
小説を読んでいるとき、私をもっとも知りたいと思うことはス トーリーがどう展開していくかという点である	-.01	.13	.02	-.24	<b>.61</b>
私にとって、事件がほとんど何も起こらないように思える小説 を読むのは難しいと思う*	-.03	-.38	.12	.01	<b>.49</b>
どちらかという、動きのたくさんある小説のほうが好きだ	.03	-.01	.01	-.01	<b>.49</b>
小説やドラマでもっとも重要な要素は筋書きだと思う	-.10	.00	-.10	.19	<b>.45</b>
私は、予測できなかった結末が訪れる小説が一番好きだ	.06	.00	-.07	.19	<b>.42</b>
物語のあらすじの中で緊張感が高まってゆくのをみるのが好き だ	.22	.20	.15	-.02	<b>.39</b>
文学は道徳的なことがらをしばしばより強調している*	.13	-.28	.11	.07	.29
因子間相関					
1	—				
2	.44	—			
3	.36	.33	—		
4	.40	.18	.24	—	
5	.15	.13	.00	-.03	—

\*は作成過程で削除した項目

以外の項目については一致した尺度構造を得ることはできなかった（表 3-1）。そこで、原版の各因子からそれぞれ代表的と思われる項目の選定を行った。その際、項目の選定基準として（a）尺度構成は Miall & Kuiken（1995）の原版の結果を再現する、（b）なるべく各尺度の項目数が均一になるようにする、（c）訳語があいまいな項目はできる限り採用しない、という三つの原則に従って項目の選定を行った。その上で、仮説的な因子構造として以下のような 5 因子を想定した。すなわち（a）原版の共感因子とイメージ鮮明性因子に属する項目が、原尺度では最も安定した因子としてまとまったことを考慮した「共感・イメージ」、（b）原版の洞察因子に相当する「現実の理解」、（c）原版の余暇逃避因子に相当する「読書への没頭」、（d）原版の作者への関心因子に相当する「作者への関心」、（e）原版のストーリーに動機づけされた読み因子に相当する「ストー

リー志向」, の五つである。なお原版の文学的価値の否定因子（例：「私は、文学が社会的価値を持つとは思えない」）については、原尺度において因子の再現性が最も低く、また、欧米と日本とで文学についての概念や価値観に文化的な相違のあることが推測されたことから、選定からは除外することとした。

以上のような仮説に基づき、まず原版の文学的価値の否定因子 9 項目を除いた 59 項目について再度因子分析を行い、各項目の記述や因子負荷などを踏まえた上で項目を抽出した。各因子の項目数は、原版における各因子の最少項目数が 7 であったことに従い 7 項目とした。ただし、「共感・イメージ」因子は原版での 2 因子の合成因子としたことから、2 尺度の内容を均等に採用するため、原版「イメージ」因子から 5 項目、「共感」因子から 4 項目を採用することとし、2 項目増やした 9 項目とした。上記のような選定プロセスを経て、「共感・イメージ」が 9 項目、それ以外の四つの因子がそれぞれ 7 項目ずつの、計 37 項目から成る新たな尺度を作成し、これを日本版 LRQ（以下、LRQ-J とする）とした。LRQ-J の各項目については付録 A を参照されたい。この LRQ-J の 37 項目を改めて因子分析したところ、全ての因子で項目の負荷量は 0.4 以上となった。

**項目分析および信頼性分析** 新しく作成した LRQ-J について、各下位尺度とそれぞれに所属する項目との I-T 相関を算出したところ、すべての尺度において所属する項目との有意な高い相関を示した（すべての項目で  $p < .001$ ）。また下位尺度の  $\alpha$  係数はいずれも 0.7 以上となり、内的整合性も確認された。

### 3-2-3 考察

今回の予備調査では、Miall & Kuiken (1995) のすべての項目を翻訳し、因子構造の分析と項目分析を行った。因子分析の結果、先行研究の報告する因子構造が再現されなかったため、3-2-2 で挙げた三つの基準に従って項目の選定を行った。まず(a)の「尺度構成は原版の結果を再現する」については、Miall & Kuiken (1995) による一連の作成過程において項目数の異なる様々なバージョンの LRQ を分析した結果でも、ほぼ同じような因子構造が得られていることから、構造の普遍性が確認されていると判断したものである。結果として、イメージ鮮明性因子と共感因子は 1 つの因子である「共感・イメージ」因子という合成因子となったが、それ以外の因子については、できる限り原版と同じ構造の再

現を目指した。なお、イメージの鮮明性と共感という、2-2-7 で没入を構成するそれぞれ別な要素と仮定した体験が、なぜ日本人サンプルにおいて一つの因子としてまとまったのかについては、明確な説明を与えることは困難である。これについては研究 2 (3-3-3) においても考察する。

次に (b) の「各尺度の項目数が均一になるようにする」という基準であるが、他の尺度との比較を行う場合や得点化する場合、各尺度の項目数が均一でないことはその利用上不便なものになると思われたための措置であった。共感・イメージ因子は原版での 2 尺度の合成因子であったために、2 尺度の内容を均等に採用するという点を重視して 2 項目増やした 9 項目としたが、これ以外の尺度はすべて 7 項目にそろえることができた。最後に (c) の「訳語があいまいな項目はできる限り採用しない」であるが、68 項目の LRQ-J では、例えば「文学作品の中で、ある特定の人々や出来事の例について読んだあとには、私はそのようなことをもっとはっきりとわかるようになる」といったような、表現が冗長で理解のしづらい項目があり、このような項目は評定の妨害要因となる恐れがあった。これをできる限り排除しようとしたものである。

この結果選定された 37 項目での因子分析では、Miall & Kuiken (1995) の結果によく適合した因子構造を再現することができた。また、項目分析と信頼性分析は、ともに LRQ-J の尺度構造が安定したものであることを予想させる結果となった。今回の一連の結果は、LRQ-J による文学的体験の多次元的な測定が十分に可能であることを示すものである。

### 第 3 節 日本版文学反応質問紙の信頼性と妥当性に関する 調査的検討 (研究 2)

研究 2 では、研究 1 により作成された LRQ-J の信頼性と妥当性を検討するため、より多くの参加者を対象とした調査を行う。妥当性を検証する手段として、第 1 節でふれたような Miall & Kuiken (1995) で測定されている心理変数を参考に、わが国で実施可能な尺度を選定し、その結果を Miall らの報告と比較することで、LRQ-J の併存的妥当性の当否を明らかにする。

### 3-3-1 方法

**調査参加者** 関東地方の私立 A 大学の学生 248 名(男性 78 名, 女性 170 名), および B 女子大学の学生 249 名の計 497 名を対象に, 集団による調査を実施した。なお, 両学生群ともに, 研究 1 における調査には参加していない。

**手続き** LRQ-J の妥当性を検証するため, Miall & Kuiken (1995) が関連を指摘している心理特性に基づいて, 並行して以下の質問紙を行った。まず第 1 は Creative Experience Questionnaire (CEQ : Merckelbach et al., 2001 : 日本語版は, 岡田・松岡・轟, 2004) である(付録 B)。これは空想傾向を測定する尺度であり, 映画やドラマへの没入, 子ども時代の遊びにおける空想の強さ, 体外離脱体験などについて尋ねる 25 項目に, 5 段階で回答するものである。次に Imaginative Involvement Inventory (III) である(付録 C)。これは, Davis et al. (1978) の作成した III を元に笠井・井上(1993) が作成した質問紙である。この III はファンタジーや感覚体験, 宗教体験などさまざまな想像活動への関与を測定する 18 項目から成り, 7 段階評定である。CEQ と III はどちらもイメージへの没入傾向を測定するものと考えられており(大宮司他, 2000), LRQ が没入性尺度と強い関連性があると示唆されていることから(Miall & Kuiken, 1995), LRQ-J と関連が見られると推測された。第 3 に, Questionnaire upon Mental Imagery (QMI: Betts, 1909) の短縮版 (Sheehan, 1967。日本語版は, Richardson, 1969 鬼沢・滝浦訳 1973) である(付録 D)。これは, 七つの感覚モダリティにおけるイメージの強さを「完全に明瞭」から「まったくイメージが表れない」までの 7 段階で評定する質問紙であり, 35 項目で構成されている。LRQ の原版にはイメージ鮮明性を問う尺度があり, また Nell (1988) も, 読みの体験に関与する特性の一つとしてイメージの鮮明性を挙げていることから, LRQ-J との関連があると考えられた。第 4 に, California Adult Q-set 版 Ego-Resiliency 尺度 (CAQ 版 ER 尺度 : 中野・加藤, 2005) である(付録 E)。これは, ストレス状況下における自我の統御を測定する質問紙である。対人場面における自我の統御を示す対他 ER 因子 9 項目と, 自分自身に対する自我の統御を示す対自 ER 因子 7 項目の 2 因子 16 項目で構成されており, 7 件法による評定を求めた。Miall & Kuiken (1995) は, 共感因子とストレス尺度との関連を指摘し, さらに洞察因子と自我の退行との関連を報告していることから,

LRQ-J とも関連を持つことが考えられる。以上の質問紙を、LRQ-J と ER 尺度については両大学の参加者群に、それ以外の尺度については、B 大学の参加者群のみに、それぞれ日を分けて実施した。なお LRQ-J は研究 1 と同様、5 段階による評定を用いた。

### 3-3-2 結果

**因子構造の検討** LRQ-J について、得られた 497 名のデータを用いて最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。研究 1 による仮説から 5 因子解を指定したところ、作成時に想定した五つの尺度構造の完全な再現が確認された。各項目と因子分析の結果を表 3-2 に示す。第 1 因子には、物語情景の鮮明なイメージ化や登場人物との同一化あるいは共感を示す 9 項目が集まり、「共感・没入」とした。第 2 因子は、現実から離れて読書にのめりこむ体験や読書への傾倒を示す 7 項目となり、「読書への没頭」とした。第 3 因子は、作者のもつ関心、意図、その文体などに興味を持つ傾向を示す 7 項目となり「作者への関心」とした。第 4 因子は物語での出来事や主人公などから自己や現実世界への洞察を深める側面を示す 7 項目が集まり、「現実の理解」とした。第 5 因子はストーリーの面白さ、展開にみられる動きなどが読解の動機付けとなる傾向を示す 7 項目となり、「ストーリー志向」とした<sup>12</sup>。なお、これらの因子間にはかなりの相関が見られ、LRQ-J の測定するさまざまな体験が、互いに関連しあうものであることが示唆された。

**項目分析と内的整合性の検討** まず、LRQ-J の総得点と各下位尺度得点を算出し、性差を検討した。その結果、作者への関心得点のみに差が見られたが（男性 = 20.07, 女性 = 19.30,  $t(494) = 2.53, p < .05, g = .14$ ）、それ以外の下位尺度では性差は見られなかった。次に、各下位尺度得点の平均値を基準として対象者を高得点群と低得点群とに分け、それぞれに所属する項目の評定を従属変数とした GP 分析を行った。その結果、すべての下位尺度において、所属する項目が十分な弁別力を持つことが示された（全ての項目で  $p < .001$ ）。さらに、各下位尺度について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、その値は第 1 因子から

---

<sup>12</sup> この仮説的因子構造を検討するため確証的因子分析を行ったところ、適合度指標は許容できる値となった（GFI = .839, CFI = .865, RMSEA = .058）。



表 3-2 LRQ-J の因子分析結果

	項 目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
35	物語を読んでいると、それが本当に目の前にあるもののよう に感じられることが時々ある	<b>.83</b>	.08	-.10	-.04	.03	.68
23	私は、自分が読んだことのある物語の人物にほとんど完全に “なりきってしまった” ように感じる事が時々ある	<b>.77</b>	.00	.04	-.13	.01	.52
4	物語を読んでいると、自分が物語の人物の一人であると思う ことがある	<b>.69</b>	-.05	-.10	-.07	.02	.38
8	小説の中の会話が、まるで実際の会話を聞いているように聞 こえることがしばしばある	<b>.68</b>	.12	-.02	-.01	-.07	.50
19	私は、読んだ小説の中に出てくる場所が、写真を見ているか のようにはっきりと見えることがしばしばある	<b>.66</b>	-.07	-.02	.12	.09	.53
30	私は、自分が劇の演技の用意をしているかのように、進んで 物語中の人物の役に自分を投影しようとする	<b>.63</b>	-.04	.09	-.04	.01	.40
11	小説の中の人物が日常の中にいる実際の人であるように感 じられることが時々ある	<b>.63</b>	-.09	.03	.09	-.04	.41
26	物語や詩の情景が私にとってとても明瞭で、その情景のにお いや手触りなどの“感覚”を感じることができる	<b>.56</b>	.05	.14	.07	-.12	.45
16	物語を読んでいると、部分的にしか描かれていない情景が私 の心の中では完全で生き生きとした場面になる	<b>.46</b>	.00	.03	.23	.11	.46
33	私は、普段の仕事を忘れてしまうくらいに小説に没頭するの が好きだ	.02	<b>.87</b>	.05	-.13	.01	.70
6	時間が空いているときに最もしたいことは小説を読むこと だ	-.12	<b>.85</b>	.10	.00	-.08	.69
14	私にとって、何もすることのないときに小説を読むことは楽 しく時間を過ごすことのできるものだ	-.14	<b>.80</b>	-.04	.13	.04	.67
1	読書をしていると時間が経つのを本当に忘れてしまう	.06	<b>.65</b>	-.10	.03	.05	.46
37	最後まで読み終えるまで本を閉じられないことがよくある	.12	<b>.58</b>	-.03	.06	-.06	.42
25	読んでいる本にのめりこむあまり、完全に我を忘れてしまう ことがしばしばある	.25	<b>.51</b>	.00	-.11	.02	.37
29	物語を読むことはリラックスするのに最適だと思う	-.06	<b>.48</b>	-.09	.10	.23	.35
21	小説を読んでいるときの私の主な興味は、その作者が社会や 文化をどうとらえているかを知ることである	-.10	-.02	<b>.80</b>	-.01	.04	.59
9	文学を読んでいるときの主な興味は、作者の持つテーマや関 心について知ることである	.03	-.05	<b>.78</b>	.02	-.04	.60
17	私が本を読んでいるときにはたいいてい、その作者に特徴的な テーマを確認しようとする	.01	-.02	<b>.76</b>	-.03	.06	.56
36	読書をしているときには、その作家の特徴的なスタイルに注 意を向けるのが好きだ	-.02	.12	<b>.74</b>	-.06	.03	.59
12	私は、ある作家の作品が同時代のほかの作品とどう関係して いるかを考えるのが好きだ	.03	.03	<b>.61</b>	-.02	-.06	.39
31	文学が作者の生活に関する事実を照らしだすときにはとり わけ面白いと思う	.01	-.14	<b>.49</b>	.10	.17	.30
5	私は作家の書く文体の技巧に興味をそそられる	.12	.22	<b>.33</b>	.14	-.16	.38
20	文学は、自分のとは異なる人生を理解するのに役立つと思う	-.06	-.09	-.03	<b>.81</b>	.01	.52
27	文学に接していると、自分の日常生活の中で見落としていた 感情に時々気づくことがある	.02	.03	-.04	<b>.78</b>	-.09	.57
13	文学は、私が普段の生活では無視してしまうような人々を理 解するのに役立つと思う	-.02	.00	-.01	<b>.74</b>	-.03	.50
22	文学作品を読むと、自分の生き方を変えたいと思うことに気 づくことが時々ある	.06	-.03	-.08	<b>.60</b>	.07	.38
34	ある種の文学作品は、自分が抱く比較的ネガティブな感情を 理解するのに役立つと思う	-.08	.13	.11	<b>.55</b>	-.05	.42

表 3-2 LRQ-J の因子分析結果（続き）

7	文学作品を読むと、私の生活のなかでいつもは気づかないある部分に目を向けようとする	.02	.09	.10	<b>.54</b>	-.06	.42
2	文学作品を読むと、自分の周囲にいる人々や出来事の本質に対する洞察力が得られると思う	.05	.09	.12	<b>.40</b>	.01	.32
32	小説を読んでいるとき、私がもっとも知りたいと思うことはストーリーがどう展開していくかという点である	-.07	.10	.02	-.15	<b>.69</b>	.45
28	小説を読んでいるときには、登場人物たちに何が起るかを知ることに関心がある	.04	.06	-.10	.17	<b>.60</b>	.48
3	私が一番好きな小説のタイプは、ストーリーが面白いと思えるものだ	-.02	.12	-.14	-.03	<b>.59</b>	.37
15	どちらかというと、動きのたくさんある小説のほうが好きだ	.04	-.13	.05	-.04	<b>.57</b>	.30
24	小説やドラマでもっとも重要な要素は筋書きだと思う	.04	.07	.23	-.13	<b>.44</b>	.26
10	私は、予測できなかった結末が訪れる小説が一番好きだ	.00	-.13	.22	.07	<b>.38</b>	.21
18	物語のあらすじの中で緊張感が高まってゆくのが好きだ	.05	.00	.07	.24	<b>.38</b>	.30
		固有値	9.60	2.34	1.98	1.73	1.27
		寄与率	25.97	6.33	5.35	4.66	3.44
因子間相関		F1 物語世界への没入	—				
		F2 読書への没頭	.46	—			
		F3 作者への関心	.38	.44	—		
		F4 現実の理解	.55	.57	.53	—	
		F5 ストーリー志向	.29	.29	.13	.33	—

順に 0.88, 0.87, 0.85, 0.84, 0.74 となった。また LRQ-J 全体では  $\alpha = .92$  となった。この結果から、いずれの下位尺度も調査する上で問題のない内的整合性を有すると判断した。

**併存的妥当性の検討** 平行して行った各質問紙についても尺度得点を算出し、LRQ-J 各下位尺度得点との相関を算出したところ、多くの質問紙において有意な相関が得られた。結果を表 3-3 に示す。まず、没入傾向を測定する CEQ と III は、LRQ-J の多くの下位尺度と関連することが示された。次に、イメージ鮮明性を測定する QMI 総得点は、LRQ-J のすべての尺度に対して、ほぼ同程度の相関を示した。一方、自我の統御を測る ER 尺度では対他 ER が、LRQ-J のうち読書への没頭尺度を除く四つの下位尺度との間で弱い相関を示し、物語理解に伴う活発な体験と関連することが明らかとなった。

### 3-3-3 考察

本研究の結果、LRQ-J は研究 1 における項目選定の際に仮定した 5 因子構造が確認された。この結果は LRQ-J の各下位尺度の示す内容が頑健であることを

表 3-3 LRQ-J の各尺度とその他の尺度との相関

		<i>N</i>	平均	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6
1	LRQ-J 総合	493	118.9	21.14	—					
2	物語世界への没入	495	27.06	7.69	.78***	—				
3	読書への没頭	495	21.74	6.41	.77***	.44***	—			
4	作者への関心	496	19.56	5.41	.75***	.42***	.53***	—		
5	現実の理解	496	24.73	5.18	.79***	.50***	.54***	.54***	—	
6	ストーリー志向	495	26.74	4.00	.54***	.30***	.33***	.24***	.33***	—
7	CEQ	232	51.88	9.32	.39***	.47***	.24***	.17*	.27***	.15*
8	III	180	65.09	15.76	.52***	.55***	.44***	.30***	.30**	.13
9	QMI 総合	216	101.9	27.38	.43***	.35***	.28***	.31***	.31***	.26***
10	対他 ER	485	38.24	8.39	.20***	.25***	.06	.17***	.14**	.10*
11	対自 ER	487	31.40	8.39	.10*	.18***	.00	.03	.13**	-.01

\*\*\* $p < .001$ \*\* $p < .01$ \* $p < .05$ 

示すといえよう。また原版の因子構造と比較してみると、完全に一致したとはいえないものの、かなり類似した尺度を作成することができたと考えられ、各下位尺度の内的整合性も高い結果となったことなどから、LRQ-J の信頼性についても確認することができたものと思われる。さらに、各得点について行った性差の検討では、作者への関心尺度において男性のほうが得点の高いことが示された。原版での検討ではどの因子にも性差は見出されておらず (Miall & Kuiken, 1995)、この点は改めて検討する必要があるだろう。

一方、原版において「共感」と「イメージ鮮明性」という二つの下位尺度となっていた項目群が「共感・イメージ」という一つの因子としてまとまったことについては慎重な検討が必要である。この結果は研究 1 における因子分析の結果でも示されており、日本人サンプルにおけるこの構成概念はかなり頑健なものであると考えられる。研究 1 および研究 2 の結果は、2-2-7 で述べたような同一化・共感とイメージ鮮明性とを没入の異なる下位コンポーネントと捉える仮説とは矛盾する。これに対して明確な説明を与えることは難しいが、一つの仮説として、日本と欧米における読みの体験の相違が考えられる。2-2-7 で述べた仮説はいずれも海外での知見に基づいたものであり、日本人は欧米人とは異なり、情景のイメージと登場人物の共感とを結びつけて捉えている可能性が考えられる。しかしながら、このような相違が果たして存在するかどうかや、仮に存在したとしてなぜこのような相違が生じるかについては、今後慎重に検討する必要があるだろう。

因子分析における因子間相関では、ストーリー志向尺度を除く四つの下位尺度で中程度の相関が見られた。また、下位尺度得点の内部相関においても、すべての組み合わせで有意な相関が見られた。これらを考え合わせると、LRQ-Jの各下位尺度は仮説どおりに再現されたものの、これを完全に独立した多次元的尺度と捉えることには限界があるかもしれない。あるいは、Miall & Kuiken (1995) の指摘したような没入性との関連が、後述するように本研究でも見られたことを考えるならば、現実から離れて物語世界に入り込む体験が、物語体験の中核となっている可能性もある。

LRQ-J の妥当性の検討を目的として行った相関分析では、多くの質問紙との間で有意な相関が見られた。その多くは、Miall & Kuiken (1995) による報告を支持する結果となっており、今回作成した LRQ-J が測定ツールとして問題のない妥当性を有していると考えられる。まず CEQ と III は、LRQ-J のほとんどの下位尺度と有意な相関を示し、原版における Miall & Kuiken (1995) の報告と一致した結果となった。さらに、原版で没入との関連が見られなかったストーリー志向尺度でも、CEQ との弱い相関が得られた。これらの結果は、没入への親和性が文学的体験の広範囲な側面と関連することを示唆しており、2-2-1 で述べた読みへの没頭が没入性の構成概念として位置づけられるとする指摘 (Baum & Lynn, 1981; Davis et al., 1978; Fellows & Armstrong, 1977) を支持するものといえる。

今回の分析では、III は共感・イメージ尺度と読書への没頭尺度に対して中程度の相関を示した。一方、CEQ は共感・イメージとは中程度の相関が見られたが、読書への没頭との相関は相対的に低いものとなった。両者を比較してみると、CEQ の測定する空想傾向は、非日常的な体験をも含む概念であるが、III の測定する想像活動への関与は、様々な側面におけるイメージへの没頭が主な内容となっている。翻って LRQ-J の共感・イメージと読書への没頭では、それぞれの体験が物語の内容にかかわるものであるかどうかという点で異なっている。以上を踏まえると、物語世界への没入には、物語世界に入り込む現象と現実を離れて読み行為にのめりこむ現象という二つの側面があり、このうち後者については、空想傾向にみられる非日常的な体験との関連性が低いと推測される。これは、2-2-7 で述べたような、注意の集中や外界への意識の消失と、共感

やイメージとが異なる体験であるという仮説を支持するものともいえる。没入現象については、外界や自己に対する意識が断たれる解離体験との関連性も指摘されており（岡田他, 2004）、今後、そういった側面との関連も検討する必要があるだろう。

イメージ鮮明性の尺度である QMI は、LRQ のすべての下位尺度と有意な相関を示し、イメージ鮮明性因子を有していた原版の特徴と矛盾しない結果となった。原版ではイメージ鮮明性に関する検討は行われていないが、これは、イメージ鮮明性の高さが文学的体験全体において重要な役割を担っていることを示すと思われる。同時に、読みの過程にイメージ活動が関与するという Nell（1988）の指摘を支持するものといえる。

さらに、LRQ-J は ER 尺度との間でも弱い正の相関を示した。とりわけ対他 ER との関連は、対人場面における良好な自我機能が物語体験の多さと関連していることを示している。Miall & Kuiken（1995）が指摘した健全な自我機能としての退行との関連は、原版の中の洞察因子のみに見られたものであったが、今回の結果はそれを裏付けると同時に、さらに広範な側面との関連を示唆するといえよう。またこの結果は、現実場面での自他にかかわるスキーマなどが、物語の読みにおいても同様な形で利用されている可能性を示すという点で重要なものといえる。さらに言えば、このことは個人の精神的健康が物語理解と関連する可能性があるという点を示唆するとも考えられるだろう。

#### 第4節 まとめ

研究1および研究2の目的は、物語体験を測定する尺度を開発することであった。そのためにまず、読者反応を測定する質問紙であった LRQ を日本語に翻訳して予備調査を行い、その結果を元に LRQ-J を作成した。次に、LRQ-J の尺度構造、信頼性および妥当性を検証するために、改めて調査を行った。

研究1において、Miall & Kuiken（1995）の原版をそのまま翻訳した原尺度は、原版と一致した尺度構造を得ることができなかった。これにはいくつかの理由が考えられるが、わが国と欧米における物語や文学などに対する価値観の違いは、その中でも大きな要因を占めていると思われた。また、原版の質問項目に

は表現が冗長で理解しづらいと思われる記述も含まれており、このような項目の存在が評定の妨害要因となった可能性があった。そこで、最も文化の影響を受けていると推測された文学的価値の否定因子の項目を除外し、比較的平易な記述の項目を中心として各因子の概念を代表する項目を選定し、項目数をおよそ半数の37項目に減じた質問紙を作成することとした。研究2での分析の結果、今回作成した LRQ-J は、原版とほぼ同質な尺度であり、信頼性、妥当性を備えた尺度であることが示唆された。これによって、没入を含む文学的体験傾向を測る尺度として、LRQ-J を提供できる可能性を示すことができたと思われる。

第4章では、LRQ-J の測定する文学的体験の各側面が、互いにどういった関連性を持っているのか、そしてそれらが読書習慣という、物語読解活動を反映すると思われる指標にどのように影響するのかについて、二つの調査を通して検討する。

## 第4章

---

### 文学的体験と読書，余暇活動との関連

## 第1節 没入、文学的体験と読書活動

第4章では、2-3-5で述べた目的のうち、第2の「物語世界への没入体験が文学的体験においてどのような役割を果たしているか」と、第3の「それらの傾向が読書習慣にどのように関連するか」という二つの問題について扱う。そこでまず、物語世界への没入と文学的体験、そして読書活動の関係について整理する。

没入体験と文学的体験との関連について、2-3-1では自己変容感情仮説 (Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002) を紹介した。このモデルでは、読解中に読者が体験する物語感情 (登場人物への同一化や共感) と審美感情 (作者のメッセージや文体表現への注目) によって、「自己への見方が変わった」という自己変容体験が生じるとされている。また Miall (2011) は、物語への移入 (Green, 2004; Green & Brock, 2000) が物語読解による自己変容の役割を果たすことを指摘しており、物語への没入が文学的体験を促す役割を持っている可能性がある。ここで問題となるのは、没入体験が審美感情と連動しつつ自己変容体験を導くという自己変容感情仮説を、どのように検証するかという点である。この仮説の当否についての検討はあまり行われてはいないが、この仮説における三つの概念と LRQ の各因子とを比較すると、物語感情は共感・イメージ因子と、審美感情は作者への関心因子と、そして自己変容感情は現実の理解因子と、それぞれ概念的類似性があるように思われる。この類似性は図 4-1 (a) のようにまとめることができるが、もしこの仮説が妥当なものであれば、図 4-1 (b) に示したような自己変容感情仮説における文学的体験のプロセスは、図 4-1 (c) で表されるような LRQ-J の下位尺度間の関係に反映されると予想できる。研究3と4ではまずこの仮説モデルについて検討する。

一方、没入体験と読書習慣との関連について、Miall & Kuiken (1995) は LRQ と並行して読書習慣や余暇活動に関する質問も行っている。その結果、洞察、イメージ、共感、余暇の逃避、作者への関心の五つの下位尺度得点は、小説を読む頻度と  $r = 0.22 \sim 0.58$  の相関があったことを報告している。さらに、作者への関心得点は詩歌を読む頻度とも  $r = 0.27$  の相関がみられた。また児童を対象に読書の調査を行った秋田・無藤 (1993) は、読むことの意義として空想する



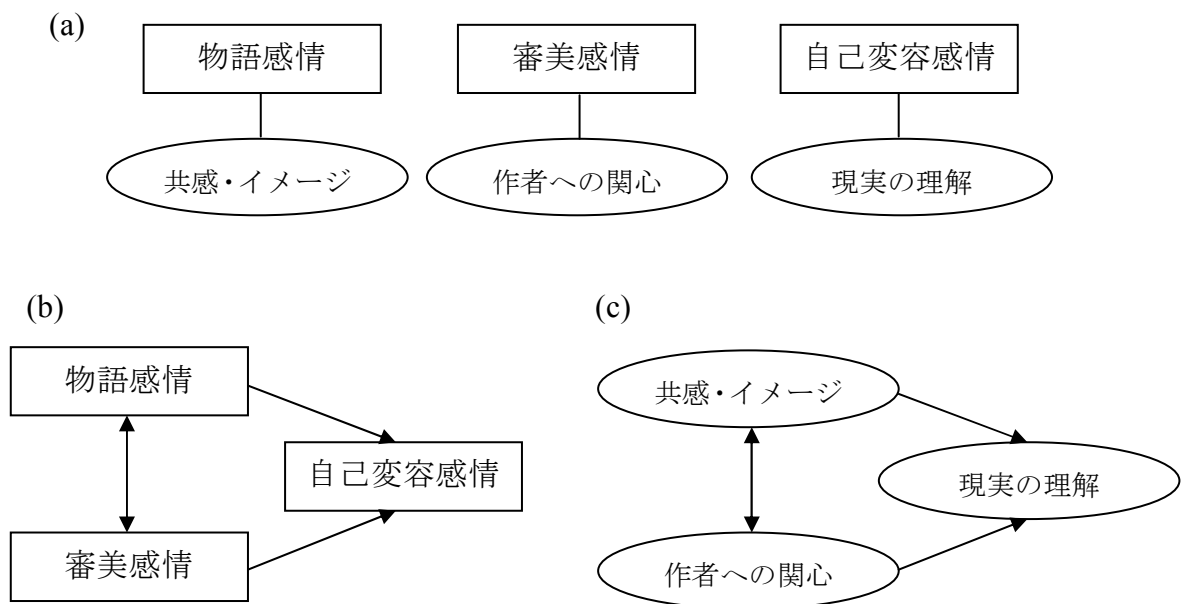


図 4-1 自己変容感情仮説と LRQ-J 下位尺度との仮説的類似性

ことを重視する傾向は読書への肯定的印象を予測し、さらに肯定的印象は読書量を予測することを報告している。このことから考えると、LRQ-J、とりわけ共感・イメージ、読書への没頭の各因子は読書頻度と関連することが予想される。これは 2-3-3 で触れたような読書への動機づけ研究 (Greaney & Neuman, 1990; Schiefele et al., 2012; Wigfield & Guthrie, 1997) から、十分に考えられる仮説である。本章ではこの仮説についても検討する。

以上のような考察に基づき、次の二つの仮説を設定する。第 1 の仮説は、「LRQ-J の共感・イメージ得点は作者への関心得点と関連し、現実の理解得点に影響する」というものである。そして第 2 の仮説は「共感・イメージ得点と読書への没頭得点は小説を読む頻度に影響する」というものである。これらの仮説について、研究 3 では大学生を、研究 4 では一般社会人を対象とした調査を行い検討する。

## 第 2 節 女子大学生における文学的体験傾向と読書習慣の 関連に関する調査的検討 (研究 3)

研究 3 では、物語への没入体験を含めた文学的体験傾向の相互関係、およびそれらと読書習慣との関連を、女子大学生を対象とした調査によって検討する。

#### 4-2-1 方法

**調査参加者** 女子大学生 236 名(平均年齢 19.1 歳, 年齢未記入者 9 名を含む)が調査に参加した。

**測定尺度** 文学的体験傾向を測定するため, 第 3 章で作成した LRQ-J を用いた(付録 A)。研究 2 で述べたように, これは共感・イメージが 9 項目, 読書への没頭, 作者への関心, 現実の理解, ストーリー志向が各 7 項目の 37 項目の質問紙である。次に, 余暇活動に関する調査である(付録 F)。これは, 読書を含むさまざまな余暇活動について, 過去 1 カ月間に行った頻度を測定するものである。調査項目は直井(2005)における余暇活動に関する質問項目を参考に, 読書, 雑誌, 新聞, 音楽, テレビ, 映画, インターネット, ゲーム, スポーツ, 個人的な勉強, 散歩, 何もしない, というカテゴリから計 21 の活動を抽出した。評定は「5: 毎日」「4: 週 1 回以上」「3: 月 1 回以上」「2: たまにする」「1: しない」の 5 段階から回答してもらった。

**手続き** 大学における講義の際に質問紙を配布し, その場で評定を求めた。なお, LRQ-J と余暇活動調査はそれぞれ別の日に配布, 実施した。

#### 4-2-2 結果

**記述統計** まず LRQ-J の基礎データを表 4-1 に示す。LRQ-J のうちストーリー一尺度を除く 4 尺度の信頼性係数はそれぞれ 0.8 以上となり, 十分な内的整合性が確認された。

表 4-1 LRQ-J の各尺度得点と信頼性係数

	共感・ イメージ	読書没頭	作者関心	現実理解	ストーリー
<i>N</i>	208	206	208	208	208
平均値	25.35	21.30	17.49	24.05	27.41
標準偏差	7.19	6.12	5.51	5.48	3.74
Cronbach $\alpha$	.81	.82	.80	.82	.59

表 4-2 LRQ-J 各尺度の内部相関

	1	2	3	4
1 共感・イメージ	—			
2 読書への没頭	.42***	—		
3 作者への関心	.30***	.40***	—	
4 現実の理解	.49***	.43***	.51***	—
5 ストーリー	.25**	.30***	.13	.20**

注：N=173 \*： $p < .05$ , \*\*： $p < .01$ , \*\*\*： $p < .001$

**相関分析** 調査時の講義のどちらかに参加していなかったケースや回答に欠損のあったケースを除外し、残った 173 名分のデータを分析の対象とした。まず、文学的体験傾向の下位概念間の関連性を検討するため、LRQ-J の各下位尺度について内部相関を算出した（表 4-2）。その結果、ストーリー尺度以外の 4 尺度間の相関はいずれも  $r = 0.4$  以上の関連が示された。

次に、文学的体験傾向と余暇活動との関連を検討するため、LRQ-J と余暇活動の 21 項目の頻度との間で、Spearman の順位相関係数を算出した（表 4-3）。その結果、小説、詩歌、文学作品など読書に関する項目との間で、文学的体験の多くの側面が有意な相関を示した。特に、読書への没頭得点と小説や文学作品を読む頻度との間では中程度の相関となった。また、クラシック音楽を聴く頻度は作者への関心尺度や現実の理解尺度などと有意な相関を示し、とりわけ現実の理解との間の相関は 0.2 を超える値となった。さらに、マンガを読む頻度は共感・イメージ得点や読書への没頭得点などとの関連がみられた。一方、LRQ-J の各下位尺度とテレビや映画を見る頻度との間には有意な相関は得られなかった。

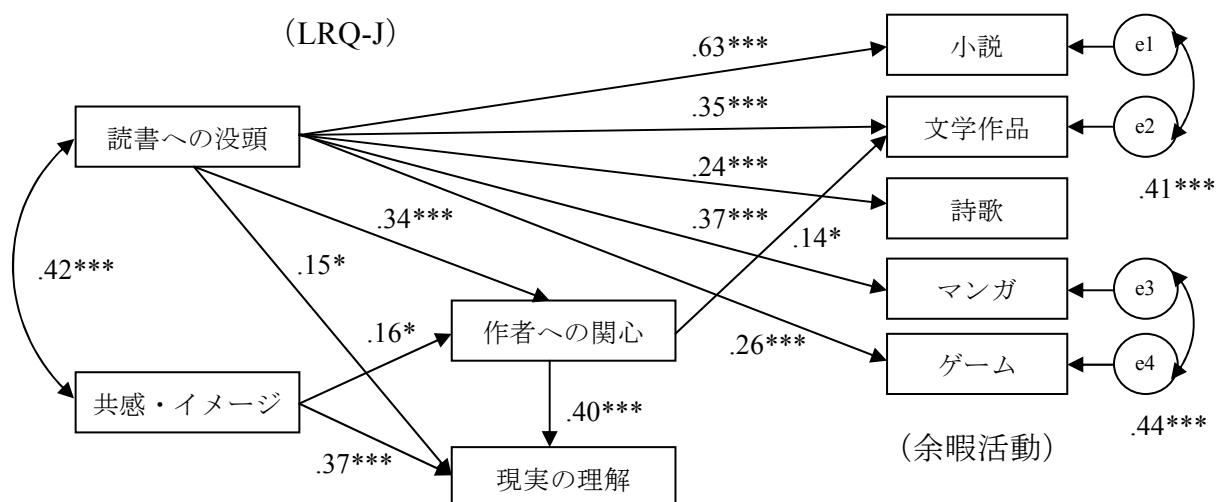
**構造方程式モデリングによる分析** 文学的体験傾向の相互影響関係とそれらの余暇活動への影響を検討するため、構造方程式モデリングによる分析を行った。このとき、共感・イメージ尺度と読書への没頭尺度はともに没入体験の下位概念であると考えられたため共変関係にあると仮定し、その上で、この二つの得点が作者への関心尺度と現実の理解尺度へそれぞれ影響し、これとは別に、作者への関心得点が現実の理解得点に影響するという仮説モデルを設定した。

表 4-3 LRQ-J 得点と余暇活動頻度との関連

		共感・ イメージ	読書没頭	作者関心	現実理解	ストーリー
本	小説	.15	.65***	.31***	.30***	.10
	詩歌	.22**	.31***	.19*	.20**	-.07
	文学	.16*	.45***	.29***	.30***	-.03
雑誌		-.01	-.19*	-.03	.03	.10
マンガ		.21**	.38***	.11	.09	.18*
新聞		.12	.16*	.16*	.14	.04
音楽	J-POP	.02	-.05	.06	.01	.08
	洋楽	.00	.05	.05	.05	.01
	クラシック	.15*	.17*	.18*	.23**	-.09
テレビ	バラエティ	-.03	-.11	-.12	-.01	.11
	ドラマ	-.05	-.05	-.05	-.04	.09
	アニメ	.13	.14	.11	.09	.05
	ニュース	.12	.12	.09	.11	.07
映画		.10	.02	.09	.13	-.02
ネット		.12	.12	.11	.04	.18*
ゲーム		.21*	.26***	.13	.04	.09
スポーツ	参加	-.05	-.16*	-.15*	-.15	-.02
	観戦	-.02	-.03	-.02	-.03	.10
勉強		.06	.05	.11	.11	-.05
散歩		.14	.20*	.08	.19*	-.05
何もしない		.01	.02	-.04	.03	-.05

注：N = 173, \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

また、それら文学的体験と余暇活動との関連については、余暇活動の中で文学的体験傾向と関連しないと推測された項目を除外し、小説、詩歌、文学、マンガ、ゲームのそれぞれの活動頻度を選定した。そして、文学的体験傾向のうち



注1 数値は標準化パス係数。\*:  $p < .05$ , \*\*\*:  $p < .001$

注2 共変関係にない誤差変数は省略した。

図 4-2 女子大学生サンプルにおける文学的体験と余暇活動

没入体験に関連する共感・イメージと読書への没頭が、六つの活動頻度に影響すると仮定し、また作者への関心尺度が、詩歌や文学作品の読書頻度に影響すると仮定した。その結果、共感・イメージから各余暇活動へのパスと、作者への関心から詩歌へのパスを除外した図 4-2 のようなモデルの適合度が充分なものであると判断された ( $GFI = .934$ ,  $CFI = .910$ ,  $RMSEA = .087$ )。このモデルでは、文学的体験のうち読書への没頭傾向がさまざまな読書頻度、とりわけ小説を読む頻度に関連すること、作者への関心傾向が文学作品を読む頻度と関連することが示された。そして、読書への没頭と共感・イメージは作者への関心、現実の理解それぞれに関与していることが示唆された。

#### 4-2-3 考察

研究 3 では、物語読解時の文学的体験傾向の相互関係と、それらが読書習慣に及ぼす影響について検討した。特に前者の検討では、Miall & Kuiken (2002) の自己変容感情仮説に沿った仮説モデルを構築し、その当否を検討した。その結果、物語への没入体験を構成する共感・イメージ得点と読書への没頭得点の双方が作者への関心と現実の理解にそれぞれ影響していること、そして作者への関心が現実の理解に影響していることが示された。これによって、図 4-1 (c)

に示したモデルが妥当なものであるという第1の仮説は支持されたといえる。また、文学的体験のうちで小説などの読書習慣に影響するのは、主に読書への没頭と作者への関心という要素であることが示唆された。この結果によって、物語への没入が読書習慣に影響するという第2の仮説は、一部支持されたと考えられる。

LRQ-J 各下位尺度の相互関係について、ストーリー志向尺度を除く四つの下位尺度の内部相関は0.4以上と高い値となった。これらは Miall & Kuiken (1995) や研究2で報告した結果とも整合的であり、文学的体験の構成要素が相互に関連している可能性を示唆している。一方、ストーリー志向尺度と他の下位尺度との相関は上記の結果よりもやや低い値となった。このことは、あらずじや展開に注目しそれらの推移を楽しみながら読むという傾向が、物語への没入や作者と文体への注目、読解に伴う自己洞察などとはあまり関連しないことを示唆している。Miall らの報告によれば、二次因子分析の結果、洞察、共感、イメージ、没頭などと、ストーリーへの注目、文学的解釈の拒否などはそれぞれ異なる上位因子で説明できる可能性が示されている。本研究における相関の結果は、これと矛盾するものではないと考えられる。一方、LRQ-J のストーリー尺度の質問項目は、読解中の体験や反応というよりも、普段の読書に対する態度や指向といった意味合いが強く、読解中の体験を測定していると考えられるその他の四つの尺度とは、やや異なる側面を測定しているとも考えられる。しかしながら、ストーリーへの注目傾向が没入体験などどのような関係にあるかは、Miall らの報告も含めてあまり検討されているとはいえない。ストーリー志向尺度が問う内容はその性質上、読者が好む物語のジャンルなどに関連する可能性があり、また物語世界への没入体験がそうしたジャンルへの読者の選好の影響を受ける可能性も十分に考えられる。しかしながら LRQ は、物語のジャンルによる文学的体験の変化という側面を測定することはできない。この問題については今後、慎重に検討する必要があるだろう。

次に、文学的体験と余暇活動との関連であるが、LRQ-J の各得点は小説、文学作品、詩歌などの読書活動と有意な相関を示した。特に、読書への没頭得点と小説を読む頻度との相関はかなりの強さとなり、小説を読むという活動が読書に注意を集中し外界への意識を少なくする傾向と強く関連することが示唆さ

れた。しかし、共感・イメージ尺度は小説を読む頻度とは有意な関連を示さなかった。このことは、小説に触れるかどうかは情景をイメージしたり登場人物に同一化したりする傾向とは関連せず、むしろ、読書にどれだけ集中できるかと関連することを示している。この結果は第1節では予測していなかったものであるが、一つの解釈としては、物語を読む人はそれに熱中していることが多いが、必ずしも物語の世界に入り込み共感やイメージを体験するわけではないということが考えられる。実際、読書の動機づけの要素として共感やイメージを取りあげている研究は少なく（数少ない例外として空想などを挙げている秋田・無藤（1993）や Greaney & Neuman（1990）がある）、物語内容を想像し人物に同一化することと読書活動との関連は詳しい検討が必要である。またそれ以外にも興味深い結果が得られた。例えば、作者への関心尺度と現実の理解尺度はクラシック音楽を聴く頻度と有意な相関を示した。これは Miall & Kuiken（1995）の報告とも一致しており、読みにおいて作者や自己、現実への洞察を行う傾向が、他の芸術への親和性と関連する可能性を示唆するという点で興味深い。一方で、Miall らの結果からは、ストーリー志向尺度とテレビや映画を見る頻度との負の相関が推測されたが、今回の結果では得られなかった。またテレビを見る頻度も、いずれの文学的体験傾向との関連も見られなかった。この結果からは、Miall & Kuiken（1995）の言う「伝統的な価値への断固とした（むしろ知的でない）関与」と読みの体験との関連については、本研究では支持されなかったと思われる。テレビドラマや映画などはいずれも物語を提供するメディアであるが、これらと LRQ の得点が関連を示さなかったことは、LRQ-J が文章形式の物語に触れたときの体験のみを測定しているという解釈もでき、この尺度の弁別的妥当性が充分なものであることを示唆していると考えられる。

これらの結果を受けて構成された仮説モデル（図 4-2）は、分析の結果十分な適合度であると判断された。これは、読解活動への没頭が読書量に影響していることが示され、没頭が読書への動機づけの一部となっているという指摘（秋田・無藤, 1993; Schiefele et al., 2012; Wigfield & Guthrie, 1997）を間接的にではあるが支持している。またこの結果からは、相関分析では得られなかった重要な示唆をいくつか得ることができる。まず、読書への没頭と各余暇活動との間に関連がみられたことは、外界への注意を読書に集中するという体験が、小説や

詩歌といった読書頻度だけでなく、ゲームや漫画といった余暇にも影響していることを示唆している。この結果は、ゲームやマンガが読書に近い体験として参加者に認識されていたと解釈することができるだろう。マンガは小説と同様物語のメディアとして広く認知されていると考えられ、またゲームにもロールプレイングゲームなどのストーリー性を重視したコンテンツが多く存在する。これに関連して、読者の操作によって物語の展開が変化する「インタラクティブ物語」が近年注目されており (Salen & Zimmerman, 2004)、今後こうした物語も広がっていくことが予想される。今後、ゲームやインタラクティブ物語などと読者の体験との関連を詳しく検討することが必要である。

また、共感・イメージや読書への没頭といった物語への没入体験は、作者や文体への注目と読書に伴う自己洞察を促す可能性が示唆された。これをさらに詳しくみると、共感・イメージと読書への没頭とでは、作者への関心と現実の理解それぞれへのパス係数に差異が見られる。すなわち、共感・イメージは自己洞察傾向に強い影響を与えているのに対し、読書への没頭は作者や文体への注目傾向に強く関与するというパターンが示されている。この結果を解釈することは容易ではないが、没入を構成する共感・イメージと注意の集中との違いによって説明できる可能性がある。まず、共感・イメージによって物語の世界や登場人物が現実のように感じられることによって、物語内の出来事をより身近に体験し、そのことが自己や現実世界への深い洞察につながると考えられる。一方、読書に集中することは文章の理解やその表現に対する注意を増大させ、その結果として文体やその背後にある作者への注目が高まると考えられる。いずれにしても、自己変容感情仮説については質的研究によってモデルの実証的検討が行われているが (Kuiken, Philips et al., 2004)、今回の結果は物語への共感などが自己観の変容を導くという指摘 (Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002) を、量的手法を通して実証したものといえるだろう。

### 第3節 文学的体験傾向が読書活動に及ぼす効果に関する

#### ウェブ調査による検討 (研究4)

研究3の結果から、物語世界への没入体験が、文体への注目や自己洞察とい



った文学的体験を促す可能性、そしてそれらが読書頻度に正の影響を与える可能性が示唆された。しかしながら、この調査における参加者は女子大学生に限られている。上記のような仮説を検証するためには、男性を含めた一般成人を対象とした調査によって研究3の結果を追試する必要がある。また、これまでの研究では、読書活動に性差が存在することを示唆する成果がいくつか得られている。例えば、男児や男性よりも女児や女性の方が読書時に体験する感情は多く、また多様であること (Oatley, 1999b; van der Bolt & Tellegen, 1996)、あるいは、読書への動機づけは男性よりも女性の方が高いことなどが示されている (Marinak & Gambell, 2010)。さらに物語への没入については、男性と女性とでは没入する物語の種類に違いのあることも指摘されている (Odağ, 2013)。これらのことから、没入を含む文学的体験傾向と余暇活動との関連にも性差が見られる可能性がある。

ところで、物語への没入体験と対照的な概念として批判的思考態度が挙げられる。批判的思考態度とは、与えられた情報を主観的に判断するのではなく、客観的に捉え、検討し、かつその推論過程も意識的に吟味する思考態度のことである (Ennis, 1987; 平山・楠見, 2004; 楠見, 2011)。このような態度は、情報から距離をとって客観的視点で理解する傾向を持つと考えられるが、Green & Brock (2000) は移入の特徴として物語内容への批判的思考の停止を挙げており、物語に触れたときにその内容が現実のものであるように受容するという没入体験とは反対の態度であると考えられる、このことから、物語への没入は批判的思考態度と負の関連を示すことが予想される。

研究4ではこれらの点について検証するため、一般成人を対象に LRQ-J と余暇活動の調査を行い、研究3の結果が追試されるかどうか、物語への没入傾向が批判的思考態度と負の関連を持つかどうか、そして文学的体験傾向と読書頻度との関連に男女で異なるパターンがみられるかどうかの3点を検討する。

#### 4-3-1 方法

**調査参加者** インターネット調査会社のモニターに登録している20歳代、30歳代、40歳代、50歳代の全国の有職者男女100名ずつ、計800名が調査に参加した。参加者の基礎データを表4-4に示す。

表 4-4 研究 4 の参加者の平均年齢と SD

	男 性			女 性		
	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
20 歳代	100	26.80	1.90	100	26.97	1.63
30 歳代	100	35.19	2.58	100	34.46	2.85
40 歳代	100	44.30	3.10	100	43.40	2.99
50 歳代	100	53.53	2.75	100	53.57	2.92

**測定尺度** まず、研究 3 と同様に文学的体験特性を 5 側面（共感・イメージ、読書への没頭、作者への関心、現実の理解、ストーリー志向）から測定する LRQ-J の 37 項目を用いた（付録 A）。また読書習慣を問う質問群として、研究 3 で用いた余暇活動に関する調査を元に、物語や読解活動に関連すると考えられる 9 項目（物語、詩歌、それ以外の本、マンガ、ドラマ、アニメ、それ以外のテレビ番組、映画、ゲーム）を新たに選定して用いた（付録 G）。評定法は研究 3 と同じく 5 段階評定とした。そして批判的思考態度を測定する指標として批判的思考態度尺度（平山・楠見, 2004）の短縮版 16 項目も同時に用いた（付録 H）。この尺度は、探究心（新しい情報を積極的に取り入れようとする）、客観性（情報を客観的に捉える）、証拠の重視（判断をする時などに根拠を重視する）、論理的思考の自覚（普段から論理的に考えることを意識する）、熟慮（時間をかけてじっくり考える）という五つの側面を測定する。また、年齢と性別以外のデモグラフィック変数として最終学歴（中学校：1、高等学校：2、短期大学または専門学校：3、大学：4、大学院：5）についても回答を求めた。

#### 4-3-2 結果

**記述統計** 回答に欠損のあったデータを除外し、742 名分のデータを分析の対象とした。LRQ-J と余暇活動質問紙の基礎データを表 4-5 に示す。

**年齢および教育歴との関連** LRQ-J と余暇活動それぞれについて、年齢と教育歴との相関係数を算出した。ただし余暇活動と教育歴は順序尺度であるため Spearman の順位相関係数を、それ以外の変数については Pearson の相関係数を算出した。その結果、表 4-5 に示すように、マンガやアニメ、ゲームに触れる頻度は年齢と負の相関があることが明らかとなった。また教育歴と関連する活

表 4-5 余暇活動と LRQ-J の得点と年齢，教育歴との相関

		<i>Mean</i>	<i>SD</i>	年齢	教育歴
余暇活動	物語	2.63	1.33	.05	.05
	詩歌	1.25	.58	.09*	.01
	それ以外の本	2.58	1.26	.05	.12**
	マンガ	2.27	1.21	-.31***	.06
	ドラマ	3.27	1.31	.15***	-.10**
	アニメ	2.40	.92	-.24***	-.05
	それ以外テレビ	2.33	1.39	.06	-.01
	映画	2.39	1.32	-.01	.00
	ゲーム	3.98	1.25	-.18***	-.06
LRQ-J	共感・イメージ	26.03	7.23	.06	-.02
	読書への没頭	20.25	6.13	.00	.06
	作者への関心	18.66	5.51	.12**	.03
	現実の理解	21.98	5.51	-.03	.04
	ストーリー	24.11	4.96	-.07	.03

注：N = 742, \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

動として物語や詩歌以外の本を読む頻度が正の，ドラマを見る頻度が負の相関がそれぞれ有意となったが，いずれも  $r = |0.2|$  未満の極めて弱い関連にとどまった。物語を読む頻度に関しては，年齢や教育歴と関連する傾向はみられなかった。また LRQ-J では，作者への関心尺度と年齢との相関が有意となったが，これもごく弱い関連にとどまった。

**性差** 余暇活動と LRQ-J の得点について性差を検討した。その結果を表 4-6 に示す。まず余暇活動に関しては，物語を読む頻度とドラマを見る頻度は男性よりも女性の方が高く，逆にマンガやアニメを見る頻度は女性よりも男性の方が高いことが示唆された。一方 LRQ-J 得点では，読書への没頭，現実の理解，ストーリー志向の各得点で男性よりも女性の方が高いという結果になった。ただし，いずれの効果量も小さいものとなった。

表 4-6 余暇活動と LRQ-J の性差

		男性		女性		<i>t</i>	Hedges's
		<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		<i>g</i>
余暇活動	物語	2.45	1.28	2.79	1.35	3.52***	.26
	詩歌	1.22	.54	1.26	.61	.97	.07
	それ以外の本	2.54	1.24	2.62	1.29	.32	.07
	マンガ	2.40	1.25	2.14	1.17	2.86**	.21
	ドラマ	3.10	1.28	3.42	1.32	3.35**	.25
	アニメ	2.55	1.31	2.25	1.32	3.10**	.23
	それ以外のテレビ	3.96	1.25	4.01	1.25	.60	.04
	映画	2.46	.93	2.34	.90	1.85	.14
	ゲーム	2.36	1.34	2.30	1.43	.56	.04
LRQ-J	共感・イメージ	25.34	6.89	26.68	7.48	2.53*	.19
	読書への没頭	19.11	5.72	21.31	6.32	4.94**	.36
	作者への関心	18.59	5.39	18.72	5.64	.32	.02
	現実の理解	21.39	5.38	22.52	5.57	2.81**	.21
	ストーリー	23.54	4.98	24.63	4.89	3.03**	.22

注：N = 742, 全て  $df = 740$ , \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

**相関分析** LRQ-J の各得点と余暇活動とで Spearman の相関係数を、また批判的思考態度尺度との間で Pearson の相関係数を、それぞれ算出したところ、表 4-7 のような結果となった。まず、物語を読む頻度は、LRQ-J の多くの下位尺度と有意な相関を示し、特に読書への没頭との相関が比較的高いものとなった。また、物語や詩歌以外の非物語を読む頻度とも、LRQ-J の得点は関連することが示された。一方で同じ物語でも、ドラマやアニメを見る頻度との相関は低いものとなり、映画を見る頻度との相関は研究 3 での大学生群よりもやや高い値となったが、 $r = .20$  未満という低い値となった。

次に、LRQ-J と批判的思考態度尺度との間では、多くの下位尺度との間で有意な正の相関が見られた。特に、探究心と論理的思考の自覚という二つの尺度得点は、現実の理解尺度と作者への関心尺度との間で 0.3 を超える相関を示し、

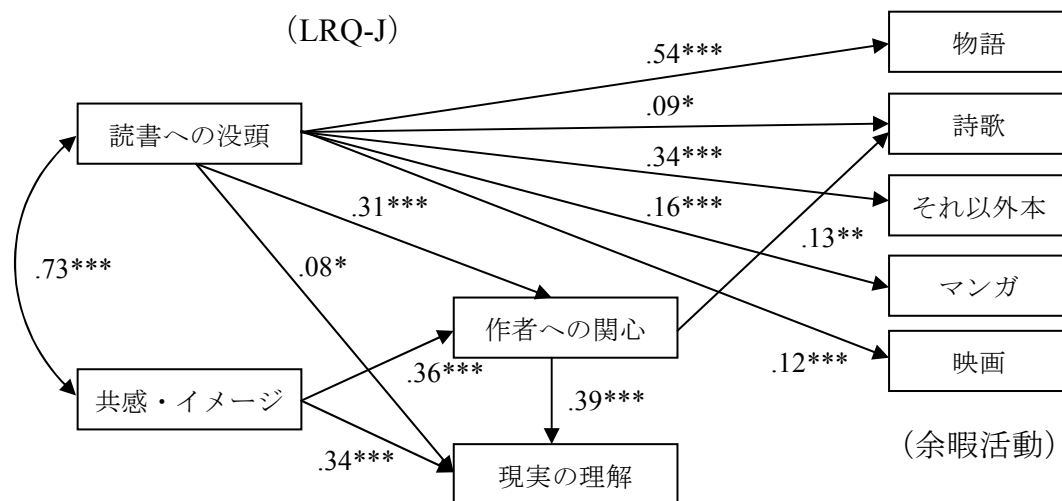
表 4-7 一般成人における読書・余暇活動、批判的思考態度と LRQ-J との相関

		共感・				
		イメージ	読書没頭	作者関心	現実理解	ストーリー
余暇活動	物語	.31***	.55***	.29***	.29***	.35***
	詩歌	.20***	.21***	.21***	.19***	.07
	それ以外本	.20***	.33***	.20***	.20***	.20***
	マンガ	.07*	.17***	.01	.02	.14***
	ドラマ	.11**	.06	.04	.01	.12**
	アニメ	.03	.08*	-.01	.00	.10**
	それ以外テレビ	.02	.00	-.03	.03	.10**
	映画	.19***	.13**	.18***	.13***	.10**
	ゲーム	-.02	-.04	-.09*	-.02	.07*
批判的思考	探究心	.26***	.27***	.33***	.39***	.27***
	客観性	.22***	.21***	.26***	.34***	.18***
	証拠の重視	.17***	.13***	.23***	.25***	.16***
	論理的思考	.21***	.20***	.31***	.31***	.16***
	熟慮	.02	.04	.07*	.11**	.06

注：N = 742, \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

客観性も現実の理解尺度との間で  $r = 0.31$  となった。これらの結果は、批判的思考態度が物語読解時の作者や文体への注目、そして読解に伴う自己洞察に関連していることを示唆している。

**構造方程式モデリングによる分析** LRQ-J の内部関連と読書頻度への影響を検討するため、構造方程式モデリングによる分析を行った。ここでの仮説モデルは、研究 3 で検討したものとほぼ同様のものを採用した。ただし、余暇活動としては物語、詩歌、それ以外の本、マンガ、ゲーム、映画という、相関分析で LRQ と有意な相関の見られた主な活動に限定した。その結果、読書への没頭得点からゲームをする頻度へのパスを除外した図 4-3 のようなモデルが、十分な適合度を持つと判断された ( $GFI = .977$ ,  $CFI = .969$ ,  $RMSEA = .071$ )。このモデルにおいて、共感・イメージは作者への関心と現実の理解とに、読書への没



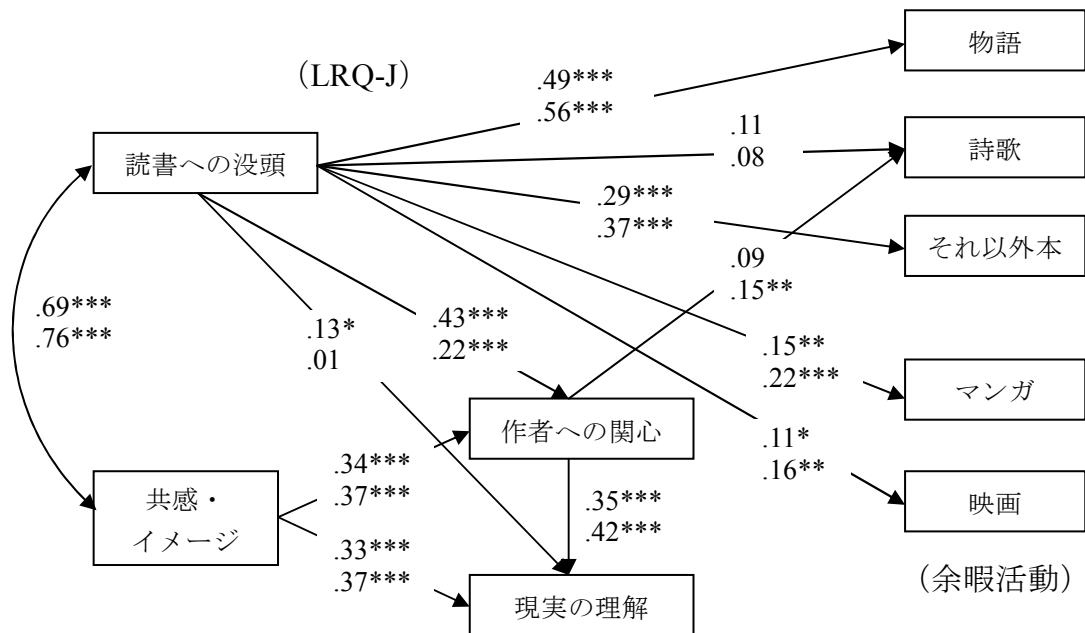
注 1 数値は標準化パス係数。N = 742. \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

注 2 誤差変数は省略した。

図 4-3 一般成人における LRQ-J と読書習慣との関連

頭は特に作者への関心に、それぞれ関与しており、作者への関心は現実の理解と関連していることが示された。また、読書への没頭は物語や詩歌、マンガなどを読む頻度と関連していたが、それだけでなく非物語を読む頻度との関連もみられた。一方、作者への関心尺度は詩歌との関連が有意な結果となった。

**多母集団同時分析** 文学的体験の相互関係と読書頻度との関連が男性と女性とで異なるかを検討するため、上記モデルの多母集団同時分析を行った。配置普遍性を検討するため等価制約のない分析を行ったところ、適合度は充分なものであると判断され（GFI = .972, CFI = .969, RMSEA = .050）、モデルが男性・女性の両集団において当てはまりが良いことが示唆された。男性と女性それぞれのパス係数を図 4-4 に示す。この中で、男性と女性とで変数間の関連に差があるかを検討するためパス係数の差の検定を行った。その結果、読書への没頭から作者への関心へのパス（ $z = 2.67, p < .01$ ）と、共感・イメージと読書への没頭の共変パス（ $z = 2.20, p < .05$ ）の差が有意となり、男性は女性よりも読書への没頭と作者への関心の関連が強く、逆に没頭と共感・イメージとの関連が弱いことが示された。また、男性では読書への没頭から現実の理解へのパスが有意となったのに対し、女性では非有意となった。逆に、男性で非有意となった作者への関心から詩歌を読む頻度へのパスは、女性において有意となった。



注1 上段の数值は男性 (n = 357) の, 下段は女性 (n = 385) の標準化パス係数。\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

注2 誤差変数は省略した。

図 4-4 男性と女性における LRQ-J と読書・余暇活動の関連

さらに, 読書への没頭から詩歌を読む頻度へのパスは男性, 女性ともに非有意となった。

#### 4-3-3 考察

本研究の結果, LRQ の測定する文学的体験は相互に強い関連を持っており, 特に共感・イメージと読書への没頭が, 自己洞察など文学的体験の多くの側面に影響していることが示された。またこれらの文学的体験は, 物語, 詩歌, それ以外の非物語の読書活動に広く関連することが示された。中でも, 読書習慣に影響するのは読書への没頭, すなわち読みの活動に注意を集中させる傾向であることが明らかとなった。これらは研究3における女子大学生での調査結果とほぼ一致するものであり, 第1節で述べた第1の仮説は支持され, 第2の仮説も一部支持されたといえる。

文学的体験内部の相互関係について今回の結果と研究3の結果を総合すると, 物語への没入を反映する二つの尺度, すなわち共感・イメージと読書への没頭

が読解過程においてそれぞれ異なる役割を果たしていることが考えられる。読書頻度に影響を与えているのは主に読書への没頭であり、普段から読みに集中しやすく、また日常から離れるために読書をする傾向のある人ほど日常的に本に触れていることを示すものである。これは、気分転換に読書をする子どもほど読書量が多いという秋田・無藤（1993）の結果とも整合的であり、読書に熱中することが読書の動機づけとなっているという多くの研究（De Naeghel et al., 2012; Schiefele et al., 2012; Wigfield & Guthrie, 1997; Watkins & Coffey, 2004）を支持するものといえる。一方、共感・イメージは読書頻度には直接関連せず、むしろ、読解中に生じる文学的体験を促すはたらきをしていると考えられる。物語を読んだことで生じる自己観の変容は文学的体験の中核と考えられるが（Kuiken, Miall et al., 2004; Miall, 2011）、本研究の結果からは、これに関係する自己洞察に物語への没入が関与している可能性があるといえるだろう。

文学的体験のうち作者への関心尺度は、本研究では詩歌を読む頻度と関連を示した。この尺度は読みながら作者のスタイルやその意図、文体などを推測する傾向を示すものであるが、こうした読み方は、複雑な文体表現が含まれる詩歌において特に重要なものと考えられる。研究3では、作者への関心は文学作品を読む頻度とのみ関連し、詩歌との関連はみられなかったが、作者像や文体表現への注目傾向は、読んでいるジャンルによって大きな影響を受けるとも考えられ、今後は実際の読みにおける体験に注目した検討も必要であろう。

本研究では文学的体験と読書活動の性差も検討した。このうち得点の比較では、いくつかの尺度に男女間で差がみられた。とりわけLRQの得点では多くの尺度に性差がみられ、このことは、女性は男性よりも文学的体験を多く経験している可能性を示すと考えられる。Miall & Kuiken（1995）は、LRQの得点では性差はほとんどないことを報告しているが、読書中の感情喚起や感情的関与には男女差があるとする研究もあり（Odağ, 2013; van der Bolt & Tellegen, 1996）、文学的体験の性差についてさらに検討する必要があるだろう。読書習慣においても、物語を読む頻度は男性よりも女性の方が多いことが示されており、物語は非物語よりも情動的な読みをしやすいために、男性よりも女性の方が好む可能性が考えられる。一方、多母集団同時分析の結果では、まず共感・イメージと読書への没頭の共変関係は男性よりも女性で強いことも示されているが、没



入体験のなかでも共感しながら読むという行為は情動を多く含むと考えられる。これらを総合すると、本研究の結果は、男性より女性の方が情動的な読み方をしているといういくつかの指摘（Clark & Rumbold, 2006; Marinak & Gambell, 2010; Oatley, 1999b）を支持するものといえる。また男性は女性よりも読みに没頭すると文体や作者へ注目する傾向が高いことも明らかになった。この結果に対して明確な説明を与えることは現時点では難しいが、男性は女性よりも物語を分析的に読むことが指摘されており（Odağ, 2013）、男性は物語の内容と同時に、文体の技巧や作者のメッセージなどを分析的に理解しようとしている可能性がある。そしてこの差異は、男性はシステムティックに情報を理解するのに対して、女性は共感的に理解しようとする傾向があるという仮説（Baron-Cohen, 2002; Baron-Cohen, 2003 三宅訳 2005）によって説明できるかもしれない。

このように考えると、文学的体験は、没入体験のように情動が深く関連する側面がある一方で（Miall, 1988, 1989; Miall & Kuiken, 2002）、自己洞察や文体表現への注目のように認知的、客観的な思考も含んでいると捉えることができる。この点について、今回の調査では批判的思考態度と LRQ との関連も検討したが、批判的思考態度尺度の多くの下位尺度は LRQ と正の相関を示した。これは Green & Brock（2000）の指摘とは矛盾する結果であり、第3節の冒頭で示した仮説とも整合しないものであるが、もし文学的体験が、Miall（1989）のいうように没入（特にその中でも共感）という情動的要素によってもたらされる認知的なプロセスであるとするならば、この結果は批判的思考態度が文学的体験の認知的側面と関連する可能性を示すものであり興味深い。本研究の冒頭でも述べたように、没入体験と批判的思考は一見相反するプロセスのようにみえるが、人間は状況によって批判的思考を用いるかどうかを判断していることが指摘されており（田中・楠見, 2007）、物語に没入するだけのときには批判的思考はオフになるが、読みながら深い洞察を行うときにはそれがオンになるといったメタ認知が働いていると考えることもできる。

本研究では各尺度の得点やパス係数において男女差が見られたものの、多母集団同時分析の結果は、文学的体験のプロセスモデルが男性、女性どちらの群でも満足すべき適合度であったことを示している。このモデルは 4-2-2 で述べた研究3でのモデルとほぼ同じものであるが、本研究でも研究3と同様にモデ

ルの当てはまりは良いものとなった。これらのことは、Miall & Kuiken (2002) の文学的体験のモデルが頑健である可能性を示すものである。LRQ はあくまで文学的体験の傾向を測定するものであり、実際の読みにおける文学的体験を測定するものではないが、今後は Kuiken, Phillips et al. (2004) のような質的研究とともに、文学的体験の生起プロセスを量的に検討していくことが求められる。

#### 第4節 まとめ

本章では、物語世界への没入体験と文学的体験との関係、そしてそれらと読書活動との関係について二つの研究を通して検討した。研究3では女子大学生を、研究4では一般成人を対象に調査を行ったが、この二つの結果はおおむね同一のものとなり、没入体験が自己洞察など文学的体験の中核となる要素に関与していることと、没入体験は読書頻度を予測することという二つの仮説が頑健に支持されたと考えられる。

次章では、研究1から4までの検討では触れることのできなかった、読解時に実際に体験する没入状態について実証的に検討する。これによって、4-3-3の最後で触れた実際の読解時の体験に、より直接的にアプローチすることが可能になると思われる。

## 第 5 章

---

### 物語読解時の没入状態の生起に関する検討

## 第1節 物語読解と移入 - イメージモデル

第4章までは Miall & Kuiken (1995) の開発した LRQ-J を用いて、物語世界への没入体験の測定とそれらの読解活動における役割について検討してきた。しかしすでに述べたように、この LRQ は読解時の没入体験そのものに焦点を当てた尺度ではない。物語への没入体験を検討するためには、実際に物語を読んでいるときの読者の体験を測定できるような尺度を用いて、LRQ が実際の読解過程と関連していることを確認する必要がある。

物語読解時の読者の体験については、2-2 や 2-3 でも述べたように、これまでにさまざまな尺度が開発されている。例えば、登場人物への同一化を測定する同一化尺度 (Identification Scale: Cohen, 2001) や、物語に感ずる現実感やその出来事をどれだけ信じるかを測定する物語信憑性尺度 (Narrative Believability Scale: Yale, 2013)、物語への認知的、情動的な関与を測定する物語関与尺度 (Narrative Engagement Scale: Busselle & Bilandzic, 2009)、物語への移入を測定する移入尺度 (Transportation Scale: Green & Brock, 2000) などがある。このなかで、後者二つは物語への没入を包括的に捉える尺度を開発しており、これらは本論文で検討する物語への没入体験を測定しうるものであると考えられるが、現在のところ物語に関連する研究で最も広く使われているのは移入尺度である。そこで研究5と研究6ではこの移入尺度の日本語版を作成し、LRQ の測定する文学的体験傾向が移入とどのように関連するかを検討する。

移入尺度は移入 - イメージモデル (transportation-imagery model of narrative persuasion) に基づいて作成された尺度である (Green & Brock, 2000)。移入 - イメージモデルとは、物語による説得や態度変化がどのように生じるのかを説明した理論であり、物語世界に全ての注意を向ける移入という状態になって、現実世界への注意や物語内容に関する批判的思考が抑制され、代わりに物語を鮮明にイメージするようになることで、物語内容に沿った方向に読者の態度が変化するというモデルである (Green, 2004; Green & Dill, 2012)。2-2-2 でも触れたが、この移入 - イメージモデルの中核となっている読者の移入体験には大きな個人差があることから、Green らは Gerrig (1993) などの記述を元に、15 項目からなる移入尺度を作成した。この尺度は一般項目 11 項目と物語内容によって

変更が可能な4項目とで構成されており、因子分析の結果 (a) 物語への認知的な関与を示す「認知」因子、(b) 物語に感情的に影響を受けた程度を示す「感情」因子、(c) 物語の内容をイメージできたかどうかを示す「イメージ」因子の3因子に分かれることが報告されているが (Green & Brock, 2000)、態度変化への影響を検討した実験では因子間の相違はみられなかったことから、その後の多くの研究では1因子の尺度として用いられている (Appel & Richter, 2010; Green, 2004; Green & Brock, 2000; Mazzocco et al., 2010; Tal-Or & Cohen, 2010)。また、移入尺度の $\alpha$ 係数 ( $N = 274$ ) は 0.76 であり、没入性尺度 (Tellegen & Atkinson, 1974) との間には弱い相関 ( $r = .24$ ) があることが示されている (Green & Brock, 2000)。これらの結果から、移入尺度は十分な信頼性と妥当性を有するとされており、2-2-2 および 2-2-7 での考察と合わせると、この尺度が読者が物語読解時に体験する没入状態を測定する尺度であるといえる。

移入については、わが国でも検討の試みがされている。小森 (2012) は、物語へ移入することが物語内容に関連する広告への評価に影響するかを検討するため、Green & Brock (2000) を参考に9項目の移入チェック尺度を作成し、実験2では184名の参加者を対象としたデータとして $\alpha = .77$ という結果を報告している。これはGreen & Brock (2000) の報告した信頼性係数ともほぼ一致している。しかしながら、小森 (2012) は移入尺度を物語自体の移入のしやすさを測定するための操作チェック指標として用いており、移入尺度自体の検討は行っていない。

そこで本章では、物語読解時の没入状態を測定する尺度として、移入尺度の日本語版を作成して信頼性と妥当性の検討を行い (研究5)、次いで、没入状態としての移入に文学的体験傾向がどのように関連するかを検討する (研究6)。

## 第2節 日本語版移入尺度の作成および信頼性と 妥当性の検討 (研究5)

本研究の目的は、Green & Brock (2000) の移入尺度の日本語版を作成し、信頼性と妥当性を検討することである。このうち妥当性は、没入性尺度の日本語版がないため検討が難しいが、同じく没入性尺度との相関が報告されており、

また理論的にも極めて近い概念を測定しているとみられる LRQ，なかでも共感・イメージ尺度や読書への没頭尺度との関連が予想される。そのため本研究では移入尺度と LRQ-J との併存的妥当性を検討する。

#### 5-2-1 方法

**調査参加者** 近畿地方の大学生および専門学校生 185 名（男性 73 名，女性 112 名，平均年齢 20.6 歳。年齢未記入者 2 名を含む）が調査に参加した。

**物語課題** 参加者に読んでもらう物語課題として，小川未明の短編児童文学作品である「千代紙の春」（小川，1956）を用いた。簡単なあらすじを述べると，これは，主人公であるおばあさんが病気の孫娘のために魚を買っていこうとするがその魚を逃がしてしまったために魚屋の主人と口論になり，易者のとりなしでその分のお金を払うと，代わりに魚屋がお孫さんにと千代紙をくれて，孫娘がその千代紙をもらって喜ぶ，というものである。参加者に呈示した部分は導入と結末を省いた物語の中心部分であり，長さはおよそ 1,300 字であった。

**測定尺度** まず，Green & Brock（2000）の Transportation scale を，原著者の許諾を得た上で日本語に翻訳した。英文校閲会社によるバックトランスレーションを経て，日本語版尺度と原版との等質性を確保した。日本語版尺度は原版と同じく，共通項目 11 項目と物語に応じて改変可能な項目 4 項目の計 15 項目で構成されている。改変可能な 4 項目（12，13，14，15）は全て「（物語に登場する具体的事物あるいは人物）を鮮明にイメージすることができた」というものであり，読者の鮮明なイメージを問う項目となっている（質問項目については付録 I を参照のこと）。これらの項目について，上記の物語課題を読んでいたときどれくらい体験したかを 7 段階（1：全く当てはまらない～7：非常に当てはまる）で評定してもらった。また，併存的妥当性の検討のために LRQ-J も同時に実施した（付録 A）。

**手続き** 各大学，専門学校における講義の際に質問紙を配付し実施した。質問紙はまず物語課題から始まり，参加者はそれを読んだ後で移入尺度に回答し，最後に LRQ に回答した。

表 5-1 日本語版移入尺度の因子分析結果

項 目	1	2	3	共通性
11 物語の中の出来事に触れて自分の人生が変わったと思う	<b>.74</b>	.08	-.24	.44
7 この物語は自分の感情に影響を与えた	<b>.66</b>	-.09	.16	.16
10 物語の中で起きた出来事は、自分の日常生活にも関連することだ と思う	<b>.61</b>	.10	-.01	.34
8 どうなればこの物語が違う結末になったかを考えた	<b>.44</b>	.03	-.08	.65
6 読んでいるとき、この物語の結末を知りたいと思った	<b>.40</b>	-.01	.23	.11
2 <sup>a</sup> 物語を読んでいるあいだ、この部屋で起きていることが気になっ た <sup>b</sup>	<b>-.36</b>	-.03	.28	.25
5 <sup>a</sup> 物語を読み終わったあと、すぐに頭を切り替えることができた <sup>b</sup>	<b>.32</b>	-.14	-.10	.47
12 「おじいさん」の様子をはっきりとイメージすることができた	-.08	<b>.96</b>	-.07	.19
13 「おばあさん」の様子をはっきりとイメージすることができた	-.07	<b>.79</b>	.11	.29
15 「美代子さん」の様子をはっきりとイメージすることができた	.12	<b>.49</b>	.03	.41
14 「千代紙」の色や形をはっきりとイメージすることができた	.28	<b>.37</b>	.01	.55
4 物語を読んでいるあいだ、物語に入り込んでいるように感じた	.20	.00	<b>.74</b>	.84
1 物語を読んでいるとき、物語の中で起こった出来事を簡単に思い 描くことができた	-.21	.19	<b>.57</b>	.69
9 物語を読んでいる間、気持ちがあちこちにそれた <sup>b</sup>	-.25	-.06	<b>.55</b>	.27
3 物語で描かれている場面に自分がいるように感じた	.32	.04	<b>.40</b>	.30
因子間相関		1「影響」	—	
		2「イメージ」	.24	—
		3「没入」	.21	.49
			—	—

注 1 番号横の<sup>a</sup>は削除した項目を示す。

注 2 項目末尾の<sup>b</sup>は逆転項目を示す。

## 5-2-2 結果

**因子構造の検討** 移入尺度の 15 項目について最尤法による因子分析を実施した。初期解のスクリープロットを確認したところ、固有値は順に 3.73, 2.46, 1.40, 1.03, 1.00, のようになり、3 因子構造が妥当と判断された。これを踏まえ 3 因子解を指定し、プロマックス回転を実施した。その結果を表 5-1 に示す。第 1 因子は物語によって影響を受けた程度を示す項目が中心となり、「影響」因子と名付けた。これは Green & Brock (2000) の「感情」因子に相当する。第 2 因子は改変可能な項目が集まり、いずれも物語に登場する事物のイメージを問うことから「イメージ」因子と命名した。これは Green らのいう「イメージ」因子に相当する。第 3 因子は読みに集中し物語へ没入していたかを問う項目が集まり「没入」因子とした。これは Green らの「認知」因子に相当するものである。これら 3 因子の間には弱い相関から中程度の相関が見られ、特に「イメ

表 5-2 移入尺度の得点と信頼性係数

	<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	Cronbach $\alpha$
移入総合	182	4.27	.77	.77
影響	184	3.56	1.08	.71
イメージ	185	4.50	1.04	.76
没入	183	4.95	.99	.62

ージ」と「没入」との相関はやや高いものであることが明らかとなった。

**項目分析および信頼性分析** Green & Brock (2000) に従い 15 項目で合計得点を算出し、各項目との I-T 相関分析を行った。その結果、項目 2 と項目 5 の相関がいずれも  $r = 0.2$  を下回った。この二つの項目は逆転項目として挿入されていたものであるが、これらは他の項目との整合性が低いと判断し、以降の分析から除外することとした。これに基づき、残った 13 項目と各因子について尺度得点（項目の合計得点を項目数で除した値）と Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した（表 5-2）。その結果、「没入」の下位尺度の信頼性がやや低い値となったが、それ以外の下位尺度と移入尺度全体の信頼性はおおむね満足すべき値となった。これらの結果から、「影響」因子 5 項目、「イメージ」因子と「没入」因子それぞれ 4 項目ずつの計 13 項目を日本語版移入尺度とした。なお、これらの得点の性差を検討したところ、「没頭」（男性 = 4.70, 女性 = 5.11,  $t(181) = 2.72, p < .01, g = .41$ ）と「イメージ」（男性 = 4.19, 女性 = 4.70,  $t(183) = 3.32, p < .01, g = .50$ ），そして 13 項目の総合得点（男性 = 4.04, 女性 = 4.43,  $t(180) = 3.45, p < .01, g = .52$ ）で有意となり、いずれも男性より女性で得点が高くなった。

**併存的妥当性の検討** LRQ-J の各尺度得点を算出し、移入尺度との相関を算出したところ、移入尺度は LRQ-J の多くの下位尺度と、有意な正の相関を示した。結果を表 5-3 に示す。まず、移入尺度の全体得点は LRQ-J の全ての下位尺度と有意な相関を示し、特に共感・イメージ尺度との得点は  $r = 0.5$  を超える値となった。次に移入尺度の各下位尺度をみると、「影響」尺度はストーリー志向尺度を除く 4 尺度と関連を示し、広い範囲の文学的体験と関連していたが、「イメージ」尺度と「没入」尺度は作者への関心尺度との関連は有意とならず、



表 5-3 移入尺度と LRQ-J との相関

	共感・ イメージ	読書没頭	作者関心	現実理解	ストーリー
移入総合	.56***	.43***	.31***	.43***	.34***
影響	.41***	.36***	.43***	.41***	.19*
イメージ	.38***	.31***	.11	.21**	.27***
没入	.41***	.24**	.06	.28***	.31***

注：N = 176～181, \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

主に共感・イメージ尺度と読書への没頭尺度との間での相関がみられた。

### 5-2-3 考察

本研究の目的は物語読解時の没入状態を測る尺度として、日本語版移入尺度を作成しその検討を行うことであった。因子分析の結果、この尺度は3因子で構成されていると判断され、それぞれ「影響」「イメージ」「没入」と名付けられた。この構造は Green & Brock (2000) の報告ともほぼ一致するものであり、移入体験が (a)「没入」が示すような読解への集中と物語世界への積極的関与、(b)「イメージ」が示すような物語世界についてのイメージの活性化、そして (c)「影響」が示すような物語を現実のように感じたり物語による影響を受けたりする、という要素で構成されていることを示すものである。移入-イメージモデルでは移入による説得効果のプロセスとして物語世界への注意の集中、物語世界のイメージ、そして批判的思考の停止という三つの要素が想定されているが (Green & Brock, 2002; Green, Brock et al., 2004; Green & Dill, 2012), (a) は注意の集中に、(b) は物語のイメージにそれぞれ対応しているといえよう。また (c) は物語内容が読者の認知的枠組みに影響していることを示しており、物語情報への批判的思考の停止という要素と関連しているかもしれない。

項目分析の結果、物語からの注意がそれやすいという体験を問う2項目が削除された。これらの項目は原版で逆転項目となっていたものであったが、これ

らと移入尺度全体との関連が低くなった理由は次のようなものであろう。まず項目 2 は「部屋で起きていることが気になった」というものであったが、これには、どのような状況で課題となる物語を読んでいたかが強く影響すると考えられる。今回調査を行った状況は集団実施であり、普段物語を読む状況のようなプライベートな状況とは、幾分異なる環境であったことは否定できない。このため、周囲に人がいる状況下での物語読解という特殊な状況が回答をゆがめた可能性は充分考慮すべきであろう。次に項目 5 は「読み終わったあと頭を切り替えるのは簡単だった」というものであったが、これも項目 2 と同様に状況要因が回答をゆがめている可能性がある。もう一つ考慮すべき可能性として、読後に他のことに注意をすぐ向けられるということが、移入とはあまり関連しないかもしれないという点がある。すなわち、物語に移入しやすいかどうかと、その状態から現実の世界に戻りにくいかどうかは、別の次元として捉えられる可能性である。これについては先行研究でもあまり議論されておらず、慎重な検討を要する。移入に関連するとされる没入性や空想傾向などでは、そうした変性意識体験の持続という側面も議論されることがあるが (Lynn & Rhue, 1986; Tellegen & Atkinson, 1974)、物語への没入は、これらよりもやや日常の活動に近いものである。没入状態の持続の個人差についてはまだ明らかになっていないことも多く、今後さらなる検討の余地がある。このように最終的に採用された尺度は 13 項目と原版よりも少なくなったが、これらを除いた 13 項目の信頼性係数は良好な値となったことは、この尺度の一貫性が頑健であることを示している。

移入尺度の下位尺度の扱いについて Green & Brock (2000) は、下位尺度で分析したときと全体得点で分析したときとで、態度変化への影響に変化はなかったとして、全体得点での分析を報告している。これ以降のさまざまな研究においても、移入尺度は 1 因子のように扱われているが (Appel & Richter, 2010; Mazzocco et al., 2010; Murphy et al., 2013)、移入が態度変化をもたらすメカニズムを検討する場合には、因子構造を考慮に入れた検討が必要となるだろう。

移入尺度の得点に性差があるか否かについては、Green & Brock (2000) には報告は見られない。しかしながら本研究では全体得点、下位尺度のうち「没頭」「イメージ」の両得点が男性より女性で高くなることが示された。この結果は

研究 4 での結果とも一致しており、没頭を含む読書への動機づけに男女差がみられるという多くの報告（Marinak & Gambell, 2010; McGeown, Goodwin, Henderson, & Wright, 2012; Wigfield & Guthrie, 1997）とも整合的なものである。また、こうした性差が「影響」得点では見られなかったことは注目に値する。物語から認知的、感情的影響を受け、それによって自己観や人生観が変わったように感じるという側面は、移入の中でも他の要素とは異なる特徴的なコンポーネントである可能性がある。

妥当性検討のために行った LRQ-J との相関分析では、移入は予想通り LRQ-J の共感・イメージ尺度と読書没頭尺度との間で中程度の関連が示された。このことは、移入尺度の併存的妥当性が確認されたことを示すと同時に、移入体験は物語への没入以外の文学的体験とも関連することも示唆している。移入尺度の下位尺度別にみると、三つの下位尺度はいずれも LRQ-J の共感・イメージや読書への没頭とはほぼ同じ程度の相関を示したのに対し、「イメージ」「没入」の二つの下位尺度と LRQ の現実の理解尺度との相関は、「影響」が示すよりも低い値となった。さらにこの二つの尺度は、LRQ の作者への関心尺度とはあまり関連しないことが明らかになった。このことは、没入し、また作品世界をイメージすることと、作者や文体に注意を向けたり自己洞察を深めたりするといった文学的体験とは直接的には関連しないことを示唆している。移入尺度全体得点とこれら二つの LRQ 尺度との相関は、「影響」得点に影響している可能性が高い。「影響」得点は物語による自己へのインパクトや人生観の変容などを問うており、文学的体験ともつながりのある可能性を予想させるものである。

以上のように、本研究で開発された日本語版移入尺度は、十分な信頼性と妥当性のあることが確認された。この尺度を用いることによって、物語読解時の読者の体験をより詳細に把握することが可能となり、没入体験と読解過程の包括的解明に大いに貢献することが期待される。

### 第 3 節 物語への没入傾向が移入体験の生起に及ぼす効果に関する 調査的検討（研究 6）

研究 6 では、文学的体験傾向がどのように移入体験と関連するかを検討する。

前節で述べた研究 5 の結果、移入尺度は LRQ の共感・イメージ得点以外の尺度とも関連を示した。このことは、文学的体験の広範な傾向が移入状態に関連する可能性を示すものである。移入体験は個人の態度変容や物語による説得を促す効果があり、これが起こる理由として、批判的思考の停止や物語の内容を身近に、あるいは自身の体験であるように感じる事が挙げられている (Green & Brock, 2002; Green & Dill, 2012)。こうした体験は文学的体験を構成し、深い洞察や自己変容体験 (Kuiken, Miall et al., 2004; Miall, 2011; Miall & kuiken, 2002) を促すものである (この仮説については第 4 章の研究 3 と研究 4 で実証的に検討し、支持された)。一方、移入尺度には人生観の変化や物語から影響を受けたことなどを問う項目があるが、態度や信念はしばしば個人的な価値観とも類似したものと捉えられており<sup>13</sup> (Thurstone, 1946)、自己受容体験による自己観や価値観の変容と物語による態度変化とは共通点があると考えられる。もしそうであるならば、移入体験は、文学的体験のうち読解にともなう自己洞察と関連することが予想される。そこで本研究では、「読解時の移入状態は物語への没入傾向だけでなく自己洞察傾向の影響も受ける」という仮説を立て、この当否について調査を通して検討する。

### 5-3-1 方法

**調査参加者** 近畿地方の大学生および大学院生 89 名 (男性 36 名, 女性 53 名, 平均年齢 21.0 歳) が調査に参加した。なお本研究の参加者はいずれも研究 5 での調査には参加していない。

**物語課題および測定尺度** 物語課題と測定尺度は研究 5 のものと同じものを用いた。すなわち、研究 5 で作成した移入尺度 15 項目 (付録 I) と、LRQ-J の 37 項目を実施した (付録 A)。

**手続き** 大学における講義の際に質問紙を配付、実施した。質問紙の構成、および教示は研究 5 と同一であった。

---

<sup>13</sup> 態度 (attitude) と価値 (value) との違いとして、態度が特定の対象を持つのに対して価値は状況依存的でないものであること、また価値には態度とは異なり階層的な優先度があることなどが指摘されている (Toretti & Kaikati, 2009)。

表 5-4 LRQ-J と移入尺度の得点と相関行列

		<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5
LRQ-J									
1	共感・イメージ	88	3.04	.91	—				
2	読書没頭	88	3.13	.93	.51***	—			
3	作者関心	88	2.63	.79	.24*	.30**	—		
4	現実理解	88	3.50	.82	.38***	.45***	.49***	—	
5	ストーリー	87	3.82	.58	.46***	.41***	.20	.25*	—
移入尺度									
6	全体	86	4.06	.76	.57***	.44***	.24*	.39***	.35***

注：\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

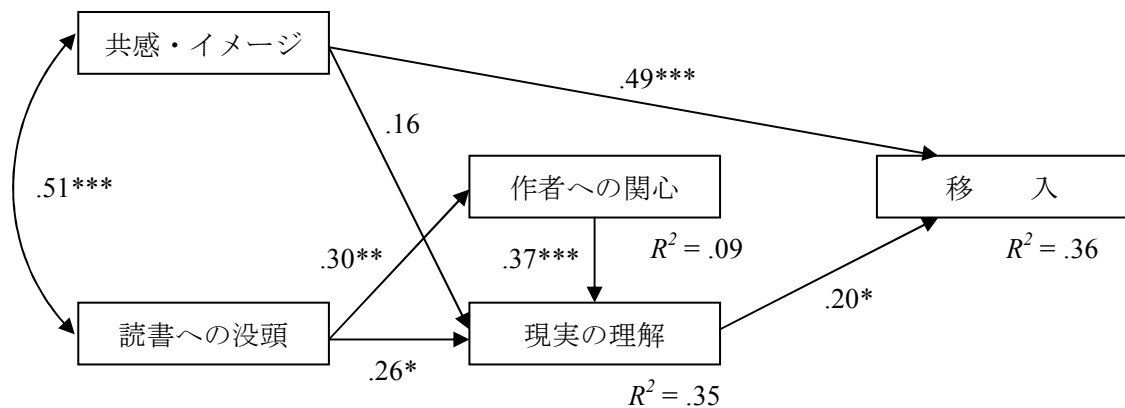
### 5-3-2 結果

**記述統計** LRQ-J の各下位尺度得点と、移入尺度 13 項目の合計得点を算出した。各得点の記述統計量を表 5-4 に示す。

**相関分析** LRQ-J 下位尺度間の相関と、移入尺度得点との相関をそれぞれ算出した（表 5-4）。まず LRQ-J の内部相関では、全ての下位尺度間で  $r = 0.2$  以上の相関となり、特に共感・イメージ尺度とそのほかの尺度との相関はおおむね高いものとなった。なかでも、共感・イメージ尺度と読書への没頭との相関は目立つものであり、この二つの概念がともに物語世界への没入としてまとまりうることを改めて示唆している。また作者への関心尺度と現実の理解尺度の相関も、それ以外の相関よりも高い値となった。一方で、ストーリー志向尺度と作者への関心、現実の理解の両尺度との相関は低いものとなった。

移入尺度と LRQ-J との相関では、共感・イメージと読書への没頭との相関係数が高い値となり、それ以外の尺度とも  $r = 0.3$  以上という相関がみられたが、作者への関心尺度との関連は弱いものとなった。

**構造方程式モデリングによる検討** LRQ の各下位尺度と移入尺度との関連をさらに詳しく検討するため、構造方程式モデリングによる分析を行った。ここで設定したモデルは、LRQ の共感・イメージと読書への没頭が作者への関心と現実の理解に影響し、また作者への関心が現実の理解に影響するという、研



注1 数値は標準化パス係数。N = 84。\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

注2 誤差変数は省略した。

図 5-1 LRQ-J 下位尺度得点と移入得点との関連

究3と研究4で検討したモデルを基盤とし、共感・イメージ尺度と現実の理解尺度が移入尺度に影響するというものであった。その結果、共感・イメージから作者への関心のパスを除外した図5-1のようなモデルが良好な適合度であると判断された ( $GFI = .986$ ,  $CFI = 1.000$ ,  $RMSEA = .000$ )。LRQの共感・イメージは移入尺度に強く関連するが、現実の理解も移入尺度と関連を持つことが示された。一方、作者への関心と読書への没頭の両尺度は移入への関連は見られなかった。

### 5-3-3 考察

本研究の目的は、物語読解時の移入状態が文学的体験傾向とどのように関連するかを明らかにすることであった。その結果、移入尺度によって測定した読解時の移入状態は、文学的体験傾向を反映するLRQ-Jの各得点と関連することが示され、構造方程式モデリングによる分析では、LRQの中でも特に共感・イメージ得点と現実の理解得点が移入状態に影響することが示唆された。このことから、本節の冒頭で述べた「読解時の移入状態は物語への没入傾向だけでなく自己洞察傾向の影響も受ける」という仮説は支持されたといえる。

相関分析の結果、移入尺度はLRQ-Jの全ての下位尺度との間で有意な正の相関を示した。特に、共感・イメージ尺度と読書への没頭尺度との相関は中程度

といえる値を示し、移入が物語への没入体験を反映する概念であるという 2-2-7 での指摘を改めて裏づける結果となった。Green & Dill (2012) は、移入体験に関連する特性として、その中核となるイメージ以外に登場人物への同一化、現実感の知覚、物語の出来事に自分が参加しているような感覚などを挙げている。とりわけ移入と同一化とが類似するという指摘は複数の実証的研究でも支持されており (Appel & Richter, 2010; Tal-Or & Cohen, 2010; Murphy et al., 2013)、本研究の結果はこうした成果に連なるものと考えられる。しかしながら、移入は文学的体験の全てと密接に関連するわけではない。今回の相関分析では、移入尺度は上記二つの下位尺度以外に現実の理解尺度とストーリー尺度とも関連することが示されたが、作者への関心との関連はそれらよりも弱いものとなった。このことは、移入が必ずしも作者という物語の背後にある存在や文体表現へ注目することとはつながるわけではないことを示している。本研究で用いた物語は実在する児童文学作品であり、この意味では、作者や文体への注目を比較的ひきやすい文章であったと思われるが、参加者が読解時にそうした側面に注目していたかどうかについては、オンラインの読者の体験を測れるような別の指標を用いて検討する必要がある。

一方で現実の理解尺度との関連では、移入尺度は LRQ の中で没入を測定する二つの尺度ほどではないにしても作者への関心尺度との間よりも高い相関を示した。このことは、移入体験が深い自己洞察傾向と関連することを示すものである。以上のような相関パターンは、研究 5 での結果とほぼ一致するものであり、文学的体験傾向と移入体験が密接な関連を持つことが示唆される。

相関分析の結果を踏まえ、構造方程式モデリングを用いたパス解析では、共感・イメージ尺度、読書への没頭尺度に加えて現実の理解尺度が移入得点と関連するというモデルを検討した。その結果、適合度が十分な値を示したモデルは、共感・イメージと現実の理解という文学的体験の二つの要素が移入と関連することを示すものであった。ここで、もし移入体験が物語への没入を反映するものであるならば、共感・イメージだけでなく読書への没頭との関連もモデルに含められてよいはずである。実際、相関分析の段階では、移入尺度と読書への没頭とは  $r = 0.44$  という値を示しており、中程度の関連が予測される。しかしながら、読書への没頭傾向から移入体験へのパスは有意とはならず、この

パスのあるモデルは適合度が低い値となった。この大きな理由として、共感・イメージと読書への没頭が強い共変関係にあったことが挙げられる。この二つの要素は、本論文の 2-2-7 ではそれぞれ個別なものとして捉えているが、両者は決して独立したものではなく、文学的体験の他の要素よりもはるかに関連性は高いと考えられる。このことが多重共線性のような効果を生み、両者からのパスを想定したモデルの適合度が低くなった可能性がある。

一方で今回の結果は、物語読解に伴う洞察傾向が移入体験に影響する可能性も示すものである。本節のはじめに述べたとおり、移入体験の効果とされる物語による態度変容と、文学的体験における自己洞察やその結果生じる自己変容体験とは、どちらも価値や態度の変容をとまなうものであり (Kuiken, Miall et al., 2004; Green & Brock, 2000), 概念的類似性が推測される。また移入尺度の下位尺度である「影響」因子は、物語を読んだことによる人生観や感情への影響を問うている。このように考えると、文学的体験を導く自己洞察は、移入における態度変容をも導く可能性が考えられる。さらにいえば、自己変容体験は一種の態度や信念の変容であって、両者は同じ体験として捉えることができるかもしれない。この仮説は、文学的体験を研究する文学領域と、移入を研究する社会心理学やコミュニケーション学、メディア論などをつなげる重要な枠組みとなりうる。

このような仮説を検討するためには、移入尺度の下位因子に注目することが有効となるかもしれない。移入尺度には「影響」「イメージ」「没入」という三つの下位尺度があることが研究 5 によって示されているが、これは Green & Brock (2000) が報告している 3 因子、感情、イメージ、認知にそれぞれ相当すると考えられる。5-2-3 でも述べたように、これまで移入尺度は 1 因子尺度として扱われてきたが、移入がどのように態度変容を導くのか、そのメカニズムを検討するためには、これらの下位尺度に注目することが重要となるだろう。このような検討は、社会心理学における説得研究に貢献するだけでなく、文学や認知心理学における物語理解の研究にも大きな貢献をするはずである。

本研究は、移入体験が物語への没入や自己洞察など文学的体験の主要な体験と関連することを改めて示したが、サンプルサイズがやや小さいことは考慮に入れておかなければならない。移入と文学的体験傾向との関連、さらには移入



体験の下位コンポーネントを含めた検討を行うには、さらに多くの参加者を対象に調査を行う必要があるだろう。

#### 第4節 まとめ

本章で行った研究は、2-3-5 で述べた本論文の研究目的のうち、第1の目的である物語への没入状態を測定する尺度の開発と、第4の目的である没入特性が実際の読みにおける没入に影響するかどうかの検討の二つを目指したものであった。研究5と研究6の結果を合わせて考えると、日本語版移入尺度は十分な信頼性と妥当性を持ち、移入状態の個人差を反映する尺度であること、そして、読解時の移入状態が、物語への没入だけでなく自己洞察という文学的体験傾向と関連していることが考えられる。しかしながら、調査という手法の限界として、本研究の結果から没入傾向が没入状態に影響するという結論を出すことはできない。両者の因果関係を検討するためには、物語読解時のオンラインでの体験を実験的手法で測定する必要がある。また本章で行った二つの研究は、いずれも単一の物語を用いており、物語課題の持つ特性が結果に影響を与えた可能性を排除することはできない。今後は別の物語を用いることで、移入に与えるジャンルの影響などを検討することが求められる。

いずれにせよ、本章で述べた二つの研究は、物語読解過程において没入が生じていることを十分に示すことができたと思われる。本章での成果は、物語読解における没入の読者に与える影響を検討する重要な基盤となると考える。さらに、読者とテキストとの相互作用 (Fish, 1980 小松訳 1992; Iser, 1976 轡田訳 1982) を心理学的見地から実証的に検討することにもつながる。

本論文の目的に立ち戻ったとき、次に問題となるのは、読者が体験する没入が読解過程そのものにどのような影響を与えているかという問題である。次章では、2-3-5 で提示した本論文の目的のうち最後のものであるこの課題について、物語理解過程における没入体験の影響を、実験的手法を用いて検討する。

## 第 6 章

---

### 没入体験が物語理解に及ぼす効果

## 第1節 読解過程への実験的アプローチ

研究1から研究6までは、物語世界への没入体験を測定する尺度の開発、それらを用いて測定した没入体験が読書習慣とどのように関連するか、そして没入体験を中心とした読解時の文学的体験とどのように関連するかについて、調査的手法によって検討してきた。しかしながら、こうした検討では物語読解過程における没入体験の役割を明らかにすることはできない。本章では2-3-5で述べた本論文の第5の研究目的であるこの問題に取り組むため、読解過程の中でも特に物語理解に注目し、没入体験が物語理解にどのように関与するのかを検討する。

没入体験が読解過程に及ぼす効果はあまり検討されていないが、2-2-4でも触れたように、近年は主人公の感情や読者の共感が読解に影響を与えていることが示されてきている。例えば米田他（2005）は、参加者に物語を読ませたあとで物語の各文の重要度と、読解時に生じた予感、共感、違和感の三つの感情評価をしてもらった。各文の記述内容について主人公、関係、背景の3種に分類したところ、主人公について記述した文では、再読時に共感が高まることが示された。またKomeda & Kusumi（2006）は、主人公の感情を操作した物語を用いて、感情次元が読解にどのように影響するかを検討している。その結果、主人公の感情変化が記述された文では読解時間が長くなることが示され、読者が主人公の感情変化をモニターしながら読んでいることが示された。また、読解時の教示を操作して共感しながら読むように促すと、出来事の因果関係の変化の検出が高まることも示されている。これらの結果は、読解時に読者が感じる共感が読解に影響を与える可能性を示唆している。物語への共感については、読者と主人公の類似性が高いほど読解時間が短くなることや、主人公への共感が高まることが報告されており（Komeda et al., 2009; Komeda et al., 2013）、登場人物への共感、読解においてこれまで考えられていた以上に重要な役割を果たしていることが推測される。2-2-7でみたように、登場人物への共感は物語への没入の中心的な構成要素である。物語に没入することは現実世界のように物語を生き生きと体験することであるため、物語への没入は物語理解を促し、読解時に体験する感情も物語内容に沿ったものになると考えられる。研究7と研

究 8 では、米田他（2005）の枠組みに従い、物語の示す記述内容に没入体験の影響がどのように表れるかを検討する。

物語理解過程を測定する指標として、多くの研究では読解時間（reading time）が用いられている。ここでいう読解時間は、文章の一定の区切り（文単位、節単位など）を読むのに要した時間のことを指し、文章処理の指標として広く用いられている（e.g., Just & Carpenter, 1992）。状況モデルに準拠した研究では、一般に理解にかかる負荷が大きいほど読解時間が長くなり、小さいほど読解時間が短くなるとされており（Zwaan, 1999b; Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan, Magliano et al., 1995）、物語理解の促進は読解時間の短縮によって反映されると考えられる。そこで本章で行う実験ではこの読解時間を物語理解の指標とする。

なお、本研究では読解時間の分析に重回帰分析を用いる。この手法はイベントインデックスモデルの研究で多く用いられている手法であり（Komeda & Kusumi, 2006; Zwaan, Magliano et al., 1995）、物語を構成する各文に与えた属性値を独立変数、読解時間を従属変数として重回帰分析を行うものである。これによって、読解時間に影響する言語的要因（モーラ数など）や文の記述内容の要因（時間や空間など状況次元の断絶の有無など）を検討することができる。本章で行う二つの研究では米田他（2005）にならい、背景、主人公の行為、主人公の感情という、記述内容の三つの側面について扱う。このため、イベントインデックスの諸次元を厳密には想定してはいないが、この手法を援用することで、読解時間に影響する文章の要因と参加者の個人特性の要因を分析することが可能となる。

本章で行う実験の仮説は以下のとおりである。まず第 1 の仮説は「没入傾向の高い参加者は物語理解が促進され、読解時間が短くなる」というものである。次に第 2 の仮説は「没入傾向の高い参加者は物語の展開に応じた感情をより多く喚起する」というものである。

## 第 2 節 没入体験傾向が物語読解過程に及ぼす効果に関する実験的検討（研究 7）

研究 7 では、仮説 1 および 2 を検討するため、物語課題を用いて実験を行う。

従属変数として、読解時間と読後の感情評定を用いる。

#### 6-2-1 方法

**実験参加者** 大学生および大学院生 32 名（男性 13 名、女性 19 名、平均年齢 23.9 歳）が実験に参加した。

**物語課題** 課題となる物語は、Komeda & Kusumi (2006) の物語のうち、「引越し」と「駆け落ち」の 2 編について、主人公の感情価が「安心 - 安心」（安心条件）「不安 - 不安」（不安条件）の 2 種、合計 4 編の物語を用いた。また本実験前の試行課題には同じく Komeda & Kusumi (2006) の「試験」のうち「不安 - 安心」物語を用いた。各物語は 24 文で構成されている（物語課題例は付録 J を参照のこと）。本実験で用いる物語は、内容 2 種の提示順序および感情価 2 種についてカウンターバランスを行い、各参加者は内容 2 種を両方提示され、かつ 1 編は安心条件、もう 1 編は不安条件となるようにした。

**材料** 物語課題はコンピュータ画面上に、一文ずつ表示された画像で提示された。刺激画像はビットマップファイル形式とし、Microsoft のペイントで作成した。作成時における画像の大きさは 800×600 ピクセルとし、背景色は文字の読みやすさを考慮して淡いグレー（#f5f5f0）に設定した。文の表示が画面中央になるよう、画面左上より右方 100 ピクセル、下方 275 ピクセルのポイントを左上頂点とする 600×50 ピクセルの領域内を文の提示領域とした。文は横書き表示とし、文字のフォントは 17 ポイント明朝体、文字色は黒を用いた。文は最大で 3 行に分けて提示された。実験時にはこの画像をフルスクリーンに拡大して提示した。刺激の提示および反応の記録は、Hewlett-Packard 社製ノート型パーソナルコンピュータ Compaq nx9040 上の SuperLab Pro ver. 2.0 によって行った。

**測定尺度** まず、読解の評定に関する尺度（付録 K）を用いた。これは、各物語に対する主観的評価と読解中の体験や関与のスタイルなどについて尋ねるものである。各項目は Komeda & Kusumi (2006) の物語評価尺度などを参考に 7 項目を作成した。各項目は (a) この物語のテーマに興味を持った、(b) この物語は読みやすかった、(c) この物語の出来事は自分の体験と似ていると感じた、(d) 物語に入り込むことができた、(e) 主人公の立場に立つように感じた、(f) 冷静な立場から物語を読んでいた、(g) 自分の立場に置き換えて考えなが

ら読んだ、というものである。このうち (a) (b) の 2 項目は物語課題への評価項目、残りの 5 項目は物語課題への没入を問う項目を用いた。いずれの項目も評価は「1：当てはまらない」から「5：当てはまる」までの 5 段階とした。次に、感情喚起尺度（付録 L）を用いた。物語の読解中にどのような感情がどのくらい喚起されたかを問う尺度である。感情項目は宮崎・本山・菱谷（2003）の感情語のなかから、読解によって生じるとみられるもののうち、感情を明確に記述した形容詞を選定した。その際、宮崎他（2003）による快 - 不快次元の基準値を元に、肯定語から 7 語、中性語から 6 語、否定語から 7 語をそれぞれ抽出し、それに物語の条件を示す「安心した」と「不安な」を加えた 22 語を尺度とした。評価は「強く感じた」から「まったく感じなかった」までの 7 段階とした。第 3 に、物語への没入傾向を測定するため、LRQ-J の中の共感・イメージ尺度 9 項目を用いた（付録 A）。

**手続き** 参加者はまず実験の大まかな流れと物語課題についての教示を受けた。その後、コンピュータの前に座ってもらい、画面に表示される物語 2 編を読んだ。その際の読み方については「普段小説を読むときのように普通に読んでください」と教示した。物語は 1 編ずつ個々に提示された。物語を読む手順として、参加者は画面に 1 文ずつ表示される文章を読み、1 文が読み終わったときにスペースキーを押して次の文に進むという方法をとった。この間、参加者の読解時間を 1 文ごとに記録した。これは、読解時間を測定する一般的な方法である（Komeda & Kusumi, 2006; Zwaan, Magliano et al., 1995）。

以上のような操作に慣れてもらうため、教示後にまず練習試行を行った。次に本試行として、まず一つ目の物語を読んでもらい、読み終わったところで物語についての評価の尺度と感情喚起尺度に記入してもらった。次いで二つ目の物語を読んでもらい、同じ質問紙に記入を求めた。さらに、LRQ-J の共感・イメージ尺度に回答してもらった。そして、すべての実験手続きが終わったところで内省を記録した。実験の所要時間はおよそ 45 分であった。

## 6-2-2 結果

**文の分類** 分析に先立ち、2 編の物語の計 72 文について、記述内容に基づいて (a) 背景記述文、(b) 行為記述文、(c) 感情記述文の 3 種への分類を行った。

表 6-1 条件ごとの物語評定得点と LRQ-J 共感・イメージ得点

		<i>Mean</i>	<i>Median</i>	<i>SD</i>
不安条件	評価	3.84	4.00	.78
	没入	2.90	2.80	.62
安心条件	評価	3.73	4.00	.92
	没入	2.73	2.60	.50
LRQ-J	共感・イメージ	2.93	2.94	.92

分類の基準はそれぞれ (a)「文の内容が主に物語の背景や情景について描写していると思われる」こと、(b)は「主に主人公の行動や行為を記述していると思われる」こと、そして (c)は「主に主人公の感情について記述していると思われる」こととした。この分類法は Miall (1989) および米田他 (2005) にならったものである。分類は、実験参加者でない大学院生 3 名に個別に評定を依頼し、2 名以上の一致があった結果を採用した。その結果、背景記述文が 19 文、行為記述文が 24 文、感情記述文が 29 文となった。なお 3 名の評定の完全一致率は、背景が 63.2%、行為が 50.0%、感情が 86.2%であり、3 名の間で分類の一致しなかった文は見られなかった。

**各尺度の記述統計** 読解の評定尺度について、評価と没入それぞれの得点を算出した。また同時に、LRQ-J の共感・イメージ下位尺度の得点を算出した。その結果を表 6-1 に示す。

**各尺度の相関分析** 読解時の没入体験と物語への没入傾向の関連を検討するため、物語評定尺度の没入項目の平均得点と LRQ-J 共感・イメージ尺度との相関を算出したところ、不安条件では  $r = 0.34$  となったのに対し、安心条件では  $r = 0.03$  となり、主人公の感情が安心の物語では両者の関連はみられなかった。

**文の各指標の算出** 各文についてモーラ数、物語における系列位置を算出し、また物語の種類について「引越し」に 0、「駆け落ち」に 1 を、また物語の条件について不安条件に 0、安心条件に 1 というダミー変数を付与した。さらに各記述文の分類についても当てはまれば 1 を、そうでなければ 0 というダミー値を付与し、これらについて相関係数を算出した。この相関係数は、この後述べる読解時間の分析において重回帰分析を用いることから、多重共線性の有無を

表 6-2 文の各指標と共感・イメージ得点との相関

	1	2	3	4	5	6
1 読解時間	—					
文の属性						
2 モーラ数	.33***	—				
3 系列位置	.11***	.20***	—			
4 物語の条件	.04**	-.01	.00	—		
記述内容						
5 背景記述文	.09***	-.03	.25***	.00	—	
6 感情記述文	.08**	.22***	-.05*	-.02	-.44***	—
個人特性						
7 没入得点	-.03	.00	.00	.00	.00	-.01

注：N = 32, \* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$ 。

表 6-3 読解時間の重回帰分析結果

	モデル 1 ( $\beta$ )	モデル 2 ( $\beta$ )
モーラ数	.37***	.37***
系列位置	-.17***	-.17***
物語の条件	-.05 <sup>+</sup>	-.05 <sup>+</sup>
背景記述文	-.05 <sup>+</sup>	-.05 <sup>+</sup>
感情記述文	-.04	-.04
没入得点	—	-.04
没入×背景	—	.02
没入×感情	—	.04
$R^2$	.14***	.15***
$\Delta R^2$	—	.00

注：<sup>+</sup> :  $p < .10$ , \*\*\* :  $p < .001$ 。N = 32



判断することを目的として算出された。結果を表 6-2 に示す。

**読解時間と没入得点の相関分析** 各条件の三つの記述文ごとの平均読解時間と没入傾向との関連を検討するため相関係数を算出した。その結果、いずれの間でも  $r < |.20|$  となり、有意とはならなかった。

**読解時間に対する文の属性の効果** 文の言語的属性、記述内容の属性が読解時間を予測するかどうかを検討するため、状況モデルに基づいた検討 (Zwaan, Magliano et al., 1995) に従って、参加者ごとと項目ごとという二つの重回帰分析を行った (cf. Lorch & Myers, 1990)。参加者分析では、参加者ごとに重回帰分析を行い、全参加者の  $\beta$  値の平均と 0 との差を検討した ( $t_1$ )。項目分析では全参加者の読解時間の重回帰分析を行い、 $\beta$  値の有意性を検討した ( $t_2$ )。独立変数として、文の属性であるモーラ数、物語内の系列位置、および条件を、文の記述内容の属性として背景記述文の有無、感情記述文の有無を指定した。なお行為記述文は、他の二つの記述文との相関が高くなってしまうため、感情記述文がこれと同じく登場人物を描写していると判断して除外した。この結果、文のモーラ数 ( $t_1 (31) = 19.22, p < .001, t_2 = 14.92, p < .001$ )、系列位置 ( $t_1 (31) = 5.48, p < .001, t_2 = 6.77, p < .001$ ) が有意となった。また背景記述文の効果は参加者分析で有意となったが項目分析では有意とはならなかった ( $t_1 (31) = 2.28, p < .05, t_2 = 1.76, p < .08$ )。各指標の効果を表 6-3 に示す。

**読解時間に対する没入傾向の効果** 次に参加者の共感・イメージ得点の影響を検討するため、参加者、項目それぞれで検討した。参加者分析では上記の  $\beta$  値を共感・イメージ得点の高群と低群とで  $t$  検定を行い、項目分析では上記のモデルに共感・イメージ得点と背景、感情の各記述文との交互作用項を新たに独立変数として追加し階層的重回帰分析を行った。この結果、いずれの変数の効果も有意とはならなかった。階層的重回帰分析の結果を表 6-3 に示す。

**感情喚起尺度の因子分析** 感情喚起尺度の構造を確認するため、不安条件、安心条件のデータを併せて 22 項目について主因子法、varimax 回転による因子分析を行った。スクリープロットを参考に 2 因子解と 3 因子解を比較した結果、解釈可能性の観点から 3 因子を抽出した。その結果を表 6-4 に示す。第 1 因子には主に宮崎他 (2003) の否定語と「不安な」の 10 項目が収束しネガティブ因子とした。第 2 因子は同じく肯定語を主とした 7 項目が集まったことからポジ

表 6-4 感情喚起尺度の因子分析結果

(値は院試負荷量)

質問番号・項目	F1	F2	F3
3 ゆううつな	<b>.793</b>	-.172	-.023
5 むなしい	<b>.754</b>	-.090	-.169
1 苦しい	<b>.749</b>	-.148	.190
10 悔しい	<b>.749</b>	.208	-.232
6 哀れな	<b>.722</b>	-.062	-.006
7 寂しい	<b>.720</b>	-.171	.310
2 不愉快な	<b>.673</b>	.001	-.360
4 恐ろしい	<b>.651</b>	.017	.072
8 いらいらした	<b>.572</b>	.154	-.566
9 不安な	<b>.549</b>	.015	.332
16 気楽な	-.258	.257	-.051
21 うれしい	-.187	<b>.880</b>	.179
19 こころよい	-.186	<b>.814</b>	.164
15 安心した	-.212	<b>.779</b>	.074
17 ほこらしい	.089	<b>.749</b>	.230
11 羨ましい	.014	<b>.629</b>	.112
12 気安い	-.002	<b>.569</b>	.025
18 恋しい	.081	<b>.533</b>	.360
22 面白い	-.041	.476	<b>.663</b>
14 どきどきした	.028	.387	<b>.595</b>
20 懐かしい	.037	.169	<b>.565</b>
13 照れくさい	.096	.476	<b>.494</b>
固有値	5.07	4.46	2.40
寄与率 (%)	23.05	20.30	10.91

表 6-5 各条件の感情喚起得点と没入傾向との相関

	不安条件			安心条件		
	N	P	M	N	P	M
共感・イメージ	.17	.27	.17	.22	.04	.38*

注：N=32, N：ネガティブ，P：ポジティブ，M：モチベーション。\*： $p < .05$

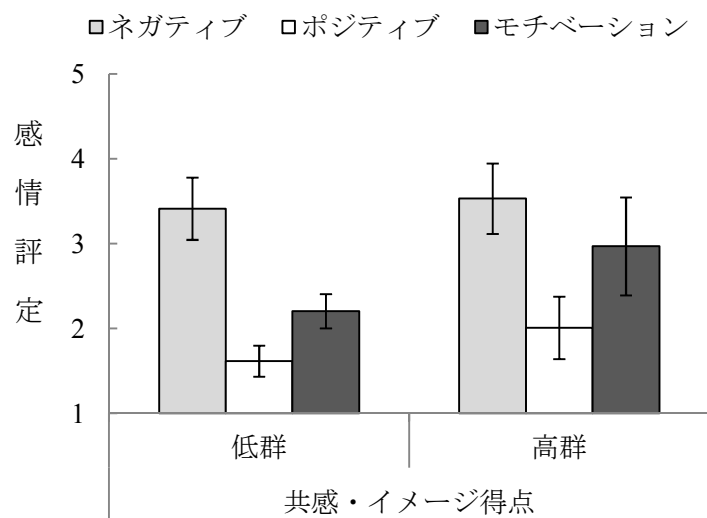


図 6-1 不安条件における感情評価（エラーバーは SE を示す）

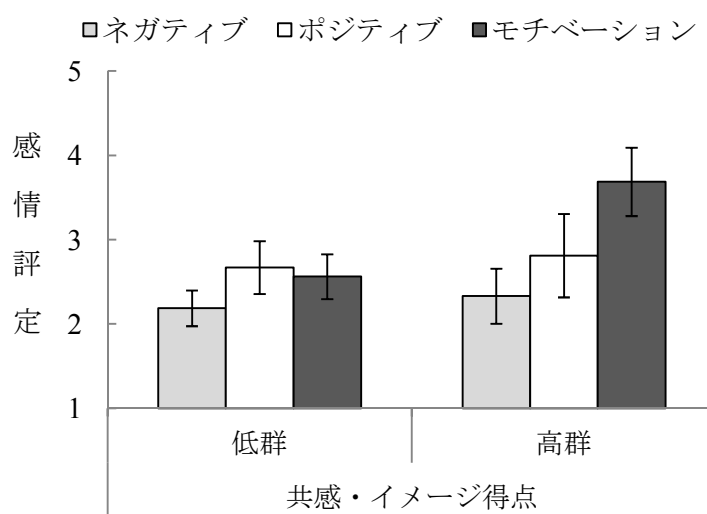


図 6-2 安心条件における感情評価（エラーバーは SE を示す）

タイプ因子とした。第3因子は懐かしい、面白いといった読みそのものへの評価的感情4項目がみられ、読みの動機づけにかかわると判断しモチベーション因子とした。なお「気楽な」はどの因子とも高い負荷量を示さなかったことから今回の分析から除外することとした。これに基づき、各因子の項目平均得点を算出した。

**感情喚起得点の相関分析** 各条件のポジティブ、ネガティブ、モチベーションの得点と共感・イメージ得点との関連を検討するため相関係数を算出した。その結果、安心条件のモチベーション得点との相関が有意となり、それ以外の変数間では有意とはならなかったが、全体として共感・イメージ得点が高いほど感情得点も高くなるパターンがみられた（表 6-5）。

**感情喚起得点の分散分析** 不安条件、安心条件それぞれについて、感情価（ポジティブ、ネガティブ、モチベーション：参加者内要因）と没入傾向（高群、低群：参加者間要因）の2要因混合計画による分散分析を行った。その結果、不安条件では感情価の主効果が有意となり（ $F(2, 60) = 19.46, p < .001, \eta_p^2 = .39$ ）、多重比較の結果、ネガティブ感情が最も評定が高く、ポジティブ感情が最も低いということが示された（ $ps < .05$ ）。しかしながら没入傾向の主効果（ $F(2, 60) = 0.74, p > .40, \eta_p^2 = .02$ ）と交互作用（ $F(1, 30) = 2.15, p > .10, \eta_p^2 = .07$ ）は有意とはならなかった（図 6-1）。一方、安心条件では感情価の主効果（ $F(2, 60) = 6.78, p < .01, \eta_p^2 = .18$ ）が有意、交互作用が有意傾向（ $F(2, 60) = 2.90, p < .07, \eta_p^2 = .08$ ）を示した。単純主効果の検定の結果、共感・イメージ得点の高群は低群よりもモチベーション得点が高く（ $p < .01$ ）、共感・イメージ得点高群での多重比較の結果、モチベーション得点がポジティブ（ $p < .05$ ）、ネガティブ（ $p < .01$ ）両得点よりも高いことが示された（図 6-2）。なお、共感・イメージ得点の主効果は有意とはならなかった（ $F(1, 30) = 2.78, p > .10, \eta_p^2 = .09$ ）。

### 6-2-3 考察

本研究では、物語読解過程における没入の役割を明らかにするために物語読解課題を行い、読解時間と読後の感情評定を従属変数とした分析を行った。その結果、読解時間に没入傾向の効果は見出されず、仮説1は支持されなかった。一方、感情評定では、主人公が安心した感情を体験する安心条件の物語におい

て、没入傾向の高群が特徴的な評定パターンを示した。具体的には、没入傾向の高い参加者は、安心条件の読解中に読みの動機づけを多く体験していたことが示された。この結果は仮説2を直接支持するものではないが、いくつか考察に値する情報を含んでいる。

読解時間の分析では、没入傾向の効果はみられなかった。このことは、物語の各要素の理解に没入傾向が影響するとはいえないことを示唆している。これについては二つの説明が考えられる。一つは、物語への没入が実際の読解プロセスには直接的には影響していないという可能性である。これが正しいとするならば、物語読解は、文学的体験の中核にあると考えられる没入体験によって内容理解が導かれることで進むという単純な構造をなしてはいないということになる。米田他（2005）は共感が読解の事後に体験されるものだという捉え方をしているが、物語への没入体験においても、その喚起は読解の結果として生じるものであり、その程度が個人差として現れると捉えたほうが適切かもしれない。もう一つの可能性は、参加者の読み方による影響の可能性である。今回の実験では、安心条件と不安条件とでは、読解後の評定での没入得点と LRQ-J の共感・イメージ得点との相関パターンは異なる結果となった。すなわち、不安条件では共感・イメージ得点が高いほど物語課題に没入する傾向が見られたのに対し、安心条件ではそうした傾向はみられなかった。このことは、読者の没入体験が主人公の感情状態による影響を受けた可能性を示している。しかしこの点を加味したとしても、不安条件、安心条件に関わらず没入の読解時間に対する効果が見られなかったことへの説明は難しい。むしろ、どちらの条件を読んだかに関係なく、読者の物語に対する構えが影響していた可能性を考慮すべきであろう。Komeda & Kusumi（2006）は、読解前に没入するように教示した場合としなかった場合とでは、状況モデルの各次元の検出パターンが異なっていたことを報告している。このことから考えると、教示によって参加者の読解への構えを操作することで、没入傾向が読解に与える効果を検出することができるかもしれない。

ただ、読解時間への没入傾向への影響をみると、高群より低群のほうが読解時間は長くなるような傾向が見て取れる。すなわち、イメージ得点の影響は負の値を示しており、 $B = -7.47$  となっていた。これは、共感・イメージ得点

が1点高くなるごとに7.47ミリ秒だけ読解時間が短くなるという関係ということになる。このようなパターンは、第1節で述べた「物語への没入が物語理解を促す」という仮説に整合的であるように思われる。すなわち、没入傾向の高い読者は低い読者よりも、物語の情景を生き生きとイメージし、知覚的な要素を多く含む状況モデル (Zwaan, 1999b, 2004) を構築することが促されたために、その分だけ処理負荷が減り、読解時間が短くなったと考えられる。しかしながらこれらは推測の域を出ず、本研究の結果からこうした可能性の当否に結論を出すことはできない。物語への没入体験と読解時間との関連はさらに検討が必要である。さらにいえば、主人公の理解には参加者の性格との類似性が関係しているということも考えられるため (Komeda et al., 2009; 米田・楠見, 2007), そうした観点からの検証も必要であろう。

感情評定の分散分析では、まず不安条件と安心条件という、主人公の感情の操作が、分散分析において感情価の主効果として現れた。すなわち、不安条件では参加者はネガティブ感情を多く体験したのに対し、安心条件では読みへの動機づけが高まったという結果となった。このことは、物語課題による主人公の感情操作が読者の感情に影響したことを示しており、参加者が主人公に対して、ある程度の共感を体験していた可能性が考えられる。しかしながら、この感情喚起得点と没入傾向との関連がみられたのは安心条件のみであり、不安条件ではみられなかった。このことは、没入傾向の高い参加者は安心条件で低群よりも高い動機づけを示したのに対し、不安条件ではいずれの感情価にも効果はみられなかった。まず安心条件で効果が見られたことについては、Nell (1988) のいう「楽しむための読み」という概念から説明することができる。Nell によれば、一般に読者は物語を楽しむために読むことが多く、読みによる楽しみは本を読むことによる没頭や作品世界への没入と深く関連している。実際、物語への没入は読後の楽しみや満足感に正の影響を与えることが示唆されている (Green, 2004; Green et al., 2004; Tal-Or & Cohen, 2010)。安心条件における結果はこうした知見とも整合的であるといえる。一方、不安条件ではこうした効果はみられなかった。このような結果となった理由は、一つには不安条件の物語が不安を強く喚起するものであり、そうしたネガティブな感情生起は没入傾向が低い読者でも容易に感じられたという可能性である。もう一つ考えられる理

由としては、主人公が不安を体験する物語は楽しみや動機づけを相対的に生じにくいという可能性がある。すなわち、没入の度合いが高かったとしても物語から受ける感情は比較的ネガティブなものであり、それらは読みによる楽しさにはつながらなかったかもしれない。Miall & Kuiken (2002) は、文学的体験の効果の一つにカタルシスを挙げているが、こうした効果は読みによる満足感や Miall らのいう評価感情と関連している可能性があり、今回の不安条件の物語はこうしたカタルシスを体験しにくいものであったと考えられる。しかしながら、不安条件での交互作用の効果量は、安心条件の効果量と大きな差異は見られず、得点のパターンも不安条件と安心条件は同じような傾向が見て取れる。このことは、感情喚起に及ぼす没入傾向の効果が、不安条件の強いネガティブ感情の喚起特性によって打ち消されたことを示唆しているかもしれない。

本研究の結果をまとめると、物語への没入傾向は、読解中よりも読後に強く影響するということができる。このことは、没入の持つ文学的体験の効果 (Kuiken, Phillips et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002; Oatley, 1999a, 1999b) や態度変容の効果 (Green & Brock, 2000; Green & Dill, 2012; van Laer et al., in press) が、主に読後に現れることと整合的なものである。しかしながら、没入体験の要素である共感を読解そのものに影響を与えているという知見があり (Komeda et al., 2009; Komeda & Kusumi, 2006)、これについてはさらに検討する必要があるだろう。

### 第 3 節 没入教示が物語読解過程に及ぼす効果に関する実験的検討 (研究 8)

6-2-3 で述べたように、物語への共感が読解に与える効果は、読解時の参加者の構えによって左右される可能性がある。そこで研究 8 では、物語課題前の教示によって没入を促すよう操作し、読者が物語の世界に入り込もうとするときに没入傾向がどのように影響するかを検討する。

#### 6-3-1 方法

**実験参加者** 大学生および大学院生 38 名 (女性 18 名, 男性 20 名, 平均年齢

表 6-6 条件ごとの物語評定得点と LRQ-J 共感・イメージ得点

		<i>Mean</i>	<i>Median</i>	<i>SD</i>
不安条件	評価	4.21	4.50	.65
	没入	3.01	3.00	.79
安心条件	評価	4.05	4.50	.86
	没入	2.88	3.00	.80
LRQ-J	共感・イメージ	3.21	3.06	.84

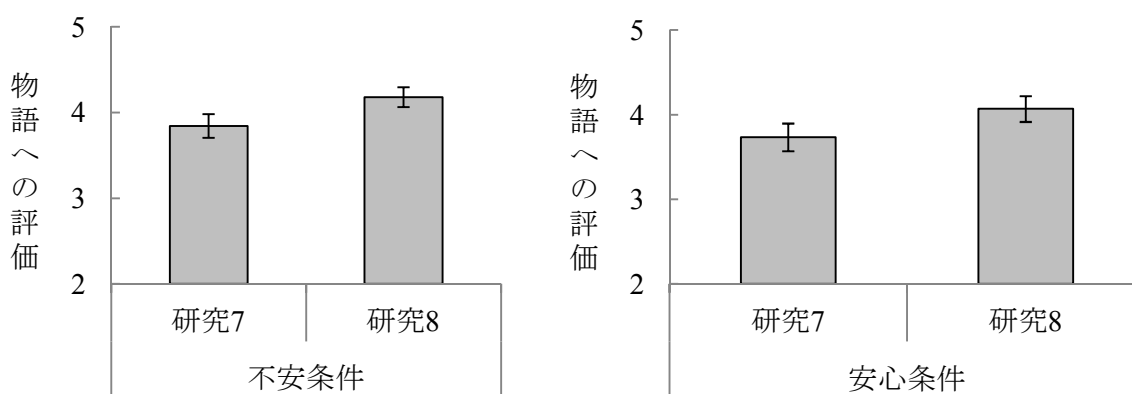


図 6-3 研究 7 と研究 8 での物語評価得点の比較（エラーバーは *SE* を示す）

20.7 歳）が実験に参加した。なお、いずれの参加者も研究 7 の実験には参加していない。

**物語課題および測定尺度** 研究 7 と同様であった。

**材料** 研究 7 とほぼ同様であった。ただし、課題呈示は Epson 社製デスクトップパーソナルコンピュータ Endeavor MR4000 上の SuperLab ver. 2.0 で行った。

**手続き** 研究 7 とほぼ同様であったが、物語読解前に行う教示の部分のみ変更された。具体的には、研究 7 で行った教示の代わりに「あなたが物語の中に実際にいて出来事を本当に見たり聞いたりしているように、また、主人公となって物語のなかを体験しているような感じになるように」読むように教示した。実験の所要時間はおよそ 45 分であった。



表 6-7 物語課題の各指標間の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1 読解時間	—					
文の属性						
2 モーラ数	.31***	—				
3 系列位置	-.09***	.21***	—			
4 物語の条件	.00	.00	.00	—		
記述内容						
5 背景記述文	-.02	-.04*	.25***	.00	—	
6 感情記述文	-.01	.20***	-.05*	-.02	-.45***	—
個人特性						
7 共感イメージ	-.16	.00	.00	.00	.00	.00

注：N = 38, \* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

### 6-3-2 結果

**各尺度の記述統計** 読解の評定尺度について、評価と没入それぞれの得点を算出した。また同時に、LRQ-Jの共感・イメージ下位尺度の得点を算出した。その結果を表 6-6 に示す。

**没入教示の操作チェック** 没入教示の効果を検討するため、課題への評定尺度の二つの得点を研究 7 の結果と比較した。その結果、物語への評価得点は不安条件では有意傾向 ( $t(66) = 1.93, p < .06, g = .47$ )、安心条件では有意とはならなかったが ( $t(66) = 1.54, p > .10, g = .38$ )、いずれも小さな効果量がみられ、研究 7 よりも本研究の方が評価は高い傾向となった (図 6-3)。また没入得点ではいずれの条件でも有意とはならなかった (不安条件 :  $t(66) = .63, g = .15$ , 安心条件 :  $t(66) = 1.07, g = .26$ )。

**各尺度の相関分析** 読解時の没入体験と物語への没入傾向の関連を検討するため、物語評定尺度の没入項目の平均得点と LRQ-J 共感・イメージ尺度との相関を算出したところ、不安条件では  $r = 0.17$  となったのに対し、安心条件では  $r = 0.32$  となり、主人公の感情が不安の物語では両者の関連はみられなかった。

**各文の指標間の関連** 研究 7 と同様、各文の属性と記述内容の変数の内部相

表 6-8 読解時間の重回帰分析結果

	モデル 1 ( $\beta$ )	モデル 2 ( $\beta$ )
モーラ数	.37***	.37***
系列位置	-.17***	-.17***
物語の条件	.00	.00
背景記述文	-.01	-.01
感情記述文	-.10***	-.10***
没入得点	—	-.16***
没入×背景	—	-.01
没入×感情	—	-.02
$R^2$	.13***	.16***
$\Delta R^2$	—	.03***

\*\*\* :  $p < .001$   $N = 38$

関を算出した。その結果を表 6-7 に示す。

**読解時間に対する文の属性の効果** 研究 7 と同様、各文の属性と記述内容の変数を独立変数、読解時間を従属変数として参加者ごと ( $t_1$ ) と項目ごと ( $t_2$ ) に重回帰分析を行った。その結果、モーラ数 ( $t_1 (37) = 19.34, p < .001, t_2 = 14.20, p < .001$ ), 系列位置 ( $t_1 (37) = 5.68, p < .001, t_2 = 7.61, p < .001$ ), 感情記述文 ( $t_1 (37) = 2.04, p < .05, t_2 = 4.18, p < .001$ ) の効果がそれぞれ有意となった (表 6-8)。

**読解時間に対する没入傾向の効果** 参加者の共感・イメージ得点の影響を、研究 7 と同様の手順で参加者、項目それぞれで検討した。その結果、項目分析での上記モデルに共感・イメージ得点、背景、感情の各記述文と共感・イメージ得点との交互作用項を投入した階層的重回帰分析において、共感・イメージ得点の効果が有意となり、共感・イメージ得点が 1 点高くなるごとに読解時間は 307.80 ミリ秒ずつ短くなることが示された (表 6-7)。一方、参加者分析による  $t$  検定では各  $\beta$  値に有意差はみられなかった。

**感情喚起得点の相関分析** 各条件のポジティブ、ネガティブ、モチベーションの得点と共感・イメージ得点との関連を検討するため相関係数を算出した。その結果、不安条件ではいずれの得点も共感・イメージ得点との間に有意な相

表 6-9 各条件の感情喚起得点と没入傾向との相関

	不安条件			安心条件		
	N	P	M	N	P	M
共感・イメージ	.07	-.08	-.21	-.31 <sup>+</sup>	.48**	.32*

注：<sup>+</sup>： $p < .10$ , \*： $p < .05$ , \*\*： $p < .01$   $N = 38$

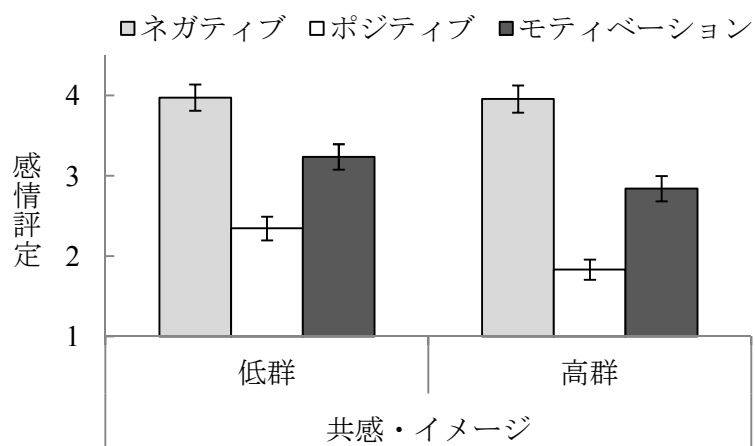


図 6-4 不安条件の感情評定（エラーバーは  $SE$  を示す）

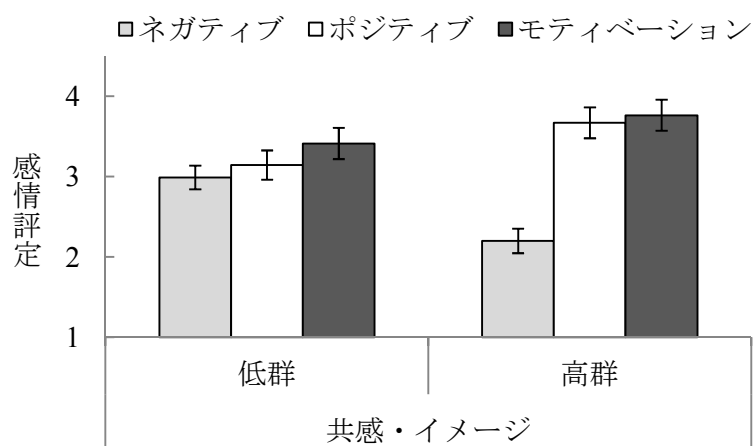


図 6-5 安心条件の感情評定（エラーバーは  $SE$  を示す）

関は見られなかったが、安心条件ではポジティブ得点、モチベーション得点との間に正の相関がみられた。このことから、共感やイメージを体験しているほどこれらの感情を多く体験していることが示された（表 6-9）。

**感情喚起得点の分散分析** 感情喚起尺度について、安心条件で欠損のあった参加者のデータを除外した。このため不安条件では 38 名、安心条件では 36 名のデータを分析の対象とした。研究 7 での結果に従い、ネガティブ、ポジティブ、モチベーションそれぞれの感情喚起得点を算出した。これについて、感情価（ポジティブ、ネガティブ、モチベーション：参加者内要因）と没入傾向（高群、低群：参加者間要因）の 2 要因混合計画による分散分析を不安条件、安心条件それぞれで行った。その結果、不安条件では感情価の主効果 ( $F(2, 72) = 47.14, p < .001, \eta_p^2 = .57$ ) が有意となり、多重比較の結果、ネガティブ感情はポジティブ、モチベーション感情よりもそれぞれ高く、またポジティブ感情はモチベーション感情よりも高いことが示された（いずれも  $ps < .001$ ）。しかし没入傾向の主効果 ( $F(1, 36) = 2.32, p > .10, \eta_p^2 = .06$ )、および交互作用 ( $F(2, 72) = .90, p > .40, \eta_p^2 = .02$ ) は有意とはならなかった（図 6-4）。一方安心条件では交互作用が有意となり ( $F(2, 68) = 5.17, p < .01, \eta_p^2 = .13$ )、単純主効果の検定の結果、ネガティブ感情は没入傾向高群で低群よりも低くなり ( $p < .05$ )、また没入傾向高群ではネガティブ感情得点はポジティブ感情 ( $p < .01$ )、モチベーション感情 ( $p < .001$ ) よりも低いことが示された（図 6-5）。

### 6-3-3 考察

本研究は、読解時に与える没入指示によって、物語読解に対する物語への没入体験の効果がみられるようになるかを検討するものであった。その結果、LRQ-J の共感・イメージ得点は読解時間を有意に予測し、感情評定では安心条件において共感・イメージ得点の効果がみられた。この結果、本章第 1 節で挙げた仮説 1 は支持され、また仮説 2 は一部ではあるが支持されたといえる。

没入指示の効果を検討するために行った物語評定尺度得点の比較では、評価得点が研究 7 での結果よりもやや高い傾向にあることが示された。これは、没入指示によって物語への興味や主観的な読みやすさが増したことを示している。物語の世界をイメージしたり登場人物に共感したりすることは、それぞれ物語

への関与の度合いを高めることにつながり、それらはしばしば読後の楽しみや満足感につながるが (Green, 2004; Green et al., 2004; Nell, 1988; Tal-Or & Cohen, 2010), そうした感覚や体験が読解への評価に影響を与えたと考えられる。しかしながら、没入得点に教示の効果はみられなかった、没入という現象は本来、自発的な楽しみによって生じると考えられるため (Csikszentmihalyi, 1990; Nell, 1998; Oatley, 2011), 教示による没入の誘導には限界があったと考えられる。

読解時間の重回帰分析では、没入傾向は読解時間を有意に予測し、またこの変数の投入によって  $R^2$  は有意に上昇した。研究 7 でも、有意とはならなかったが読解時間は没入傾向が高いほど短くなるようなパターンを示していた。物語理解過程で構築される状況モデルは知覚的な要素を含むものだという指摘がなされているが (Fisher & Zwaan, 2008; 常深・楠見, 2009; Zwaan, 1999a, 2004), 物語への没入によって知覚的な状況モデルがさらに詳細に構築される可能性が考えられ、本研究の結果はこの可能性に一つの傍証を与えたといえる。さらにこの結果は、登場人物への共感が物語理解を促すという報告とも整合的である (Komeda, et al., 2009; Komeda & Kusumi, 2006)。もちろん、本研究では実際に物語に没入したことが読解に直接的な影響を与えたかどうかをみてはおらず、また参加者の課題への没入体験を細かく測定しているわけでもない。このため、参加者がどのように物語を読み、また 2-2-7 で整理したような没入のどの側面を主に体験していたかは明らかではない。今後は、読解過程において没入のどの側面がどのように関与しているかを細かく検討することが必要である。

しかしながら、没入体験が読解時間を予測するという関係は項目分析においてのみみられ、参加者分析においてはみられなかった。この理由として考えられるのは、両分析で検討した効果の側面の違いである。すなわち、項目分析では文の属性の効果を投入した上で読解時間に対する没入傾向の影響をみているのに対し、参加者分析では没入傾向の高低による文の記述内容の読解時間に対する影響の差をみているという違いがあった。実際、項目分析においても共感・イメージ得点と記述内容の交互作用項は、読解時間を予測しなかった。これらの結果は、没入体験傾向の読解時間に対する効果は文の記述内容に左右されないことを示唆している。今回の記述内容の分類はごく大まかなものであり、状況モデル、とりわけイベントインデックスモデルで想定されている状況次元

(Zwaan, Magliano et al., 1995; Zwaan & Radvansky, 1998) を反映しているわけではない。これまでの研究では、共感することが因果関係の理解を促進する可能性 (Komeda & Kusumi, 2006) や登場人物の理解に影響すること (Komeda et al., 2009) などが示されており、今後は状況モデルの各次元の構築に没入体験がどのように影響するのか詳細に検討する必要がある。

感情評定の分析では、安心条件において没入傾向の効果がみられた。すなわち、相関分析では没入傾向が高いほどポジティブ感情や読みへの動機づけを強く体験していることが明らかとなり、分散分析の結果では、没入傾向の高い参加者はそうでない参加者に比べてネガティブ感情を低く評定することが明らかになった。これらの結果は、没入しやすい読者は物語内容に沿った感情を読解中に体験しやすいことを示唆している。もちろんこの結果のみから、読者が物語の主人公に対して共感していたと結論づけることはできないが、読者が登場人物の感情をモニターしていることは多くの研究から示されており (Gernsbacher, Goldsmith, & Robertson, 1992; Komeda & Kusumi, 2006)、この感情推論に没入が関連している可能性は高い。このことから考えると、本研究の結果は通常の感情推論に加えて、没入によって登場人物へ共感が高まった結果生じたものと考えられる。一方、不安条件での感情評定にはこうした没入の効果はみられなかった。これは研究 7 の結果と整合的であり、6-2-3 で述べたような考察が再び可能であろう。すなわち、不安条件にみられるネガティブな感情は、没入の程度に関係なく喚起されやすいものである可能性が考えられ、この喚起特性は、没入による読後の感情評定への効果を上回ったと考えるのが妥当であろう。

本研究の結果は、物語への没入傾向が物語理解そのものや、それにとまって体験する感情に影響していることを、一部ではあるが明らかにした。これらの結果は研究 7 ではみられなかったものであり、物語に没入するようにという教示が読者の没入への構えを形成したが、この構えが没入傾向の強さによって異なる形で現れたといえるかもしれない。すなわち、没入を促す教示によって没入傾向のもともと高い参加者は物語内容の処理が促進され、また物語内容に一致した感情の喚起が促されたが、没入傾向の低い参加者はそうした効果がみられなかったということが考えられる。これは、普段の読書スタイルが物語読

解に影響していることを示唆しており、興味深い結果である。しかし、操作チェックの結果からは本研究の没入教示が実際の読解時における没入体験を促進させたとはいえず、こうした議論は慎重に行う必要がある。繰り返しになるが、本来自発的になされる没入を、教示によって操作することの限界を踏まえた上で、今後の検討は行われるべきである。

#### 第4節 まとめ

本章では、物語への没入傾向が物語読解過程にどのように影響するかを検討した。研究7と研究8をまとめると、通常の読みの場合、物語への没入傾向は読解時の内容の処理よりも読解時に生じる感情への影響が比較的強くみられることが明らかになった。一方、没入するように教示を与えた条件では、没入体験傾向の個人差が物語理解と読解時の感情喚起とに影響することが示された。二つの研究では、没入傾向の感情に対する効果は安心条件のみで現れており、物語内容が没入傾向と相互作用を起こしつつ、実際の物語読解時の体験を形成していると考えられるだろう。一方、没入体験の読解時間への効果は、没入教示によって参加者の構えを操作した研究8のみでみられた。このことは、普段から没入しやすい個人とそうでない個人とで異なる読み方が行われており、没入しやすい個人の方がより容易に物語を理解できたと捉えることができる。

本章で行った研究は、物語読解過程において没入体験が物語理解を促進する機能を持っている可能性を示した。今後は、イベントインデックスモデル (Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan, Magliano et al., 1995) の想定する各次元に対する没入体験の効果を細かく検討することで、その機能の詳細をさらに明らかにしていくことが望まれる。そのような試みは、我々が体験する変性意識体験の中で比較的身近な没入という現象が、我々の認知過程とどのように関連しているかを解明することにも、重要な示唆をもたらしてくれるだろう。

## 第 7 章

---

### 総合的考察



本論文の目的は、次の五つの問題を検討することであった。第1に、物語への没入体験を測定できる尺度を開発すること、第2に、文学的体験における没入体験の役割を明らかにすること、第3に、没入体験と読書習慣や読書活動との関連を検討すること、第4に、没入体験傾向と実際の読みにおける没入体験との関係を検討すること、そして第5に、物語への没入が読解過程に影響を及ぼすかを明らかにすることであった。第7章ではこれらを踏まえつつ、2章から6章までで述べた八つの研究の成果をまとめる。次いで、上記の五つの問いを大きく「没入体験と関連する諸要因」と「読解過程における没入体験」の二つに分けて最終的な考察を行い、没入体験を含めた新たな読解モデルとして「物語読解 - 没入モデル」(narrative reading-immersion model)を提案する。

## 第1節 本論文で得られた成果

### 7-1-1 没入体験傾向を含む文学的体験傾向の測定

まず研究1では第1の課題に取り組むため、個人の文学的体験をする傾向を測定する尺度として Miall & Kuiken (1995) の LRQ を日本語に翻訳した。わが国において、物語読解時の体験の程度を測定する試みはこれまでほとんどなされていなかったため、ほぼ初の試みであったといつてよい。予備調査の結果、読解時の洞察や作者への注目など、因子分析で再現されなかった下位尺度が多くあり、海外でのデータとのずれが示唆された。しかし共感とイメージの二つの因子は一つの因子としてまとまりつつ一貫した構造を持つことが推測され、この尺度の有用性を予想させる結果となった。そこで研究2では、原版の尺度からの項目選定を行うことで37項目の LRQ-J を開発し、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、LRQ-J の各下位尺度は十分な内的整合性を持っていること、そして各下位尺度はイメージ能力の主観報告、没入性や空想傾向、自我の回復力などに関連することが示された。これらは Miall & Kuiken の結果とほぼ同様のものとなり、LRQ-J の妥当性も確認された。

研究3と研究4では、第2の目的である「文学的体験における没入体験の役割」、そして第3の目的である「没入体験と読書習慣との関連」を検討した。研究3では女子大学生を対象に、研究4では一般社会人を対象に、それぞれ質問

紙調査を行ったところ、いずれの検討でも、物語への没入体験は読解時に作者や文体に注目する傾向とともに、自己洞察する傾向に影響を与えていることが示された。これは文学の領域で提唱されている文学的体験の生起に関する仮説モデルである自己変容感情仮説 (Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002) を実証的に支持するものである。これらの結果から、没入体験は文学的体験の鍵となる体験であることが推測された。また、没入体験、とりわけ読書への注意の集中は、小説を読む頻度と関連していることも示され、読書の動機づけ研究において指摘されている没入の役割 (秋田・無藤, 1993; Greaney & Newman, 1990; Schiefele et al., 2012; Wigfield & Guthrie, 1997) が改めて示唆された。

研究 5 では、第 1 の課題へのもう一つの取り組みとして、読解時の実際の没入体験の程度を測定する尺度として Green & Brock (2000) の移入尺度を日本語に翻訳し、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、移入尺度は Green & Brock の想定する三つの下位因子とほぼ同じ「影響」「イメージ」「没入」という 3 因子が抽出されたが、全体の内的整合性は各下位因子よりも高いことなどが示された。また LRQ-J との間には中程度から弱い相関が見出され、併存的妥当性も担保された。

これを受けて研究 6 では、第 4 の目的である「没入体験傾向が実際の没入体験の生起に及ぼす効果」を検討するため、移入尺度と LRQ-J を用いて集団調査を行った。その結果、共感やイメージをする傾向と物語から自己について洞察をする傾向が、移入の程度に影響していることが示され、同時に、読書に没頭する傾向や作者に注目する傾向は自己洞察傾向を通して間接的に移入に関連していることが明らかになった。このことは、移入が単なる没入体験だけではなく、自己変容体験などの文学的体験に近い要素も含んでいることを示している。

#### 7-1-2 没入体験が物語読解に及ぼす効果

本研究の第 5 の目的は、物語への没入体験が実際の読解、とりわけ物語理解の過程に影響しているかを検討することであった。このために研究 7 では参加者に実際に物語を読んでもらい、その読解時間と読後の感情評定を指標として没入体験の効果を検討した。その結果、没入体験の読解時間に対する影響は見られず、感情評定、とりわけ安心条件における読みへの動機づけに影響するこ

とが示された。この結果からは、読解における没入体験は主に読後の感情に影響しているといえるが、Komeda & Kusumi (2006) などの先行研究の結果からは、読解課題時の教示によって没入体験傾向の効果が現れることが考えられた。そこで研究 8 では、参加者に対して読解時に没入しながら読むようにと教示した。その結果、没入傾向が高いほど読解時間が短くなることが明らかになった。このことは、普段から没入しやすい傾向を持つ個人はそうでない個人よりも、読解時の没入によって物語理解が促される可能性を示している。研究 7 と研究 8 の結果から、没入体験は物語読解の過程で内容の処理を促し、また物語内容に沿った感情の体験を促す役割を持っていると考えられる。

## 第 2 節 没入体験に関連する心理・環境的要因

本節と次節では、本論文で検討した八つの研究の成果を元に、物語読解における没入体験について全体的な考察を行う。まず本節では、研究 1 から研究 6 までの結果を踏まえながら、没入体験とさまざまな心理・環境的要因との関連について論ずる。とりわけ、本論文のなかで中心的に取りあげた三つのトピックである、没入体験の状態と特性との関連、没入体験に関連する心理特性、そして没入体験と読書習慣の 3 点から考察する。

### 7-2-1 没入体験傾向と没入状態

本論文では、物語世界への没入体験を測定するツールとして二つの尺度を開発した。一つは研究 1 と 2 で開発した LRQ-J であり、これは第 3 章で述べたように、共感・イメージや読書への没頭といった没入体験傾向と、それらを含めた文学的体験全体の一般的傾向を測定する尺度である。一方、研究 5 で作成した移入尺度は、第 5 章でも述べたように、物語読解時に実際に体験する没入状態の程度を測定する尺度である。このように没入体験には、普段の傾向あるいは特性と、実際に物語を読んだときの状態という二つの個人差が存在すると考えられる。それでは、没入体験の特性と状態とはそれぞれどのようなものであるのだろうか。

2-2-7 や第 5 章の冒頭で述べたように、没入体験を測定するためのツールは数

多く作成されているが、それらの多くは物語の読解時あるいは視聴時に体験した没入を測定する尺度となっている。特に、社会心理学やコミュニケーション学などで用いられている尺度はいずれも状態としての没入体験を測るものである (Busselle & Bilandzic, 2009; Cohen, 2001; Green & Brock, 2000; Yale, 2013)。これは、これらの研究の主眼が、物語に接触することの効果を検討することに置かれているためであろう。実際、移入に関する一連の研究では、関心のあるトピックを描いた物語への移入によって、当該トピックへの態度がどのように変化するかという研究デザインでの検討を行っている (Green & Brock, 2000; McFerran et al., 2010; Williams et al., 2010)。一方で Green らは、移入の個人差に関連する特性としてイメージ能力や空想傾向などを挙げており (Green, 2004; Green & Dill, 2012; Green & Carpenter, 2011; Green & Donahue, 2008), Mazzocco et al. (2010) は、移入の個人差を説明する特性として移入傾向という概念を提唱している。このように、移入状態は物語やそれに触れる状況などの外的要因だけによって説明されるものではなく、個人の特性からの影響を受けているといえる。2-2-7 で論じたように、移入は本論文で検討している物語への没入に含まれる概念である。このことから、読者が物語に触れたときに体験する没入の背後には、個人特性としての没入体験傾向があると考えられる。読者個人の傾向は文学理論の領域でも検討されており、文学的体験の一般的傾向を測定する Miall & Kuiken (1995) の LRQ はその文脈の中に位置づけることができる。

以上のような考察を踏まえると、本論文の研究 6 の結果は没入体験傾向とそれを含めた文学的体験傾向が移入体験に影響することを示す点で、没入体験の状態と特性との関係を実証的に明らかにしたと捉えることができる。研究 6 では、物語への移入状態の程度が、LRQ-J で測定した共感・イメージと現実の理解とによって予測されることが示された。これは、没入状態が、没入体験傾向だけでなくさまざまな個人特性の影響を受ける可能性を示唆している。こうした検討の試みは、物語読解と個人特性という、これまで検討されてこなかった二つの概念の関係性を検討する足掛かりとなるだろう。

#### 7-2-2 没入体験傾向に関連する心理特性

7-2-1 で論じたように、没入体験の背後に没入体験傾向があるとすると、没入

体験傾向もまたそれ以外の心理特性と関連していることが予想される。第2章で論じたように、物語への没入に関連する研究はさまざまな分野で行われてきているが、その過程で没入に関連する心理特性も提唱されている。それらを総合すると、物語への没入に関連すると考えられるのは、イメージへの没入性(大宮司他, 2000; Tellegen & Atkinson, 1974), 空想傾向 (Wilson & Barber, 1983), 心的イメージ能力 (Lynn & Rhue, 1986; Green & Dill, 2012), 体験への開放性 (McCrae & Costa, 1985; Wild et al., 1995), 解離傾向 (岡田他, 2004), 共感性 (Davis, 1983; 登張, 2003) などが挙げられる。研究2では、LRQ-Jの妥当性の検討を目的としてさまざまな質問紙との関連を検討した。その結果、心的イメージ能力を測定するQMI, 空想傾向を測るCEQ, それと類似した没入性を測定するIII, 自我の回復力を測定するER尺度と関連が示された。こうした結果は、上記のような多くの特性と物語への没入傾向との関連を明らかにしたといえる。

没入性や空想傾向は、2-2-1で述べたように催眠感受性との関連の中で検討されてきた特性であり、本論文での「物語世界への没入体験」の基底ともいえる概念である。これらはいずれも、変性意識状態と呼ばれる状態への親和性という側面も持っており (Tellegen & Atkinson, 1974), 解離とも関連があると指摘されている (Merckelbach et al., 2001; 岡田他, 2004)。こうした指摘に基づくと、物語世界という現実とは離れた表象に入り込むことは、日常生活とは異なる意識状態に近いものであると考えられる。

イメージ能力は物語理解とも関連の深い概念であり、読解中のイメージと物語理解との関連の検討もなされている (Denis, 1982; 福田, 1996)。しかしながら、これらと物語への没入体験との関連はあまり検討されていなかった。Miall & Kuiken (1995) や Green & Brock (2000) は、イメージを物語への没入体験に含めており、イメージ能力もまた没入と関連している可能性が考えられた。研究2の結果はこれを裏付けるものであるが、イメージ能力については近年、客観指標による測定や認知能力との関連などさまざまな検討がなされており (菱谷, 2011), 今後は本論文で取りあげたような主観指標以外に、客観指標による検討も必要である。

Miall & Kuiken (1995) は文学的体験と関連する特性として、「自我機能としての退行」を挙げている。これを受けて、研究2では自我の回復力を測定する

ER 尺度を実施した。その結果、共感・イメージなどと弱いながら正の相関が示された。没入体験と自我機能との関連を説明する理論モデルはこれまで提唱されていないが、このことは、物語を読むことによる精神的健康への貢献を予想させる。今後、物語読解の臨床応用の可否を考える上でも、こうした観点の研究は有意義なものとなるだろう。

このように、物語世界への没入はさまざまな心理特性と関連している。本論文ではこれ以外の心理特性との検討はできなかったが、上に挙げたように、没入体験と関連が予想される特性はいくつか存在する。これらについてさらに検討していくことで、物語を読んだときの読者の体験の多様性をさらに説明できる新たなモデルを構築することが期待される。7-2-2 で述べた没入体験の特性と状態との関連とも合わせて、読者のどのような特性が、どのように物語読解と関連するのかを検討し、読者の体験する読みの多様性をさらに明らかにしていくことが重要となるだろう。

### 7-2-3 没入体験傾向と読書習慣

研究3と研究4では、物語への没入傾向が読書習慣とどのように関連するか検討した。その結果、共感・イメージと読書への没頭が小説を読む頻度と関連していること、とりわけ読書への没頭が読書頻度を予測することが示された。

すでに論じたように、従来の読書への動機づけ研究では、動機づけを構成する次元の一つとして空想や没頭といった概念が指摘されている (Greaney & Newman, 1990; Schiefele et al., 2012; Wigfield & Guthrie, 1997)。2-3-3 でも述べたが、こうした次元は物語への没入体験と近いものであると考えられ、この観点から考えれば、物語への没入が読書頻度と関連する背後には、これらが読書行為の内発的動機づけとして機能していることが考えられる。しかしながら、読書への動機づけで記述されている没頭などの具体的内容は、研究者によって大きく異なっており、それらが本論文で論じた没入体験のどの下位要素に当たるのかは、あまり明らかになっていない。本研究は読書への動機づけについて検討してはいないが、研究3と研究4の結果からは、物語を読むことの動機づけとして機能しているのは読書への没頭であると推測できる。これは、2-2-7 で整理した没入体験の下位要素のうちの「注意の集中」に相当すると考えられる。

注意の集中は、物語をイメージしたり登場人物に共感したりすることの基礎となっているとも考えられ、活動の喜びや楽しみをもたらすフロー（Csikszentmihalyi, 1990）の中心的な概念でもある。このように考えると、読書への動機づけは、物語へ注意を集中することで生じた楽しみや満足感によってもたらされると捉えなおすことができる。

従来、読書への動機づけは読書頻度（De Naeghel et al., 2012）だけでなく、読書量と関連することも指摘されてきた（Schaffner et al., 2013; Schiefele et al., 2012）。本論文では、読書頻度のみを読書習慣の指標として検討したが、厳密に言えば、読書頻度と読書量はそれぞれ異なる指標である。読書量の指標を取ることで個人の読書習慣をより多面的に測定し、没入体験が読書の動機づけとしての機能を果たしているか検討することも必要である。また、物語を読むことによる楽しみや満足感と読書への動機づけが、どのような関係にあるのかはあまり検討されていない。本論文では、読後の楽しみや喜び、満足感といった指標を測定してはいないため、今後、物語への没入という概念を中心にして、これらを統合的に検討することが求められる。

### 第3節 物語読解過程における没入体験の位置づけ

本節では、物語読解過程における没入体験の機能について考察する。第2章で述べたように、物語世界への没入体験は文学やメディア論、認知心理学、社会心理学など多くの学問領域で検討が行われてきた。そして、この現象を統合的に捉えようとする研究は未だ少ないものの、移入や物語への関与などいくつかの研究が影響力のある理論として注目されるようになってきた（Busselle & Bilandzic, 2009; Green & Carpenter, 2011）。しかしながら、没入体験が物語読解の過程においてどのような位置にあるのかは、あまり明らかになっていない。すなわち、物語読解において没入がどのように生じ、物語理解を含む読解過程においてどのような役割を果たし、その結果生じる認知的、感情的変化とどのように関連するのかを説明する、統一的なモデルは十分に構築されていない。そこで本節では、物語読解過程における没入の位置づけについて、先行研究として物語理解・関与モデルを取りあげ、このモデルにおける物語理解と没入との

関係について考察する。そして、研究7と研究8での成果を踏まえ、物語理解の最も有力な理論である状況モデル理論（Zwaan & Radvansky, 1998）と没入体験の理論を統合する新たなモデルとして、没入 - 物語理解モデルを提唱する。

### 7-3-1 物語読解において没入体験が果たす役割

「物語理解・関与モデル」（Model of narrative comprehension and engagement）は Busselle & Bilandzic (2008) によって提唱されたモデルである。Busselle らは、物語に関与、すなわち没入するには物語世界に関する「現実性」（realism）を読者が適切に知覚し評価できることが重要であると指摘した。ここでいう現実性とは、物語世界が現実世界と類似したものであるか、あるいは作品内で一貫した世界として描かれているかといった性質であり、Busselle らは読解時に物語の現実性の破綻が検出されたときに没入が阻害されるという仮説を提唱した。

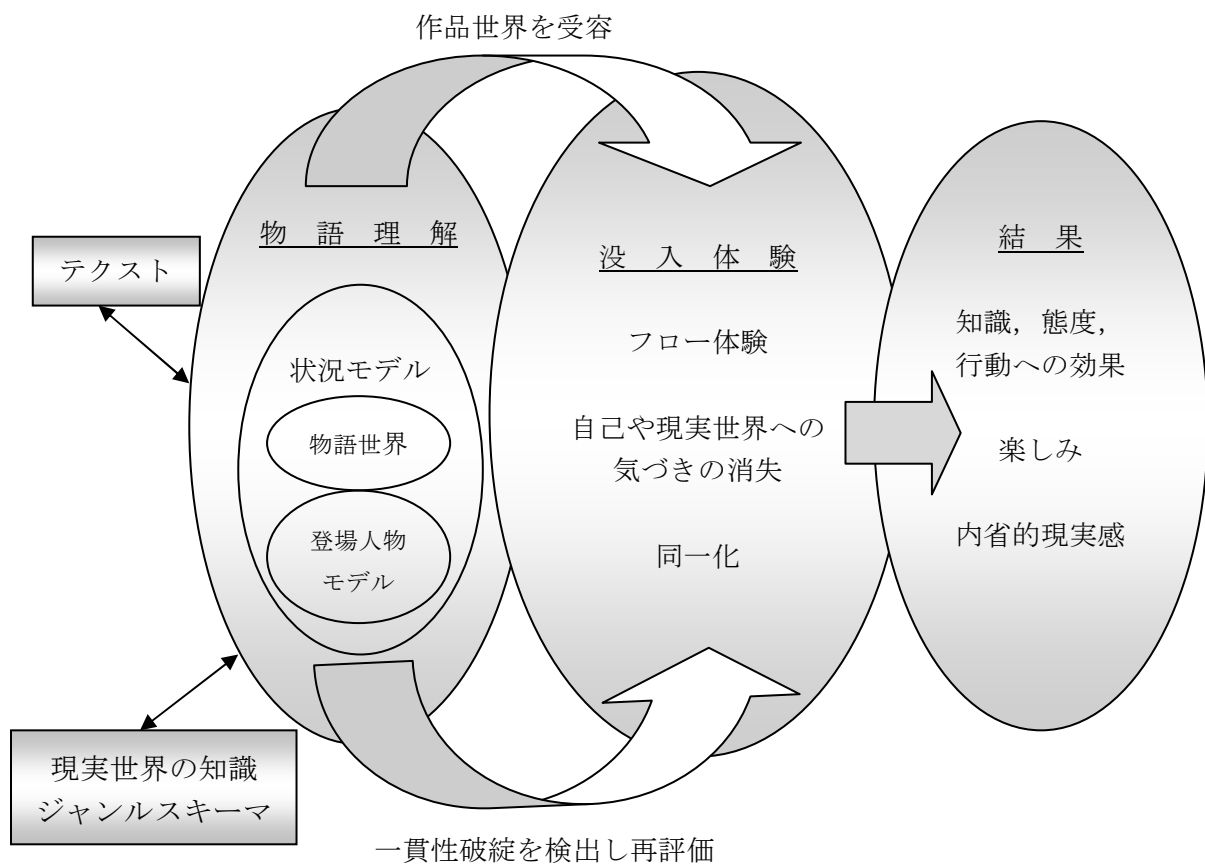


図 7-1 物語理解・関与モデル（Busselle & Bilandzic, 2008, p. 272 より改変）



図 7-1 に Busselle らのモデルの概要を示す。

このモデルにおけるプロセスは、読解時に状況モデルが構築されることから始まる。このうち、物語世界の構築において重要なのは時間、空間、登場人物に関する各次元のモデルであり、読者はこれらの情報を鮮明に理解するために、意識の中心を現実の世界から物語世界へと移動させる必要があるとする。この移動は、個々の言葉の指し示す対象が現実世界から物語世界へと移動する「指示変化」(deictic shift; Duchan, Bruder, & Hewitt, 1995)によってもたらされる。一方でこの過程では、物語世界の現実性のモニタリングが常に行われており、これが読解中の没入体験に影響する。ここで、図中の二つの矢印は、この影響過程が二つあることではなく、現実性の破綻が検出された場合とされない場合それぞれにおける影響の内容を示している。すなわち、現実性の破綻が検出されない場合、読者は物語世界をそのまま受容してその中に没入し(図 7-1 上の矢印)、その結果楽しみや喜びを体験したり、また物語内容に関する知識や態度の変化といった影響を受けたりする。しかし、状況モデルの構築過程で現実性の重大な破綻が認識された場合(下の矢印)、現実性の詳細な再評価が行われ、それによって破綻が解決されるまで没入は阻害される。

Busselle & Bilandzic (2008) は、物語への没入現象として移入、同一化、フロー体験の 3 つを例示している。このことから、このモデルにおける没入は、2-2-7 で整理した没入の下位要素(表 2-1)における注意の集中、外界および自己意識の減退、作品のイメージ、同一化、そして物語の現実性を含む概念であると考えられる。そして、没入が起るメカニズムとして、物語の一貫性の破綻が検出されないことが物語の現実性の知覚につながり、状況モデルの構築や物語世界のイメージ化をスムーズに行うことが可能になると説明する。これによって、読者は読解活動に対するフローを体験することができ、同一化はその過程で同時並行的に進むものと理解することができる。そしてこれらは、読解時あるいは読解後の楽しみや喜び、知識や態度の変化といった結果をもたらすとされている。

### 7-3-2 物語読解 - 没入モデル

2-7-4 で述べたように、物語への没入体験を構成する作品世界のイメージ化や

登場人物への同一化は、物語読解における状況モデル構築を促進する可能性がある。これを検討するために行った研究7と研究8の結果、没入体験は物語読解において一定の役割を持っていること、とりわけ没入が物語理解を促進する可能性のあることが示唆された。しかしながら、7-2-1で取りあげた Busselle & Bilandzic (2008) のモデルでは、こうした可能性は考慮されておらず、また没入体験の影響を取り入れた読解モデルも、筆者の知る限りでは提唱されていない。そこで、物語理解の主要理論である状況モデルと既存の没入に関する理論とを踏まえて、状況モデルの構築によって没入が生じると同時に、没入することによって状況モデルの構築が促進されるという「物語没入 - 読解モデル」(narrative immersion-reading model) を提唱する。本モデルの全体像を図7-2に示す。

本モデルでは、物語読解は大きく分けて状況モデルと物語世界への没入体験という下位要素で構成されていると仮定する。読者の体験するこの過程は、Busselle & Bilandzic (2008) と同様に状況モデルの構築から始まる。状況モデルには時間、空間、登場人物などの各次元が組み込まれており (Zwaan, Langston

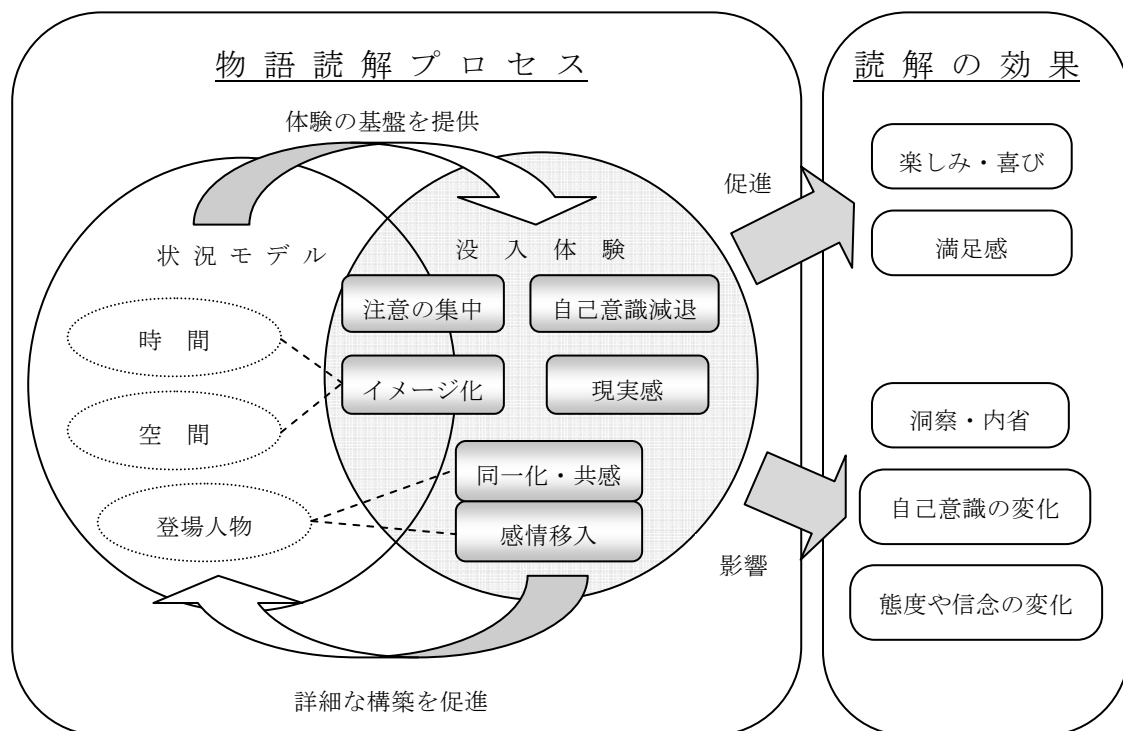


図 7-2 物語読解－没入モデルの概念図

et al., 1995; Zwaan, Magliano et al., 1995) , これらが表象としての物語世界 (Oatley, 1999, 2002) を構成している。一方没入体験は注意の集中, 自己意識の減退, 物語世界のイメージ化, 共感／同一化, 感情移入, 物語の現実感という, 2-2-7 で述べた六つの下位要素で構成されている。ここで, 読者は状況モデルの構築に注意を集中させるが, 状況モデルは物語世界に関する知覚的情報を含んでおり (Zwaan, 1999a), その過程で物語世界のイメージが形成される。このように, 両プロセスは独立したものではなく, 状況モデルの構築とともに注意の集中やイメージといった没入のプロセスが進行する。また, 状況モデル内の登場人物に関する情報によって, その人物への同一化や感情移入がもたらされ, また同時に, 外界への気づきの消失や物語への現実感の感覚が生じる。こうして, 図 7-2 の上矢印が示すように, 状況モデルは没入体験を支え, それらが生起するための基盤を提供している。一方で図の下矢印が示すように, 没入体験は状況モデルの詳細な構築に貢献する。同一化は登場人物に関する情報の精緻化に, 情景のイメージ化は時間, 空間といった情報の精緻化に主に関連するが, これ以外の次元 (因果関係や目標など) の情報の精緻化にも没入は影響する (Komeda & Kusumi, 2006)。こうして精緻化された状況モデルはさらなる没入を促し, 読解中に両者の相互作用が繰り返されることによって, 読者は作品世界がまるで実世界と同じであるかのような現実感を体験する。さらに, 没入しながらの読みは, 読解後の満足感や喜び, 楽しみなどを促進する効果を持ち (Green, 2004; Tal-Or & Cohen, 2010), 一方で自己洞察や物語内容に関連した信念などに影響する (Green & Brock, 2000; Kuiken, Miall et al., 2004)。このように, 本モデルは既存の没入に関する理論と物語理解過程とを統合したモデルといえる。

### 7-3-3 本モデルと各理論との関係性および検討課題

物語没入 - 読解モデルは, 物語理解研究における状況モデル理論 (van Dijk & Kintsch, 1983; Zwaan & Radvansky, 1998) を基礎としつつ, これに物語世界に没入する体験についての理論を組み合わせる物語読解という総体として理解する枠組みを提案するものである。本モデルに従えば, 7-3-1 で概説した物語理解・関与モデル (Busselle & Bilandzic, 2008) に新たな説明を与えることができ, ま

た 2-3-1 で述べた自己変容感情仮説 (Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002) に対しても、心理学的見地からのアプローチの可能性を与えることができる。これによって、これまで明らかにされてこなかった物語読解における没入の役割について、実証的な検討を行うことが可能となる。

まず本モデルでは、Busselle & Bilandzic (2008) のモデルにおける没入と状況モデルとの関係に加えて、「没入が状況モデル構築を促進する」という関係を仮定することで、没入は物語理解過程と相互作用するという新たな位置づけを与えた。これによって、読みによって物語を鮮明に体験できるという現実感が生じるメカニズムを、没入による状況モデルの精緻化によって説明することができる。また、状況モデルの構築にともなってその世界を鮮明に体験するという指摘 (e.g., Zwaan, 1999a) について実証的な検討を行うことも可能になる。とりわけ、作品世界表象に含まれる時間や空間、登場人物といった各次元と没入体験との相互作用については、イベントインデックスモデル (Komeda & Kusumi, 2006; Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan, Magliano et al., 1995) や読者 - 主人公相互作用モデル (Komeda et al., 2009; 米田・楠見, 2007) の検討で用いられる、読解時間測定や読後に行う文章の重要度評定課題などを用いて検討することが考えられる。これによって、状況モデル理論に没入過程を取り入れた、より包括的な読解プロセスの解明が期待できる。

次に、2-3-1 で紹介した自己変容感情仮説 (Miall & Kuiken, 2002) についても、新たな枠組みから検討が可能である。2-3-1 で触れたように、Miall らのモデルにおける物語感情は、没入のうち同一化や感情移入に相当すると考えられる。研究 3 と研究 4 では、このモデルを支持する結果を調査によって得ているが、こうした体験が物語理解においてどう生起するかは明らかになっていない。しかし本モデルに従えば、読解で生じる物語感情を、「状況モデル構築と相互作用的に生起した情景イメージや登場人物への同一化」と捉えることができ、これによって、文学的体験が読解過程で生じるメカニズムの心理学的検討が可能となる。たとえば、文学読解の現象学的検討手法 (Kuiken, Miall et al., 2004; Kuiken, Phillips et al., 2004) に従って、読者が体験する審美感情や自己変容感情などを言語報告という形で抽出し、これらが没入体験とどのように関連するかを検討したり、認知心理学的手法を組み合わせる状況モデル構築との関連をみたりす

るといった方法が考えられる。こうした統合的研究の試みは、文学読解を心理学的見地から明らかにすることに大きく貢献するであろう。

さらに、没入と読後の楽しみや喜びといった感情との関連についても、新しい視点での検討を提案できる。2-2-2などで触れたように、読後の楽しみと移入との関連については、主に質問紙を用いた検討が行われてきたが（Green et al., 2004; Tal-Or & Cohen, 2010）、これらと物語読解の認知メカニズムとの関連はあまり明らかになっていない。本モデルに従って、移入を読解過程で生じるイメージ化や注意の集中と捉えなおすことで、没入のどの側面が楽しみや満足感につながるか、あるいは状況モデルの構築プロセスと読後の効果との関連などについて検討することが可能となり、物語を読むことによる認知的、感情的効果のメカニズムの解明にもつながるといえる。

一方、これまでに読書活動に関連して、読書中に生じる感情（van der Bolt & Tellegen, 1996）や内発的動機づけ（Greaney & Newman, 1990; Naceur & Schiefele, 2005）、読書への興味（Sadoski, Geotz, & Rodriguez, 2000; Schiefele, 1991）などが検討されているが、こうした概念と没入との関連も今後検討すべき課題であろう。とりわけ動機づけの概念には没入体験が含まれており、読書活動や読解スキルなどへの効果が検討されている（Schiefele et al., 2012）。しかしながらこれらの研究では、状況モデル理論と読書の動機づけとがどのように関連するかは検討されていない。物語読解－没入モデルは、動機づけや興味などに直接焦点を当てたものではないが、こうした要素は没入体験と深いつながりを持つことが予想され、本モデルの観点に立つことで、それらと物語読解過程との関連をより直接的に検討できる可能性がある。

#### 第4節 物語への没入から物語読解を捉えなおす試み

以上のようにみると、物語読解は極めて広範な心理現象と関連していることが考えられる。そこで、本論文で論じた「物語世界への没入」を中心に、物語読解の全体像を描出すると図 7-3 のように整理できる。この図において、物語読解に関連する心的プロセスは、個人内特性、物語読解、そして読書活動の大きく三つに分けることができる。個人内特性としては没入体験傾向とそれを含

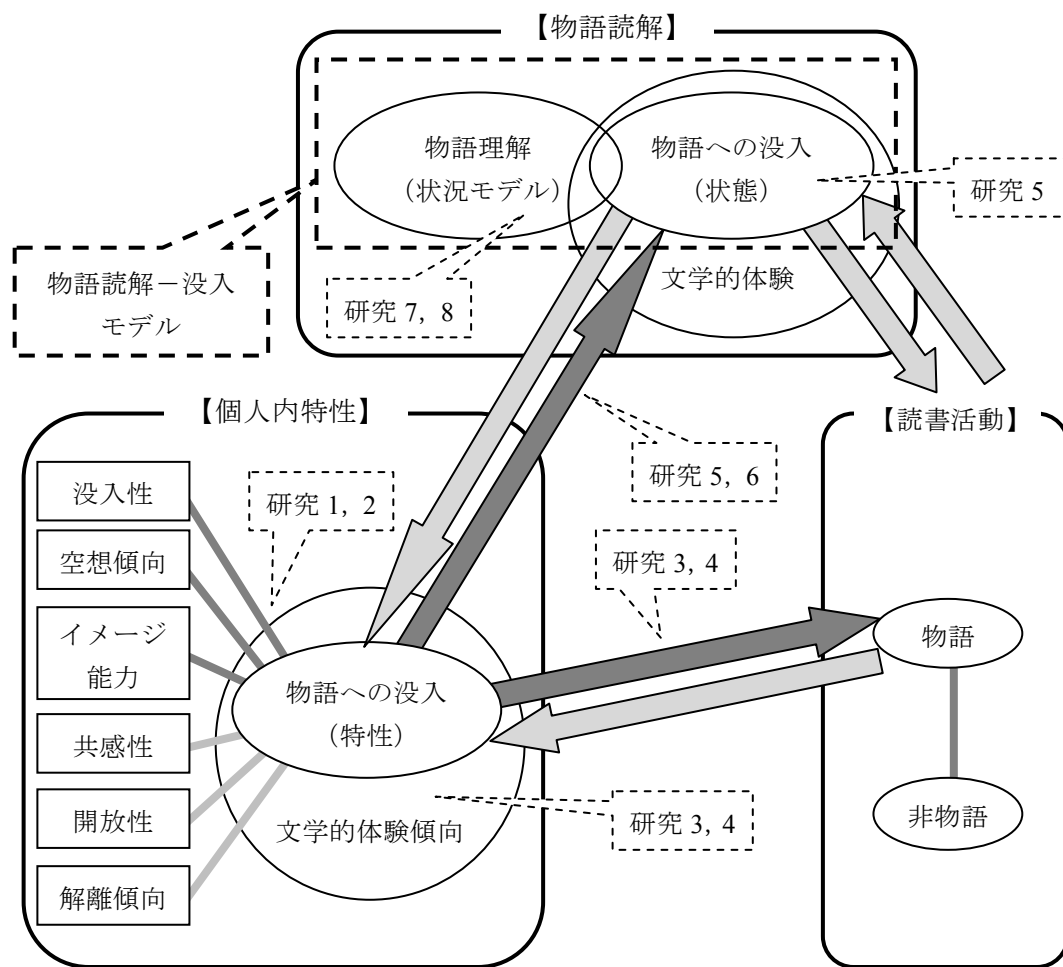


図 7-3 本研究で明らかにした物語への没入体験と物語読解の関係

めた文学的体験傾向があり、それらに多くの既存の心理特性が関連している。本論文では、研究 1 と研究 2 において没入体験と心理特性との関連を検討し、研究 3 と研究 4 では没入体験傾向と文学的体験傾向の関係に焦点を当てた。次に物語読解では、読者が実際に物語を読むときの体験が含まれる。具体的には、物語読解を構成する状況モデル構築と物語への没入体験があり、また読解の過程では文学的体験も経験することがある。ここで、読者が感ずる没入体験は没入体験傾向の個人差の影響を受けている。これについては研究 5 と研究 6 において検討したとおりである。さらに、研究 7 と研究 8 では物語理解と没入との関連について検討を行った。7-3-2 で提唱した物語読解-没入モデルはこの物語読解に含まれ、図中では太い破線で示した範囲に当たる。従来、読書の動機づけとして研究されていたのは、物語読解または個人内特性と読書活動との間の

部分であると考えられ、本論文での考察から、物語に没入することが小説を読む頻度に影響していることが推測される。

しかしながら、本論文では薄い灰色で描いた矢印の関係については検討することができなかった。また、この図で取りあげたプロセスは全体のごく一部であり、特性、読解、活動という三つの要素のなかにはここで記した以外にも多くの要因が含まれている可能性がある。こうした点についてはさらに精緻化させていく必要がある。物語読解という行為が複雑な要素で成り立っていることを鑑みると、こうした統合的なモデルに基づいて包括的見地から物語読解を検討することは、読書という人間の行為を統合的に理解しようとするときの基礎となると考える。そしてこうした検討は、物語を読むという行為をより大きな観点から理解することにも寄与し、人間がなぜ物語を作り、また読むことを求めてきたのかという問題にも新たな視点を提供できるであろう。

## 第 8 章

---

### 結 論



第8章では、第7章までの議論を踏まえて本論文の結論を述べる。まず、本論文で検討した物語世界への没入体験が、認知心理学や社会心理学、さらには物語について研究を行っているさまざまな学問においてどのような意義を持つのか、また、それらの応用として国語教育の領域、そして臨床心理学的実践の領域にどのような示唆を与えることができるかを論ずる。そして、本論文のなかで明らかにすることのできなかった点や、今後改善すべき点などの課題を論じ、最後に、今後の物語研究の方向性について展望を述べる。

## 第1節 本論文の持つ意義

### 8-1-1 学問的意義

本論文は、物語を読んでいるときに読者が体験する「物語世界への没入」に焦点を当て、心理学的測定法の開発、物語読解に関連する心理特性や読書習慣との関連、そして読解時の没入体験の機能について検討してきた。第2章でも述べたように、物語への没入に関する研究は広範な領域で行われているが、没入それ自体をターゲットとして行われた検討は、わが国はもとより世界的にみてもあまり存在しない。本論文で行った考察および実証的検討には、以下に述べるような学問的、そして実践的な意義があると考ええる。

まず、学問的意義として第1に挙げられるのは、物語理解に関する研究への理論的貢献である。2-1-2や2-1-3でも述べたが、認知心理学の領域で物語にアプローチする研究では、これまでに状況モデルなどの理論が提唱され、人間がどのように物語の内容を理解しているかが検討されてきた(Graesser et al., 1997; Olson & Gee, 1988; Zwaan & Radvansky, 1998)。しかしながら、代表的な理論である状況モデルが物語理解の多様性の問題に取り組むという役割を持っていたにもかかわらず(川崎, 2001)、読解に関与する個人差の要因を検討した試みは極めて少ない。近年、物語理解を自伝的記憶の観点からアプローチした研究(常深・楠見, 2009)や、読者と登場人物との類似性に注目した検討(Komeda et al., 2013; 米田・楠見, 2007)が行われるようになり、物語読解における個人差の問題が注目され始めている。本研究は、没入体験という個人差要因を物語読解に位置づける試みであり、こうした検討を行うことで、より統合的な観点から物

語の読みを理解することが可能となる。

第2に、物語をめぐる心理学的効果を検討しているその他の領域に対しても貢献が期待される。社会心理学やコミュニケーション学、メディア心理学の領域では、2-2-2 で取りあげた「移入」や2-2-4 で述べた「同一化」などの概念によって、物語の持つさまざまな効果の検討が行われてきた。しかしながら、こうした概念の類似性は指摘されていても、それらを統合的に検討しようという試みは現在まであまり行われてこなかった。本研究ではこれらの現象に、「物語世界への没入」という新たな統一的概念を提唱した。このことは、個人特性という観点を物語による態度変化のモデルに組み込むことにつながり、読者が実際に体験している現象をより詳細に説明できる理論の構築に寄与すると思われる。また、2-3-1 や研究3、研究4 で検討した文学的体験は、これまでの心理学ではほとんど扱われてこなかった領域でもある。文学理論において定量的研究を行う試み (Kuiken, Phillips et al., 2004; Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 1995, 2002) は、対象とする問題や検討手法の多くを心理学と共有している。物語を読む読者の体験に心理学的にアプローチすることは、文学と心理学の協働を促す点でも意義がある。

第3に、物語はさまざまな領域で刺激材料として用いられており、特に社会心理学や人間の情動を実験的に操作する研究では、カバーストーリーによる操作が一般的であるといっても過言ではない。本論文の成果は、社会科学で物語を用いている研究領域にも少なからず影響を与えるだろう。とりわけ、物語を読むことで読者に生じる現象を明らかにすることは、物語を刺激として用いることの正否や、どのような参加者に、どのような物語を刺激として用いるべきかという問題を議論する上で大きな手がかりとなることが予想される。

このように、本論文の成果は認知心理学のみにとどまらず、物語を研究し、また用いている学問領域に大きな貢献をすることが期待される。

### 8-1-2 実践的意義

次に、実践的意義としては教育への貢献、そして臨床心理学でのいわゆるナラティブアプローチへの貢献が挙げられる。

本論文の冒頭でも述べたように、学校教育、とりわけ国語教育では物語が教

材として使われ、たとえば小学校3,4年生では「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」といった目標が掲げられている（文部科学省, 2008）。従来、物語を含むさまざまな文章を読むことは、子どもの語彙力や文章理解力を育むことが示唆されており（Mol & Bus, 2011; Schaffner et al., 2013）、また教育現場でも、子どもの読書を増やすことが課題として取り上げられることは多い。研究8の結果は、物語世界に没入して豊かに情景をイメージしたり共感したりすることで、物語理解が促進されることを示しており、こうした知見は教育場面においてどのように読書を教授、指導するかという問題にも重要な示唆をもたらすと考える。たとえば、子どもたちに対して、場面をイメージしたり登場人物の気持ちを想像したりしながら読むという指導をさらに意識的に行うことで、子どもたちの文章理解のスキルを上げるといった実践も可能になるだろう。また、本論文で開発した LRQ-J や移入尺度は、こうした体験に大きな個人差があることを示唆している。このことは、子どもたちの物語を読むスタイルの個人差を把握するという視点を提供する。今後、学校において子どもたち一人一人の読書を細やかにアセスメントすることで、個人の課題に沿った教授や指導を行うことができるようになると思う。

近年、臨床心理学では「ナラティブアプローチ」という理論が脚光を集めている（Greenhalgh & Hurwitz, 1998 斎藤他, 2001）。これは、セラピストがクライアントとの対話を物語として理解することで、クライアントの持つ体験を語りとして扱い、物語を書きかえるようにセラピストが援助することを通して、クライアントが課題や悩みを解決できるように促すというアプローチである。1-1-2 で述べた物語の定義に従うならば、クライアントの語る悩みや体験をそのまま物語として理解することは十分に可能である。本論文で論じた物語への没入は、セラピストとクライアントの間に形成される物語を扱う上でも、有効な枠組みとなりうる。Oatley（2011）は、文学作品の読解とある種の心理療法との間に共通点があるかもしれないと述べているが、この仮説がもし妥当であるならば、物語に触れたときの読者の体験のモデル化を試みた本論文の成果は、セラピストによるクライアント理解の姿勢や技法、そしてクライアントの語りをどのように扱うかという問題にも貢献すると思う。

## 第2節 本論文の課題および展望

### 8-2-1 今後の課題

前節でも述べたように、本論文で論じた考察や研究成果は、さまざまな学問的、実践的意義を持つと考えられる。一方で、本論文では十分に検討できなかった課題もいくつか残されており、こうした課題は今後詳細に検討される必要がある。本論文の課題としては、以下のような点が挙げられる。

第1に、物語世界への没入体験を構成する下位要素の問題である。2-2-7では、物語への没入が注意の集中、現実への意識の減退、情景のイメージ、登場人物への共感、感情移入、物語への現実感という六つの要素で構成されていると論じた。しかしながら、研究1で開発したLRQ-Jや研究5で作成した移入尺度は、これらの下位要素を個別に測定する尺度とはなっていない。今後、没入体験が六つの要素で構成されるという仮説を検証するためには、これらを個別に測定できるような新たなツールを開発する必要がある。それを行うことで、本論文で述べた没入体験と物語読解のさまざまな現象との関連を、さらに精緻に検討することが可能となるだろう。

第2に、没入体験と物語理解プロセスとの関連についてである。6-3-3でも述べたように、研究7と研究8では状況モデル理論に基づいた検討は行っていない。物語への没入が物語理解にどのように影響を与えているかを検討するためには、先に挙げた没入体験の下位要素を個別に測定すると同時に、状況モデル構築プロセスを詳細に検討できる実験計画を立てることが不可欠となる。また、今回研究7と研究8で用いた物語は研究用に作成されたもの(Komeda & Kusumi, 2006)であるが、読者が実際の読みでどのように没入を体験し、それが読解過程にどのような効果を持っているかを検討するためには、実際に流通している物語、あるいは文学作品を用いた検討が有効となるだろう。今後は、実験的検討の手法をさらに精緻化した上で、物語への没入体験の実像にアプローチする必要がある。

第3に、物語への没入体験が持つ効果に関する問題である。第2章や7-3-2でも述べたとおり、物語へ没入することは読後の楽しみや満足感(Busselle &

Bilandzic, 2008; Green, 2004; Tal-Or & Cohen, 2010),あるいは自己洞察や態度変化 (Green & Brock, 2000; Kuiken, Miall et al., 2004) に影響すると考えられる。しかしながら, 研究 3 と研究 4, あるいは研究 5 で, 没入が自己洞察を促進するという結果が得られたことを除けば, 物語への没入によって読者にどういった変化が生じるのかは検討できなかった。また, 上記の三つの研究はいずれも LRQ-J を用いて検討したものであり, 実際の読みにおいて読者に生じる洞察をターゲットとはしていない。物語への没入という観点から統合的に物語読解を理解するためには, 7-3-2 で提唱した物語読解ー没入モデルの最後のプロセスである, 没入によって読者にもたらされる効果を検証することが不可欠である。本節で挙げた第 1 の課題である, 六つの要素について実証的に検討することに合わせて, これらの要素が読解による帰結とどのような関係を有しているかを検討することが次のステップである。

以上のような課題を解決することは, 第 7 章の最後で述べた「没入体験から物語読解を捉えなおす試み」を行うために避けることはできない。こうした課題に取り組むことで, 本論文の目指す統合的な物語読解の解明に大きく貢献すると考える。

#### 8-2-2 物語研究の展望

本論文では物語を読むという行為を取りあげ, 物語読解過程の総体を没入という側面から捉えなおすことを試みてきた。最後に, 今後の物語研究の方向性について, 二つの観点を取り上げつつ展望を述べる。

第 1 に, 冒頭でも触れたように, 物語は現実世界や実際の社会的経験のシミュレーションとしての役割を担っているという指摘が近年なされている (Mar & Oatley, 2008; Oatley, 1999a, 2011)。これに関連して, 言語理解研究においては身体化認知に関する研究が近年活発になり, 短文などの読みと身体運動との関連性が指摘されている (Fisher & Zwaan, 2008; 平, 2010)。これらは, 現実世界を体験するように物語が疑似体験されているのではないかと考える上で重要な知見となりうる。一方これまで見てきたように, 没入は物語世界を現実世界と同じであるかのように生き生きと体験する現象であり, 没入が物語のシミュレーションとしての機能に関与している可能性や, 身体化認知が没入体験の基盤

となっている可能性は十分に考えられる。今後、物語への没入の研究が身体化認知の研究と協働することは、読者が物語読解という営みをどのように体験しているのかという問題にアプローチするときの大きな原動力となるだろう。同時に、没入のメカニズムという、これまで解明できなかった問題にも新たな視点を提供するものとして注目される。

第2に、物語読解と他者理解との関連についてである。社会神経科学の分野では、心の理論など他者理解の神経科学的基盤が多く検討されているが (Amodio & Frith, 2006; Buckner & Carroll, 2007; Frith, 2007), これらは物語読解における登場人物の理解にとって重要な要素であり、物語理解とその神経基盤を共有していることが指摘されている (Mar, 2011)。さらに、心の理論などの対人的能力は物語の読書量が多いほど高まることや (Kidd & Castano, 2013; Mar et al., 2006, 2009), 物語に移入すると読後の向社会的行動が高まること (Johnson, 2012; Johnson, Cushman, Borden, & McCune, 2013) も報告されている。こうした知見は、物語への没入が同一化を通して登場人物の理解に関与しているという、これまで本論文で考察してきた仮説にも沿うものである。このように、物語へ没入することと対人的能力との関連を検討することは、今後の大きな検討点となるだろう。物語への没入による対人的能力の促進について詳細に検討することで、複雑な対人的相互作用場面における社会的スキルや共感能力の獲得支援などに応用することも可能になる。

物語読解における没入研究はまだ発展途上にある研究分野であるが、認知心理学における他の理論や神経科学の領域などにおける研究と積極的に協働することは、この分野の研究をさらに進めることに貢献するとともに、物語に関連する諸現象へのアプローチにも極めて有効なものとなる。

### 第3節 おわりに

第1章で紹介した源氏物語のなかで、玉蔓は、光源氏が物語など所詮は嘘でしようとからかったのに対して、それでも物語が本当に起こったことのように思えてならないのだと答えている (與謝野, 1971)。もし、我々が物語を作り、また読んできた動機が、この玉蔓の言葉に表れているとしたら、物語を読むこ

との原動力は、本論文で検討してきた物語の世界に没入することにこそあるのかもしれない。

我々は日々物語に接している。さらにいえば、我々は物語を通して世界や他者を理解しているともいえる (Mar & Oatley, 2008)。本論文で描出を試みた物語読解の総体は、人間が社会生活を営むことそのものを反映しているともいえるだろう。物語読解にアプローチすることは、単に物語読解という営為を理解する上で役立つのみならず、我々が現実世界においてどのようにふるまい、他者と関係を築いているかという問題にも、大きな示唆をもたらすものとなるはずである。

## 引用文献

- 秋田喜代美・無藤隆 (1993). 読書に対する概念の発達の検討——意義, 評価, 感情と行動の関連性 教育心理学研究, **41**, 462-469.
- Amodio, D. M., & Frith, C. D. (2006). Meeting of minds: The medial frontal cortex and social cognition. *Nature Reviews Neuroscience*, **7**, 268-277.
- Appel, M., & Richter, T. (2010). Transportation and need for affect in narrative persuasion: A mediated moderation model. *Media Psychology*, **13**, 101-135.
- Baron-Cohen, S. (2002). The extreme male brain theory of autism. *Trends in Cognitive Science*, **6**, 248-254.
- Baron-Cohen, S. (2003). *The Essential Difference: The truth about the male and female brain*. London: Penguin. (バロン＝コーエン S. 三宅真砂子 (訳) (2005). 共感する女脳, システム化する男脳 NHK 出版)
- Barthes, R. (1961-71). *Introduction a l'analyse structurale des recits*. Paris: Seuil. (バルト R. 花輪光訳 (1979). 物語の構造分析 みすず書房)
- Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: a study of experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press. (バートレット F. C. 宇津木保・辻正三 (訳) (1983). 想起の心理学——実験的社会心理学における一研究 誠信書房)
- Baum, D., & Lynn, S. J. (1981). Hypnotic susceptibility level and reading involvement. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **29**, 367-374.
- Bettelheim, B. (1976). *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance of Fairy Tales*. New York: Knopf.
- Betts, G. H. (1909). *The distribution and functions of mental imagery*. New York: Teachers College, Columbia University.
- Bortolussi, M., & Dixon, P. (2003). *Psychonarratology: Foundation for the empirical study of literary response*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bower, G. H., Black, J. B., & Turner, T. J. (1979). Scripts in memory for text. *Cognitive Psychology*, **11**, 177-220.
- Boyd, B. (2010). *On the origin of stories: Evolution, cognition, and fiction*. Cambridge,



- MA: Belknap Press of Harvard University Press.
- Braun, I. K., & Cupchik, G. C. (2001). Phenomenological and quantitative analyses of absorption in literary passages. *Empirical Studies of the Arts*, **19**, 85-109.
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Buckner, R. L., & Carroll, D. C. (2007). Self-projection and the brain. *Trends in Cognitive Science*, **11**, 49-57.
- Busselle, R., & Bilandzic, H. (2008). Fictionality and perceived realism in experiencing stories: A model of narrative comprehension and engagement. *Communication Theory*, **18**, 255-280.
- Busselle, R., & Bilandzic, H. (2009). Measuring narrative engagement. *Media Psychology*, **12**, 321-347.
- Chang, C. (2008). Increasing mental health literacy via narrative advertising. *Journal of Health Communication*, **13**, 37-55.
- Clark, C., & Rumbold, K. (2006). *Reading for pleasure: A research overview*. London, UK: National Literacy Trust. (<http://www.eric.ed.gov/PDFS/ED496343.pdf> 2013 年 12 月 16 日閲覧)
- Cohen, J. (2001). Defining identification: A theoretical look at the identification audiences with media characters. *Mass Communication & Society*, **4**, 245-264.
- Coplan, A. (2004). Empathic engagement with narrative fictions. *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, **62**, 141-152.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper & Row.
- 大宮司信・芳賀あい子・笠井仁 (2000). イメージへの没入性と性格および不安との関連 催眠学研究, **45(1)**, 24-29.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Davis, S., Dawson, J. G., & Seay, B. (1978). Prediction of hypnotic susceptibility from imaginative involvement. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **20**, 194-198.

- de Graaf, A., Hoeken, H., Sanders, J., & Beentjes, J. W. J. (2012). Identification as mechanism of narrative persuasion. *Communication Research*, **39**, 802-823.
- De Naeghel, J., Van Keer, H., Vansteenkiste, M., & Rosseel, Y. (2012). The relation between elementary students' recreational and academic reading motivation, reading frequency, engagement, and comprehension: A self-determination theory perspective. *Journal of Educational Psychology*, **104**, 1006-1021.
- Denis, M. (1982). Imaging while reading text: A study of individual differences. *Memory & Cognition*, **10**, 540-545.
- Djikic, M., Oatley, K., & Moldoveanu, M. C. (2013). Reading other minds: Effects of literature on empathy. *Scientific Study of Literature*, **3**, 28-47.
- Duchan, F. J., Bruder, G. A., & Hewitt, L. E. (1995). *Deixis in narrative: A cognitive science perspective*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Engelen, J. A. A., Bouwmeester, S., de Bruin, A. B. H., & Zwaan, R. A. (2011). Perceptual simulation in developing language comprehension. *Journal of Experimental Child psychology*, **110**, 659-675.
- Ennis, R. E. (1987). Taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron, & R. J. Sternberg (Eds.) *Teaching thinking skills: Theory and practice*. (pp. 9-26) New York: W. H. Freeman and Company.
- Fellows, B. J., & Armstrong, V. (1977). An experimental investigation of the relationship between hypnotic susceptibility and reading involvement. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **20**, 101-105.
- Fish, S. E. (1980). *Is there a text in this class?: The authority of interpretive communities*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (フィッシュ S. E. 小林昌夫 (訳) (1992). このクラスにテキストはありますか——解釈共同体の権威 みすず書房)
- Fisher, M. H., & Zwaan, R. A. (2008). Embodied language: A review of the role of the motor system in language comprehension. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **1**, 1-26.
- Freud, S. (1940). Abriß der Psychoanalyse. *Internationale Zeitschrift für Psycho-analyse und Imago*, **25**, 7-67. (津田均 (訳) (2007). 精神分析概説. 新

- 宮一成・鷺田清一・道籙泰三・高田珠樹・須藤訓任. フロイト全集 22 (pp. 175-250) 岩波書店)
- Frith, C. D. (2007). The Social brain? *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Science*, **362**, 671-678.
- 福田由紀 (1996). 物語理解における視覚的イメージの視点の役割 風間書房.
- Genette, G. (1972). *Discourse du recit, essai de methode*. Paris: Seuil. (ジェネット G. 花輪光・和泉涼一訳 (1985). 物語のディスクール——方法論の試み 水声社)
- Gernsbacher, M. A., Goldsmith, H. H., & Robertson, R. R. W. (1992). Do readers mentally represent characters' emotional states? *Cognition and Emotion*, **6**, 89-111.
- Gerrig, R. J. (1993). *Experiencing narrative worlds*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Graesser, A. C., Mills, K. K., & Zwaan, R. A. (1997). Discourse comprehension. *Annual Review of Psychology*, **48**, 163-189.
- Graesser, R. A., Singer, M., & Trabasso, T. (1994). Constructing inferences during narrative text comprehension. *Psychological Review*, **101**, 371-395.
- Graesser, A. C., Woll, S.B., Kowalski, D. J., & Smith, D. A. (1980). Memory for typical and atypical actions in scripted activities. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, **6**, 503-515.
- Greaney, V., & Newman, S. B. (1990). The functions of reading: A cross-cultural perspective. *Reading Research Quarterly*, **25**, 172-195.
- Green, M. C. (2004). Transportation into narrative worlds: The role of prior knowledge and perceived realism. *Discourse Processes*, **38**, 247-266.
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2000). The role of transportation in the persuasiveness of public narratives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 701-721.
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2002). In the mind's eye: Transportation-imagery model of narrative persuasion. In M. C. Green, J. J. Strange, & T. C. Brock (Eds.) *Narrative impact: Social and cognitive foundations*. (pp. 316-341). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

- Green, M. C., & Brock, T. C., & Kaufman, G. F. (2004). Understanding media enjoyment: The role of transportation into narrative worlds. *Communication Theory*, **14**, 311-327.
- Green, M. C., & Carpenter, J. M. (2011). Transporting into narrative worlds: New directions for the scientific study of literature. *Scientific Study of Literature*, **1**, 113-122.
- Green, M. C., & Dill, K. E. (2012). Engaging with stories and characters: Learning, persuasion, and transportation into narrative worlds. In K. E. Dill (Ed.) *The oxford handbook of media psychology*. (pp. 449-461). New York: Oxford University Press.
- Green, M. C., & Donahue, J. K. (2008). Simulated worlds: Transportation into narratives. In K. D. Markman, W. M. P. Klein, & J. A. Suhr (Eds.). *Handbook of imagination and mental simulation*. (pp. 241-254). New York: Psychology Press.
- Greenhalgh, T., & Hurwitz, B. (Eds.) (1998). *Narrative based medicine: Dialogue and discourse in clinical practice*. London: BMJ. (グリーンハル T・ハーウィッツ B. 斎藤清二・山本和利・岸本寛史訳 (2001). ナラティブ・ベイスト・メディシン——臨床における物語りと対話 金剛出版)
- Hilgard, E. R. (1965). *Hypnotic susceptibility*. New York: Harcourt, Brace & World.
- 平山るみ・楠見孝 (2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす効果——証拠評価と結論生成課題を用いての検討 教育心理学研究, **52**, 186-198.
- 菱谷晋介 (2011). イメージ能力の個人差 箱田裕司 (編) 現代の認知心理学 7——認知の個人差 (pp. 52-75) 北大路書房.
- Holland, N. N. (1975). *5 reader reading*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Igartua, J. (2010). Identification with characters and narrative persuasion through fictional feature films. *Communication*, **35**, 347-373.
- 井関龍太 (2004). テキスト理解におけるオンライン処理メカニズム——状況モデル構築過程に関する理論的概観 心理学研究, **75**, 442-458.
- Iser, W. (1976). *Der akt des lesens: Theorie asthetischer wirkung*. München: Wilhelm Fink Verlag. (イーザー W. 轡田収 (訳) (1982). 行為としての読書——美的作用の理論 岩波書店)

- Johnson, D. R. (2012). Transportation into a story increases empathy, prosocial behavior, and perceptual bias toward fearful expressions. *Personality and Individual Differences*, **52**, 150-155.
- Johnson, D. R., Cushman, G. K., Borden, L. A., & McCune, M. S. (2013). Potentiating empathic growth: Generating imagery while reading fiction increases empathy and prosocial behavior. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, **7**, 306-312.
- Johnson-Laird, P. N. (1983). *Mental models: Towards a cognitive science of language, inference, and consciousness*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Just, M. A., & Carpenter, P. A. (1992). A capacity theory of comprehension: Individual differences in working memory. *Psychological Review*, **99**, 122-149.
- 笠井仁・井上忠典 (1993). 想像活動の関与に関する研究——測定尺度の作成と妥当性の検討 催眠学研究, **38(2)**, 9-20.
- 川崎恵里子 (2001). 文章理解の理論 中島義明 (編) 現代心理学[理論]事典 (pp. 308-328) 朝倉書店.
- Keen, S. (2006). A theory of narrative empathy. *Narrative*, **14**, 207-236.
- Kidd, D. C., & Castano, E. (2013). Reading literary fiction improves theory of mind. *Science*, **342**, 377-380.
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kneepkens, E. M. E. W., & Zwaan, R. A. (1994). Emotions and literarytext comprehension. *Poetics*, **23**, 125-138.
- 米田英嗣 (2010). 物語理解と社会認知神経科学 楠見孝 (編) 現代の認知心理学 3——思考と言語 (pp. 270-290) 北大路書房.
- Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2009). Differences between estimating protagonists' emotions and evaluating readers' emotions in narrative comprehension. *Cognition & Emotion*, **23**, 135-151.
- Komeda, H., & Kusumi, T. (2006). The effect of protagonist's emotional shift on situation model construction. *Memory & Cognition*, **34**, 1548-1556.
- 米田英嗣・楠見孝 (2007). 物語理解における感情過程——読者-主人公相互作用

- による状況モデル構築 心理学評論, **50**, 163-179.
- 米田英嗣・仁平義明・楠見孝 (2005). 物語読解における読者の感情——予感, 共感, 違和感の役割 心理学研究, **75**, 479-486.
- Komeda, H., Tsunemi, K., Inohara, K., Kusumi, T., & Rapp, D. N. (2013). Beyond disposition: The processing consequences of explicit and implicit invocations of empathy. *Acta Psychologica*, **142**, 349-355.
- 小森めぐみ (2012). 物語への移入が物語関連製品への広告評価に及ぼす影響——小説と映像を用いた検討 武蔵野大学人間科学研究所年報, **1**, 79-90.
- Kuiken, D., Miall, D. S., & Sikora, S. (2004). Forms of self-implication in literary reading. *Poetics Today*, **25**, 171-203.
- Kuiken, D., Phillips, L., Gregus, M., Miall, D. S., Verbitsky, M., & Tonkonogy, A. (2004). Locating self-modifying feelings within literary reading. *Discourse Processes*, **38**, 267-286.
- 倉野憲司 (校注) (1963). 古事記 岩波書店.
- 楠見孝 (2011). 批判的思考とは——市民リテラシーとジェネリックスキルの獲得 楠見孝・子安増生・道田泰司 (編) 批判的思考力を育む——学士力と社会人基礎力の基盤形成 (pp. 2-24) 有斐閣.
- Lorch, R. F., & Myers, J. L. (1990). Regression analyses of repeated measures data in cognitive research. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **16**, 149-157.
- Lynn, S. J., & Rhue, J. W. (1986). The fantasy-prone person: Hypnosis, imagination, and creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 404-408.
- Mandler, J. M. (1982). Recent research on story grammars. In J. F. Le Ny, & W. Kintsch (Eds.) *Language and comprehension*. (pp. 207-218). Amsterdam: North Holland.
- Mandler, J. M., & Johnson, N. S. (1977). Remembrance of things parsed: Story structure and recall. *Cognitive Psychology*, **9**, 111-151.
- Mar, R. A. (2011). The neural bases of social cognition and story comprehension. *Annual review of Psychology*, **62**, 103-134.
- Mar, R. A., & Oatley, K. (2008). The function of fiction is the abstraction and

- simulation of social experience. *Perspectives on Psychological Science*, **3**(3), 173-192.
- Mar, R. A., Oatley, K., Hirsh, J., dela Paz, J., & Peterson, J. B. (2006). Bookworms versus nerds: exposure to fiction versus non-fiction, divergent associations with social ability, and the simulation of fictional social worlds. *Journal of Research in Personality*, **40**, 694-712.
- Mar, R. A., Oatley, K., & Peterson, J. B. (2009). Exploring the link between reading fiction and empathy: Ruling out individual differences and examining outcomes. *Communications*, **34**, 407-426.
- Marinak, B. A., & Gambell, L. B. (2010). Reading motivation: Exploring the elementary gender gap. *Literacy Research and Instruction*, **49**, 129-141.
- Mazzocco, P. M., Green, M. C., Sasota, J. A., & Jones, N. W. (2010). This story is not for everyone: Transportability and narrative persuasion. *Social Psychology and Personality Science*, **1**, 361-368.
- McCrae, R. R. & Costa, P. T. Jr. (1985). Openness to experience. In R. Hogan, & W. H. Jones (Eds.) *Perspectives in personality. Vol. 1*. Greenwich, CT: JAI Press. 145-172.
- McFerran, B., Dahl, D. W., Gorn, G. J., & Honea, H. (2010). Motivational determinants of transportation into marketing narratives. *Journal of Consumer Psychology*, **20**, 306-316.
- McGeown, S., Goodwin, H., Henderson, N., & Wright, P. (2012). Gender difference in reading motivation: Does sex or gender identity provide a better account? *Journal of Research in Reading*, **35**, 328-336.
- Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Muris, P. (2001). The Creative Experience Questionnaire (CEQ): A brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and Individual Differences*, **31**, 987-995.
- Miall, D. S. (1988). Affect and narrative: A model of response to stories. *Poetics*, **17**, 259-272.
- Miall, D. S. (1989). Beyond the schema given: Affective comprehension of literary narratives. *Cognition and Emotion*, **3**, 55-78.

- Miall, D. S. (2011). Emotions and the structuring of narrative responses. *Poetics Today*, **32**, 323-348.
- Miall, D. S., & Kuiken, D. (1995). Aspects of literary response: A new questionnaire. *Research in the Teaching of English*, **29**, 37-58.
- Miall, D. S., & Kuiken, D. (2002). A feeling for fiction: Becoming what we behold. *Poetics*, **30**, 221-241.
- 宮崎拓弥・本山宏希・菱谷晋介 (2003). 名詞, 及び形容詞の感情価——快—不快次元についての標準化 イメージ心理学研究, **1(1)**, 48-59.
- Mol, S. E., & Bus, A. G. (2011). To read or not to read: A meta-analysis of print exposure from infancy to early adulthood. *Psychological Bulletin*, **137**, 267-296.
- 文部科学省 (2008a). 小学校学習指導要領. ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm) 2013 年 12 月 24 日閲覧)
- 文部科学省 (2008b). 中学校学習指導要領. ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm) 2013 年 12 月 24 日閲覧)
- Murphy, S. T., Frank, L. B., Chatterjee, J. S., & Baezconde-Garbanati, L. (2013). Narrative versus nonnarrative: The role of identification, transportation, and emotion in reducing health disabilities. *Journal of Communication*, **63**, 116-137.
- Naceur, A., & Schiefele, U. (2005). Motivation and learning - the role of interest in construction of representation of text and long-term retention: inter- and individual analysis. *European Journal of Psychology of Education*, **29**, 155-170.
- 中野達馬・加藤和生 (2005). CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale) 作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 272-274.
- 直井優 (編) (2005). 情報通信技術革命の文化的・社会的・心理的効果に関する調査研究 平成 13～平成 16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 A2 13301007) 研究成果報告書 大阪大学.
- Nell, V. (1988). *Lost in a book: Psychology of reading for pleasure*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Oatley, K. (1995). A taxonomy of the emotions of literary response and a theory of identification in fictional narrative. *Poetics*, **23**, 53-74.
- Oatley, K. (1999a). Why fiction may be twice as true as fact: Fiction as cognitive and



- emotional simulation. *Reviews of General Psychology*, **3**, 101-117.
- Oatley, K. (1999b). Meeting of minds: Dialogue, sympathy, and identification, in reading fiction. *Poetics*, **26**, 439-454.
- Oatley, K. (2002). Emotions and the story worlds of fiction. In M. C. Green, J. J. Strange, & T. C. Brock (Eds.) *Narrative impact: Social and cognitive foundations*. (pp. 39-69) Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Oatley, K. (2011). *Such stuff as dreams: The psychology of fiction*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- O'Brien, E. J., & Myers, J. L. (1994). Text comprehension: A view from the bottom up. In S. R. Goldman, A. C. Graesser, & P. van den Broek (Eds.) *Narrative comprehension, causality, and coherence: essays in honor of Tom Trabasso*. (pp. 35-53). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Odağ, Ö. (2013). Emotional engagement during literary reception: Do men and women differ? *Cognition & Emotion*, **27**, 856-874.
- Olson, M. W., & Gee, T. C. (1988). Understanding narratives: A review of story grammar research. *Childhood Education*, **64**, 302-306.
- 小川未明 (1951). 小川未明童話集 新潮社.
- 岡田斉・松岡和生・轟知佳 (2004). 質問紙による空想傾向の測定——Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) の作成 人間科学研究, **26**, 153-161.
- 折口信夫 (2002). 古代研究 I——祭りの発生 中央公論新社
- 折口信夫 (2003). 古代研究 III——国文学の発生 中央公論新社
- Radvansky, G. A. (2012). Across the event horizon. *Current Directions in Psychological Science*, **21**, 269-272.
- Richardson, A. (1969). *Mental Imagery*. London: Routledge and Kegan Paul. (リチャードソン A. 鬼沢貞・滝浦静雄 (訳) (1973). 心像 紀伊国屋書店)
- Roche, S. M., & McConkey, K. M. (1990). Absorption: Nature, assessment, and correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 91-101.
- Sadoski, M., Geotz, E.T., & Rodriguez, M. (2000). Engaging texts: effects of concreteness on comprehensibility, interest, and recall in four text types. *Journal*

- of Educational Psychology*, **92**, 85-95.
- 阪本一郎 (1971). 現代の読書心理学 金子書房.
- 坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつ of 社会心理学 東京大学出版会.
- Sakamoto, S. (1998). The preoccupation scale: Its development and relationship with depression scales. *Journal of Clinical Psychology*, **54**, 645-654.
- Salen, K., & Zimmerman, E. (2004). *Rules of play: Game design fundamentals*. Cambridge, MA; The MIT Press.
- Sanford, A. J. (2008). Defining embodiment in understanding. In M. de Vega, A. M. Glenberg, & A. C. Graesser (Eds.) *Symbols and embodiment: Debates on meaning and cognition*. (pp. 181-194). New York: Oxford University Press.
- Sanford, A. J., & Emmott, C. (2012). *Mind, brain and narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐々木良輔 (1998). 「思いやりの気持ち」に与える読書の影響 読書科学, **42**, 47-59.
- Schaffner, E., & Schiefele, U. (2007). Auswirkungen habitueller lese motivation auf die situative textrepräsentation [Effects of habitual reading motivation on the situational representation of text]. *Psychologie in Erziehung und Unterricht*, **54(4)**, 268-286.
- Schaffner, E., Schiefele, U., & Ulferts, H. (2013). Reading amount as a mediator of the effects of intrinsic and extrinsic reading motivation on reading comprehension. *Reading Research Quarterly*, **48**, 369-385.
- Schank, R. C. (1982). *Dynamic memory: a theory of reminding and learning in computer and people*. New York: Cambridge University Press. (シヤンク R. C. 黒川利明・黒川容子 (訳) (1988). ダイナミック・メモリ——認知科学的アプローチ 近代科学社)
- Schank, R. C. & Abelson, W. E. (Eds.). (1977). *Script, plans, goals and understanding; An inquiry into human knowledge structures*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Association.
- Schiefele, U. (1991). Interest, learning and motivation. *Educational Psychologist*, **26**, 299-323.

- Schiefele, U., Schaffner, E., Möller, J., & Wigfield, A. (2012). Dimensions of reading motivation and their relation to reading behavior and competence. *Reading Research Quarterly*, **47**, 427-463.
- Segal, E. M. (1995). A cognitive-phenomenological theory of fictional narrative. In J. F. Dunchan, G. A. Bruder, & L. E. Hewitt (Eds.) *Deixis in narrative: A cognitive science perspective*. (pp. 61-78). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Sheehan, P. W. (1967). A shortened form of Betts' questionnaire upon mental imagery. *Journal of Clinical Psychology*, **23**, 386-389.
- 真銅正宏 (2007). 小説の方法——ポストモダン文学講義 萌書房.
- 平知宏 (2010). 比喩理解と身体化認知. 楠見孝 (編) 現代の認知心理学 3——思考と言語—— (pp. 245-269). 北大路書房.
- Tal-Or, N., & Cohen, J. (2010). Understanding audience involvement: Concept and manipulating identification and transportation. *Poetics*, **38**, 402-418.
- 田中優子・楠見孝 (2007). 批判的思考プロセスにおけるメタ認知の役割 心理学評論, **50**, 256-269.
- Tellegen, A., & Atkinson, G. (1974). Openness to absorbing and self-altering experiences ("Absorption"), a trait related to hypnotic susceptibility. *Journal of Abnormal Psychology*, **83**, 268-277.
- Thorndyke, P. W. (1977). Cognitive structures in comprehension and memory of narrative. *Cognitive Psychology*, **9**, 77-110.
- Thurstone, L. L. (1946). Comment. *American Journal of Sociology*, **52**, 39-50.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達——多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- Torette, C. J., & Kaikati, A. M. (2009). Values as predictors of judgments and behaviors: The role of abstract and concrete mindsets. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 231-247.
- 常深浩平・楠見孝 (2009). 物語理解を支える知覚・運動処理——疑似自伝的記憶モデルの試み 心理学評論, **52**, 529-544.
- van den Broek, P., Ridsen, K., Fletcher, C. R., & Thurlow, R. (1996). A "landscape" view of reading: Fluctuating patterns of activation and the construction of a stable

- memory representation. In B. K. Britton & A. C. Graesser (Eds.) *Models of understanding text*. (pp. 165-187). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- van den Broek, P., Young, M., Tzeng, Y., & Linderholm, T. (1999). The landscape model of reading: Inferences and the online construction of a memory representation. In H. van Oostendorp & S. R. Goldman (Eds.) *The construction of mental representations during reading*. (pp. 71-98). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Van Der Bolt, L., & Tellegen, S. (1996). Sex differences in intrinsic reading motivation and emotional reading experience. *Imagination, Cognition and Personality*, **15**, 337-349.
- van Dijk, T. A., & Kintsch, W. (1983). *Strategies of discourse comprehension*. New York: Academic Press.
- van Laer, T., De Ruiter, K., Visconti, L. M., & Wetzels, M. (in press). The extended transportation-imagery model: A meta-analysis of the antecedents and consequences of consumers' narrative transportation. *Journal of Consumer Research*.
- Watkins, M. W. & Coffey (2004). Reading motivation: Multidimensional and indeterminate. *Journal of Educational Psychology*, **96**, 110-118.
- Wigfield, A., & Guthrie, J. T. (1997). Relations of children's motivation for reading to the amount of breadth of their reading. *Journal of Educational Psychology*, **89**, 420-432.
- Wild, T. C., Kuiken, D., & Schopflocher, D. (1995). The role of absorption in experiential involvement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 569-579.
- Williams, J. H., Green, M. C., Kohler, C., Allison, J. J., & Houston, T. K. (2010). Stories to communicate risks about tobacco: Development of a brief scale to measure transportation into a video story – The ACCE Project. *Health Education Journal*, **70**, 184-191.
- Wilson, S. C., & Barber, T. X. (1983). Fantasy-prone personality: Implications for understanding imagery, hypnosis and parapsychological phenomena. In A. A. Sheikh (Ed.) *Imagery: current theory, research, and application*. (pp. 340-387).

- New York: Willy.
- Wollheim, R. (1974). Identification and imagination. In R. Wollheim (Ed.) *Freud: A Collection of Critical Essays*. (pp. 172–195). New York: Anchor.
- Yale, R. N. (2013). Measuring narrative believability: Development and validation of the Narrative Believability Scale (NBS-12). *Journal of Communication*, **63**, 578-599.
- 與謝野晶子 (1971). 全訳源氏物語 (中) 角川書店.
- Zunshine, L. (2006). *Why we read fiction: Theory of mind and the novel*. Columbus, OH: Ohio State University Press.
- Zwaan, R. A. (1999a). Embodied cognition, perceptual symbols, and situation models. *Discourse Processes*, **28**, 81-88.
- Zwaan, R. A. (1999b). Five dimensions of narrative comprehension: the event indexing model. In S. R. Goldman, A. C. Graesser, & P. van den Broek (Eds.) *Narrative comprehension, causality, and coherence: Essays in honor of Tom Trabasso*. (pp. 93-110). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Zwaan, R. A. (2004). The immersed experiencer: Toward an embodied theory of language comprehension. In B. H. Ross (Ed.) *The psychology of learning and motivation*, Vol. 44 (pp. 35-62). NY: Academic Press.
- Zwaan, R. A., Langston, M. C., & Graesser, A. C. (1995). The construction of situation models in narrative comprehension: An event-indexing model. *Psychological Science*, **6**(5), 292-297.
- Zwaan, R. A., Magliano, J. P., & Graesser, A. C. (1995). Dimensions of situation model construction in narrative comprehension. *Journal of Experimental Psychology*, **21**, 386-397.
- Zwaan, R. A., & Radvansky, G. A. (1998). Situation models in language comprehension and memory. *Psychological Bulletin*, **123**, 162-185.

## 付 録

### A. 日本版文学反応質問紙（研究 1 から研究 8 で使用）

教示：

次の質問を読み、あてはまると思うところに丸をつけてください。（5：そう思う，4：ややそう思う，3：どちらともいえない，2：あまりそう思わない，1：そう思わない）

項目：

#### <共感・イメージ>

- ・物語を読んでいると、それが本当に目の前にあるもののように感じられることが時々ある
- ・私は、自分が読んだことのある物語の人物にほとんど完全に“なりきってしまった”ように感じるものが時々ある
- ・物語を読んでいると、自分が物語の人物の一人であると思うことがある
- ・小説の中の会話が、まるで実際の会話を聞いているように聞こえることがしばしばある
- ・私は、読んだ小説の中に出てくる場所が、写真を見ているかのようにはっきりと見えることがしばしばある
- ・私は、自分が劇の演技の用意をしているかのように、進んで物語中の人物の役に自分を投影しようとする
- ・小説の中の人物が日常の中にいる実際の人であるように感じられることが時々ある
- ・物語や詩の情景が私にとってとても明瞭で、その情景のにおいや手触りなどの“感覚”を感じることができる
- ・物語を読んでいると、部分的にしか描かれていない情景が私の心の中では完全で生き生きとした場面になる

#### <読書への没頭>

- ・私は、普段の仕事を忘れてしまうくらいに小説に没頭するのが好きだ
- ・時間が空いているときに最もしたいことは小説を読むことだ

- ・私にとって、何もすることのないときに小説を読むことは楽しく時間をすごすことのできるものだ
- ・読書をしていると時間が経つのを本当に忘れてしまう
- ・最後まで読み終えるまで本を閉じられないことがよくある
- ・読んでいる本にのめりこむあまり、完全に我を忘れてしまうことがしばしばある
- ・物語を読むことはリラックスするのに最適だと思う

#### <作者への関心>

- ・小説を読んでいるときの私の主な興味は、その作者が社会や文化をどうとらえているかを知ることである
- ・文学を読んでいるときの主な興味は、作者の持つテーマや関心について知ることである
- ・私が本を読んでいるときにはたいてい、その作者に特徴的なテーマを確認しようとする
- ・読書をしているときには、その作家の特徴的なスタイルに注意を向けるのが好きだ
- ・私は、ある作家の作品が同時代のほかの作品とどう関係しているかを考えるのが好きだ
- ・文学が作者の生活に関する事実を照らしだすときにはとりわけ面白いと思う
- ・私は作家の書く文体の技巧に興味をそそられる

#### <現実の理解>

- ・文学は、自分のとは異なる人生を理解するのに役立つと思う
- ・文学に接していると、自分の日常生活の中で見落としていた感情に時々気づくことがある
- ・文学は、私が普段の生活では無視してしまうような人々を理解するのに役立つと思う
- ・文学作品を読むと、自分の生き方を変えたいと思うことに気づくことが時々ある
- ・ある種の文学作品は、自分が抱く比較的ネガティブな感情を理解するのに

役立つと思う

- ・文学作品を読むと、私の生活のなかでいつもは気づかないある部分に目を向けようとする
- ・文学作品を読むと、自分の周囲にいる人々や出来事の本質に対する洞察力が得られると思う
- ・小説を読んでいるとき、私がもっとも知りたいと思うことはストーリーがどう展開していくかという点である

<ストーリー志向>

- ・小説を読んでいるときには、登場人物たちに何が起こるかを知ることに関心がある
- ・私が一番好きな小説のタイプは、ストーリーが面白いと思えるものだ
- ・どちらかというと、動きのたくさんある小説のほうが好きだ
- ・小説やドラマでもっとも重要な要素は筋書きだと思う
- ・私は、予測できなかった結末が訪れる小説が一番好きだ
- ・物語のあらすじの中で緊張感が高まってゆくのが好きだ

## B. 空想傾向質問紙（CEQ-J：岡田・松岡・轟, 2004）（研究2で使用）

教示：

それぞれの文章を読んで、その文章があなたにどのくらいあてはまるか、最も近いと思うところに○をつけてください。もし答えに自信がなくても、必ず全ての項目について○をつけてください。皆さんの回答は統計的に処理され、個々人の情報が公表されることは一切ありませんので、ありのままをお答えください。

項目：

- ・子どもの頃、一緒に遊んだ人形やテディベアやぬいぐるみの動物が実際に生きていたと思っていた。
- ・子どもの頃、小人や妖精や、ほかのおとぎ話に出てくるような登場人物が実在していると強く信じていた。
- ・子どもの頃、自分自身で友だちや動物のふりをして遊んでいた。



- ・ どもの頃、非常に容易に物語や映画の主人公に感情移入したり、一体感をもったりすることができた。
- ・ どもの頃、自分がほかの誰か(例えば、お姫様とか孤児とか)であるように感じることもときどきあった。
- ・ どもの頃、空想や白昼夢（デイドリーム）の世界に親しむことを身近な大人たち（両親、祖父母、兄弟）から勧められた。
- ・ どもの頃、ひとりぼっちでさみしいとたびたび感じた。
- ・ どもの頃、楽器の演奏、ダンス、演技、あるいは絵を描くことに自分の時間の大部分を費やした。
- ・ 一日（日中）の半分以上を空想や白昼夢（デイドリーム）に浸って過ごしている。
- ・ 友人や親類の多くは、私がこれほど豊かで詳細な空想をもっているということを知らない。
- ・ 自分の空想の多くは、現実のような鮮やかさ（リアリティ）をもっている。
- ・ 自分の空想の多くは、しばしばよくできた映画のように生き生きとしている。
- ・ 空想したことを現実にあったことと混同することがしばしばある。
- ・ 退屈なときは空想をし始めるので、決して退屈することはない。
- ・ 時々、自分が誰か他の人であるかのようにふるまい、完全にその役になりきってしまうことがある。
- ・ どもの頃の思い出について、非常に鮮明で生き生きとした記憶がよみがえる。
- ・ 私は3歳以前の出来事をいろいろと思い出すことができる。
- ・ テレビで暴力を見ると、それに入り込んでしまって実際に動揺してしまう。
- ・ 何か冷たいものを考えると、実際に寒くなることがある。
- ・ 腐った食べ物を食べてしまったと想像すると、本当に吐き気をもよおしてしまうことがある。
- ・ 時々、未来に起こることを予知できるという感覚をもつことがある。
- ・ 誰かある人のことを考えていて、そのすぐ後にその人が電話をかけてきたり現れたりするといった体験がしばしばある。

- ・時々、体外離脱体験（自分が身体から抜け出してしまうような体験）をしていたと感ずることがある。
- ・何かを歌ったり書いたりする時、自分以外の誰かや何かに自分が操られているという感ずをもつことがときどきある。
- ・人生の中で、非常に強いやり方で自分に影響を与えた強烈な宗教体験がある。

### C. 想像活動への没頭尺度（III: 笠井・井上, 1993）（研究 2 で使用）

教示：

下記の各項目の内容について、あなたがどの程度同意するか判定してください。判定は下に示してある評定尺度に基づいて行ってください。7段階の評定尺度の中から、あなたが自分に最も当てはまると思うものを各項目につき1つ選んで、その数字を括弧の中に記入して下さい。（1：全くそういうことではない～7：全くその通りである）

項目：

- ・スキーが上手にできると、重力をものともしないで空中を飛んだりすることができるので、本当に楽しいだろうと思います。
- ・ときに自分ではどうもしようのない運命を感じることがあります。その運命に自分をゆだねてみようと思うこともあります。運を天にまかせてみると、受け入れがたいと思うようなことでも受け入れてみようと言う気持ちになるものです。
- ・架空の場面について考えるのが好きです。例えば、物語を作り出して想像の世界に浸りきるようなことです。
- ・小さい頃、本を読んでくれる人がいて、その人は本当にその物語に没頭していました。よく同じ物語を繰り返し繰り返し読んでくれました。その物語に熱中するたびに、すっかり信じ込んで、自分が物語の世界に入り込んでいるように感じました。
- ・音楽が本当に好きです。音楽を聴いているときには、何も考えていません。音楽に浸っています。音楽に身をまかせて、その流れを感じています

- ・これまで、絵を描いたり、文章を書いたり、デザインをしたりというように創造的な活動に深く関心をもってきました。
- ・SF や冒険物語を読むのが好きです。というのも、それは何の制約もないからです。しばらくの間、すっかり理屈の中の世界から離れて自由になれる。自由ですし、何の制約也没有ありません。じっくり考える必要也没有ありません。しばらくの間理屈から離れるのです。
- ・本に没頭していると、「読んでいる」という感じが薄れて、登場人物になります。その人物になるのです。その世界に入り込んでしまいます。
- ・空想にふけっていると、それを本当に体験しているように思えます。
- ・映画を見るのが好きです。映画を本当に楽しんだ後には、もう一度思い返すことがよくあります。周りのことは忘れて、その物語に熱中してしまいます。気持ちをかき立てられて、登場人物になりきってしまいます。
- ・大事なことがあるときには神頼みをします。お参りをしてお守りをもっていれば神様の力に守られて、いつでも自分の力を十分に発揮できそうな気がします。
- ・高速道路を車で走っていると、力強さを感じて、風を切り、飛んでいるような感じになって自由になれるのでおもしろいと思います。
- ・すてきな物語を見聞きすると何度も思い返して楽しみ、夢中になってそのように振る舞ったりします。実際、いかにもそれらしくもとの物語をふくらませていると、一流の物語と同じくらいに現実味を帯びてきます。
- ・工芸とか文芸、学術研究、美術、音楽のように何かを創り出すことに充実感を感じています。
- ・想像力を使えるし、熱中できるので SF が好きです。それは現実の世界から離れることのできる手段です。どんな種類の SF でも好きです。SF を読み始めるとやめられません。SF にひかれるのは、想像力を使うところです。想像力を働かせることは、自分の人生の中で大きな部分を占めています。
- ・本を読んでいるときには、自分自身のことや周りのことを忘れています。いつもの自分ではありません。自分の善悪の判断や価値基準はなくなります。著者自身の判断や規準に従います。登場人物になりきるというよりも著者になりきってしまうのです。

- ・子どもの頃よく空想にふけて、空想にのめり込むあまり、それが現実の出来事のように思えました。
- ・できるだけ長い間、戸外で過ごします。特に何を考えるわけでもなく、ただ思いに身をまかせながら、小川や池の岸边、丘の斜面に腰をおろしたり、散歩をしたりするのが好きです。

#### D. 心像質問紙（QMI：Richardson, 1969 鬼沢・滝浦訳 1973）（研究2で使用）

評定法：

1：完全に明瞭で、実際の経験と同じくらい鮮やかである，2：非常に明瞭で、鮮やかさの点で実際の経験に匹敵する，3：中くらいの明瞭さと鮮やかさを持っている，4：明瞭でも鮮やかでもないが、認めることはできる，5：ぼんやりしていて微かである，6：ほとんど見分けられないほど、ぼんやりしていて微かである，7：全くイメージが現れないで、ただ、自分が対象について考えているということを「分かっている」だけである

教示と項目：

<視覚>

あなたがよく会っている親戚とか友人とかのことを考え、あなたの心の目に浮かぶその像を注意して見てください。そして、次の各質問によって示唆されるイメージを、この評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示される通りに分類してください。

- ・顔や頭、肩、体の正確な輪郭は
- ・いかにもその人らしい頭や体などの姿勢は
- ・歩行中の足に運びや歩幅などは
- ・どれかよく着ている衣服の中の種々の色は

あなたの心の目に現れてくる像を注意しながら、次のものを見ているつもりになってください。そして、次の質問によって示唆されるイメージを、評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・地平線に沈もうとしている太陽は

#### <聴覚>

あなたの心の耳に現れてくるイメージに注意しながら、次の音を聞いているつもりになってください。そして、示唆されるイメージを、評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・機関車の汽笛は
- ・自動車のクラクションは
- ・猫の鳴き声は
- ・蒸気の洩れる音は
- ・拍手の音は

#### <触覚>

あなたの心の触覚に現れてくるイメージに注意しながら、次のことをそれぞれ「感じ」たり触れたりしているつもりになってください。そして、示唆されるイメージを、評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・砂は
- ・木綿の布地は
- ・毛皮は
- ・ピンで刺した痛みは
- ・生ぬるい風呂の温かさは

#### <運動感覚>

あなたの心の腕や脚、唇に現れてくるイメージに注意しながら、次のそれぞれの行為を行っているつもりになってください。そして、示唆されるイメージを、評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・二階に駆け上がることは
- ・溝を飛び越すことは
- ・紙に円を描くことは
- ・高い棚の上に手を伸ばすことは

- ・何かを道からけ飛ばすことは

#### <味覚>

あなたの心の口に現れてくるイメージに注意しながら，次のそれぞれの味をみているつもりになってください。そして，示唆されるイメージを，評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・塩は
- ・砂糖は
- ・みかんは
- ・ゼリーは
- ・あなたのお気に入りのスープは

#### <嗅覚>

あなたの心の鼻に現れてくるイメージに注意しながら，次のそれぞれの匂いを嗅いでいるつもりになってください。そして，示唆されるイメージを，評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・換気の悪い部屋は
- ・料理中のキャベツは
- ・焼き肉は
- ・塗りたてのペンキは
- ・新しい革製品は

#### <内臓感覚>

あなたの心に現れてくるイメージに注意しながら，次のそれぞれの感覚を思い浮かべてください。そして，示唆されるイメージを，評定尺度に指定されている明瞭さと鮮やかさとの段階によって示されるとおりに分類してください。

- ・疲れは
- ・空腹は
- ・のどの痛みは
- ・ねむけは

- ・たくさん食べて満腹なときは

E. California Adult Q-set 版 Ego-Resiliency 尺度 (ER 尺度 : 中尾・加藤, 2005)  
(研究 2 で使用)

教示 :

次の質問を読み, 当てはまると思うところに丸をつけてください。(1 : 全く当てはまらない~7 : 非常によく当てはまる)

項目 :

<対他 ER>

- ・私は, 人から自分に対する好意や受容を引き出すことができる
- ・私は, ころがあたたく, 親密な関係を持つことができる
- ・私は, みんなの集まる場で, 存在感がある
- ・私は自分からユーモアを言える
- ・私は人の気持ちや微妙な表情の変化を読みとることが上手だ
- ・私は人のユーモアにのれる
- ・私は人と関係を取るのが上手だ
- ・私は大切な問題の本質を見抜くことができる
- ・私は, 本当に頼りがいがあり, 責任感がある

<対自 ER>

- ・私は基本的に不安が強い
- ・私は, いろんなことであれこれ考えてしまい, それらが頭から離れないことが多い
- ・私は現実あるいは想像上の脅威 (恐れ) に対してもろい
- ・私は, 自我が弱く, ストレスがかかると上手く振る舞えない
- ・私はいつも自分のことをダメだダメだと思っている
- ・私は, 運命にほんろうされ, つらい思いをしてきたと感じる
- ・私は, 自分のちょっとした欲求不満やイライラした気持ちに過度に反応してしまう

## F. 余暇活動に関する調査（研究 3 で使用）

教示：

あなたの普段の余暇の過ごし方についてお聞きします。この一カ月に、あなたはこの中にある過ごし方をどのくらいの頻度でしますか。（5：毎日，4：週 1 回以上，3：月 1 回以上，2：たまにする，1：しない）

項目：

- ・本を読む：
  - ・小説
  - ・詩（短歌や俳句も含む）
  - ・文学作品
  - ・マンガ
  - ・その他（        ）※括弧内に自由記述
- ・雑誌を読む
- ・新聞を見る
- ・音楽を聞く：
  - ・J-POP
  - ・洋楽
  - ・クラシック音楽
  - ・その他（        ）※括弧内に自由記述
- ・テレビを見る：
  - ・バラエティー
  - ・ドラマ
  - ・アニメ
  - ・ニュース，ドキュメンタリー
  - ・その他（        ）※括弧内に自由記述
- ・映画を見る（テレビや DVD）で見ることも含む
- ・インターネットをする
- ・ゲームをする



- ・スポーツ：
  - ・ 参加する
  - ・ 観戦する
- ・ 個人的に勉強を続けている
- ・ 散歩をする
- ・ 何もしない

#### G. 余暇活動（読書活動）に関する質問群（研究 4 で使用）

教示：

ここでは、あなたの普段の余暇の過ごし方についてお聞きします。以下の活動について、あなたは普段どのくらいの頻度でしますか。（5：毎日，4：週 1 回以上，3：月 1 回以上，2：たまにする，1：しない）

項目：

- ・ 小説や文学作品を読む
- ・ 詩歌を読む
- ・ マンガを読む
- ・ それ以外の本を読む
- ・ テレビドラマを見る
- ・ アニメを見る
- ・ それ以外のテレビ番組を見る
- ・ 映画を見る
- ・ ゲームをする

#### H. 批判的思考態度尺度（平山・楠見, 2004）（研究 4 で使用）

教示：

あなた自身のことについておうかがいします。以下のことがらについて、あなたの経験や行動、考えに、どのくらいあてはまるか、「当てはまらない」から「当てはまる」までの 5 段階から一つ選んでください。（5：当てはまる，

4: やや当てはまる, 3: どちらともいえない, 2: あまり当てはまらない, 1: 当てはまらない)

項目:

<探究心>

- ・いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい
- ・生涯にわたり新しいことを学びつづけたと思う
- ・さまざまな文化について学びたいと思う
- ・自分とは違う考え方の人に関心を持つ

<客観性>

- ・いつも偏りのない判断をしようとする
- ・物事を決めるときには、客観的な態度を心がける
- ・一つや二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする
- ・自分が無意識のうちに偏った見方をしていないか振り返るようにしている

<証拠の重視>

- ・結論をくだす場合には、確かな証拠があるかどうかにかかわる
- ・判断をくだす際には、できるだけ多くの事実や証拠を調べる
- ・行動をとるときは、はっきりした根拠に基づくようにしている

<論理的思考の自覚>

- ・誰もが納得できるような論理的な説明をしようとする
- ・他の人の考えを自分の言葉でまとめてみる
- ・議論をするときには、その前提や用語の定義を正確にとらえて考えようとする

<熟慮>

- ・何かを決めるとき、時間をかけて慎重に考える方だ
- ・実行する前に考えなおしてることが多い方だ

## I. 日本語版移入尺度（研究 5, 研究 6 で使用）

教示:

前のページの物語を読んでいたときに体験したことについて以下の質問を

読み、当てはまると思うところに丸をつけてください。(7：非常に当てはまる, 6：当てはまる, 5：やや当てはまる, 4：どちらともいえない, 3：あまり当てはまらない, 2：当てはまらない, 1：全く当てはまらない)

項目：

- ・物語を読んでいるとき、物語の中で起こった出来事を簡単に思い描くことができた
- ・物語を読んでいるあいだ、この部屋で起きていることが気になった
- ・物語で描かれている場面に自分がいるように感じた
- ・物語を読んでいるあいだ、物語に入り込んでいるように感じた
- ・物語を読み終わったあと、すぐに頭を切り替えることができた
- ・読んでいるとき、この物語の結末を知りたいと思った
- ・この物語は自分の感情に影響を与えた
- ・どうなればこの物語が違う結末になったかを考えた
- ・物語を読んでいる間、気持ちがあちこちにそれた
- ・物語の中で起きた出来事は、自分の日常生活にも関連することだと思う
- ・物語の中の出来事に触れて自分の人生が変わったと思う
- ・「おじいさん」の様子をはっきりとイメージすることができた
- ・「おばあさん」の様子をはっきりとイメージすることができた
- ・「千代紙」の色や形をはっきりとイメージすることができた
- ・「美代子さん」の様子をはっきりとイメージすることができた

J. 物語課題例 (Komeda & Kusumi, 2006) (研究 7, 研究 8 で使用)

1. 今日も勉強しないまま一日が終わってしまった。
2. 朝になって、昨日の深酒を今さらながら後悔した。
3. ぼんやりとした頭で、明日の試験のことを考えた。
4. 明日の試験は、非常に大事な試験である。
5. したがって、なんとか合格しなくてはならない。
6. 焦ってはみたものの、どうしても勉強が手につかない。
7. しばらくして、なつかしい友人から電話がかかってきて、今夜会わない

- かと誘われた。
8. 再会の喜びに胸おどらせ、友人と食事に行く用意をはじめた。
  9. 試験の朝がやってきた。
  10. 今まで勉強しなかったことを激しく後悔しながらも、学校に行く準備をした。
  11. 学校に着くと、周りの友人は、まったく勉強していないと口々に言っている。
  12. それを聞いて少しは落ち着きながら、なんとかベストをつくすことを考えた。
  13. 試験問題が配られ、目を通してみて、あ然とした。
  14. 問題が、まさかこれほど易しいとは予想外だった。
  15. 最後までみても、答えられない問題は見当たらなかった。
  16. 空欄をうめているとあっというまに、試験終了の合図になった。
  17. 試験から、すぐに一週間が過ぎた。
  18. この一週間は、毎日とても楽しかった。
  19. あんなに試験が易しいのなら、勉強しなくて良かったなと思った。
  20. 一時間ほど経って学校に着くと、掲示板に合格者の番号が貼りだされていた。
  21. 掲示板の前に、クラスの友人が集まっているのが見えた。
  22. テストのときに、まったく勉強していないと言っていた友人たちだ。
  23. 彼らのほとんどが、合格していた。
  24. ますます安心して、自分の番号を探そうと掲示板に目を走らせ、ほっとした。

#### K. 読解の評定に関する尺度（研究 7，研究 8 で使用）

教示：

以下の質問を読み、先ほど読んでいただいた物語についてあてはまるところに丸をつけてください。（5：そう思う，4：ややそう思う，3：どちらともいえない，2：あまりそう思わない，1：そう思わない）

項目：

＜物語課題への評価＞

- ・この物語のテーマに興味を持った。
- ・この物語は読みやすかった。

＜物語課題への没入＞

- ・この物語の出来事は自分の体験と似ていると感じた。
- ・物語に入り込むことができた。
- ・主人公の立場に立っているように感じた。
- ・冷静な立場から物語を読んでいた。
- ・自分の立場に置き換えて考えながら読んだ。

#### L. 感情喚起尺度（研究 7，研究 8 で使用）

教示：

次のことばについて、先ほどの物語を読んでいるときにどれくらい感じたか、あてはまるところに丸をつけてください。（7：強く感じた，6：感じた，5：やや感じた，4：どちらともいえない，3：あまり感じなかった，2：感じなかった，1：まったく感じなかった）

項目：

- ・ 苦しい
- ・ 不愉快な
- ・ ゆううつな
- ・ 恐ろしい
- ・ むなしい
- ・ 哀れな
- ・ 寂しい
- ・ いらいらした
- ・ 不安な
- ・ 悔しい
- ・ 羨ましい

- ・ 気安い
- ・ 照れくさい
- ・ ドキドキした
- ・ 安心した
- ・ 気楽な
- ・ ほこらしい
- ・ 恋しい
- ・ こころよい
- ・ 懐かしい
- ・ うれしい
- ・ 面白い

## 本論文と公刊されている論文との対応について

本論文は、公刊されているものと未発表のものとの構成されている。以下にその対応について記す。ただし、公刊されているものについては加筆・修正を行っている。

### 第1章 序論：

未発表

### 第2章 物語読解における没入体験：

小山内秀和・楠見孝 (印刷中). 物語世界への没入体験——読解過程における位置づけとその機能 心理学評論.

### 第3章 日本版文学反応質問紙の作成：

小山内秀和・岡田斉 (2011). 物語理解に伴う主観的体験を測定する尺度 (LRQ-J) の作成 心理学研究, 82, 167-174.

### 第4章 文学的体験と読書、余暇活動との関連

#### 第1節 女子大学生における文学的体験傾向と読書習慣の関連に関する調査的検討（研究3）：

小山内秀和・岡田斉 (2011). 日本版 Literary Response Questionnaire の妥当性の検討（2）——読書習慣や余暇活動との関連 日本心理学会第75回大会発表論文集, 870.

#### 第2節 文学的体験傾向が読書活動に及ぼす効果に関する調査的検討（研究4）：

小山内秀和・楠見孝 (2012). 物語体験の個人差が読書習慣に及ぼす影響——成人を対象としたモデル化の試み 日本心理学会第76回大会発表論文集, 845.

#### 第3節 まとめ

未発表

## 第5章 物語読解における没入体験の生起に関する検討

### 第1節 日本語版移入尺度の作成および信頼性と妥当性の検討（研究5）：

未発表

### 第2節 物語への没入傾向が移入体験の生起に及ぼす効果に関する調査的検討（研究6）：

Osanai, H., & Kusumi, T. (2013, July). *Do individual differences in literary response predict narrative transportation?* Poster presented at the Twenty-third Annual Meeting of the Society for Text and Discourse, Valencia, Spain.

### 第3節 まとめ

未発表

## 第6章 没入体験が物語読解に及ぼす効果

### 第1節 没入体験傾向が物語読解過程に及ぼす効果に関する実験的検討（研究7）：

小山内秀和・岡田斉 (2010). 読解時の主観的体験が物語理解に及ぼす効果  
日本心理学会第74回大会発表論文集, 662.

### 第2節 没入教示が物語読解過程に及ぼす効果に関する実験的検討（研究8）：

Osanai, H., & Kusumi, T. (2012, July). *The effects of individual differences of absorption on narrative comprehension.* Poster presented at the Twenty-Second Annual Meeting of the Society for Text & Discourse, Montreal, Canada.

### 第3節 まとめ

未発表

## 第7章 総合的考察



**第 1 節 本論文で得られた成果：**

未発表

**第 2 節 没入体験に関連する心理・環境的要因：**

未発表

**第 3 節 物語読解過程における没入体験の位置づけ：**

小山内秀和・楠見孝 (印刷中). 物語世界への没入体験——読解過程における  
位置づけとその機能 心理学評論

**第 4 節 物語への没入から物語読解を捉えなおす試み**

未発表

**第 8 章 結論：**

未発表

## 謝 辞

本論文は、筆者が文教大学人間科学部と同大学院人間科学研究科において2004年から2007年にかけて行った研究、および京都大学大学院教育学研究科に籍をいただいた2011年から2014年にかけて行った研究をまとめたものです。研究を遂行し、学位論文として執筆するに当たり、多くの方々からのご指導、ご指摘、そしてお力添えをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

まず、現在の指導教員として筆者を今日までお導きくださった、京都大学大学院教育学研究科の楠見孝先生に、心より感謝申し上げます。先生には、筆者が日本心理学会で発表させていただいたときにお声をかけていただき、博士後期課程に編入学したいという筆者の申し出を快くお許しいただきました。そして編入学後も、研究の進め方、新しい問題のご指摘、統計分析の手法、そして研究を行う者としての姿勢など、ここには書きつくすことができないほど数多くのことを、親身になってお教えいただきました。

そして、筆者が「物語」という研究テーマを選ぶきっかけを作ってくくださった、文教大学人間科学部の岡田斉先生に、心より感謝申し上げます。先生には、学部3回生から修士課程修了まで、指導教員として研究の基礎からご教授をいただき、学部4回生のときには、本論文でも取りあげたLRQの翻訳を勧めてくださいました。そのほか、心理士として職に就いていた期間から現在に至るまで、公私にわたりさまざまなご相談をさせていただき、筆者が京都で研究を続けられるようにと励ましていただきました。

お二方のご指導がなければ、筆者が研究を志すことも、また研究をここまで続けることもできなかったことと思います。改めて深く、御礼申し上げます。

そして、京都大学大学院教育学研究科の子安増生先生、吉川左紀子先生、齊藤智先生、野村理朗先生、高橋雄介先生には、大学院コロキウムや院ゼミなどを通してさまざまなことをお教えいただきました。とりわけ、臨床心理学をこれまで専門としてきた筆者に不足していた、認知心理学の基本的な知識や考え方、研究計画の立て方と遂行の仕方を学ばせていただき、研究への新たな視点や問題点なども指摘していただきました。心より感謝申し上げます。

京都大学白眉センターの米田英嗣先生には、筆者が修士課程に在籍したとき

から今日まで、たくさんのアドバイスをいただきました。特に、本論文の研究 7 と研究 8 で用いた物語課題の使用を快くお許しいただいただけでなく、文章理解に関する知見や実験計画、データの分析に至るまで、さまざまなことをお教えいただき、さらには本論文の草稿をお読みいただき、数々の貴重なコメントとアドバイスとを頂きました。改めて感謝申し上げます。

本論文につながる研究を 3 年間行うことになりました、京都大学大学院教育学研究科の教育認知心理学講座では、多くの方々に、編入学後の公私にわたって大変お世話になりました。特に、井関龍太さん（現・理化学研究所）、常深浩平さん（現・いわき短期大学）、猪原敬介さん（現・福井大学）には、慣れない環境で右往左往する筆者に研究のアドバイスをしていただいただけでなく、議論をさせていただくなかで言語や文章理解に関するたくさんの知識をいただき、物語を研究することの面白さに気づかせていただきました。また、飛び入りで同期の末席に加えさせていただきました中山真孝さん、谷田勇樹さんには、実験心理学そのものの考え方や、実験を通して現象を見るという、まさに心理学の基礎の部分について教えていただき、多くの刺激をいただきました。そして、ここではお一人お一人の御名を記すことができないのがとても心苦しい限りですが、講座の先輩、後輩の方々には、授業や院生室などでの議論をはじめ、個人的なサポートもたくさんいただきました。そのほか、松尾博美さん、大竹善明さん、高橋志織さんはじめ、京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座を支える数多くの方々には、研究を進めるなかで多大なサポートをいただきました。改めて深く御礼申し上げます。

学外では、国際基督教大学の森島泰則先生と、法政大学の福田由紀先生からのお力添えをいただきました。先生方には、ディスコース心理学研究部会という、筆者と京都大学の皆様との接点を作っていただき、またそこでの議論を通して、文章を研究することについてたくさんの示唆をいただきました。心より感謝申し上げます。また、大阪大学の野村弘平さんには、常深浩平さんとともに「関西物語学研究会」を企画、参加させていただくなかで、物語を研究することの奥深さなど、たくさんのことを教えていただきました。心よりお礼申し上げます。

この研究は、筆者が文教大学に在籍していたときから続けてきたものですが、

研究を始めた最初の4年間にお世話になりました，文教大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻の皆様にご感謝申し上げます。特に，岡田斉先生のゼミの先輩である山本直介さん，同期の大部聡子さん，小形泰代さんには，本論文の基礎となる部分について数々のコメントとアドバイスをいただきました。心より感謝申し上げます。

そして，お忙しいなか本論文の草稿に目を通していただきました，京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座の橋本京子さん，岡隆之介さん，白砂優希さんには，物語読解を専門としない立場からの貴重なコメントをいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

本論文は，調査参加者，実験参加者を合わせて，2,000名を超える方々のご協力の上に成されたものです。皆様の貴重なご厚意とご協力がなければ，本論文をこの世に上梓することはできませんでした。改めてここに，心より感謝申し上げます。

また，本論文で取りあげたLRQの原著者である，アルバータ大学のDavid S. Miall先生と，移入尺度の原著者である，ノースカロライナ大学のMelanie C. Green先生には，日本語版尺度の作成という筆者の申し出を快諾いただきました。改めてここに御礼申し上げます。

本論文の研究の一部は，平成24年度～25年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費，課題番号24・5196）の助成を受けました。ここに記して御礼申し上げます。

最後に，これまで筆者を育て，支えてくれた両親と祖父母，両親と同じくらいの愛情を注いでくれた伯父夫妻と叔父夫妻，そして幼少よりきょうだいのように過ごしてくれた従弟妹たちに，限りなく深い感謝を申し上げます。

2014年（平成26年）1月28日

小山内 秀和